

令和5年度

滋賀県平和祈念館企画展示等実施報告書



令和7年（2025年）3月

滋賀県平和祈念館

はじめに

滋賀県平和祈念館は、平成 24 年 3 月に「語りつぐ 平和へのねがい」を指針として開館し、その後、県民のみなさまのご支援により順調に活動をひろげ、すでに 13 年が経過しました。

当館の展示室は、基本展示と企画展示によって構成しておりますが、企画展示は開館以来、年間 2～3 回程度の展示替えを行い、令和 6 年度末までに計 36 回の企画展示を開催してきました。しかしながら、当館では企画展示図録の刊行を行っていないため、これらの企画展示の内容について、会期終了後に改めて県民のみなさまにご覧いただけるような刊行物としては、毎年刊行している年報で展示内容のごく一部を知っていただく程度にとどまっております。

このため、当館では企画展示終了後に、展示で使用したパネルやモノ資料の写真等を掲載した展示報告書を年度ごとに取りまとめて編集・発行する取り組みを一昨年度から開始いたしました。今回刊行する『令和 5 年度企画展示等実施報告書』は、その 3 冊目であり、令和 5 年度に開催した第 33 回企画展示「滋賀県民が見た中国の戦場」、第 34 回企画展示「暮らしの中の戦争—日々の生業と食事—」の 2 つの企画展示と令和 5 年度地域交流室展示「破られた約束—太平洋戦争下の日系カナダ人—」の内容を取りまとめたものです。

県民のみなさまが戦争の悲惨さや平和の尊さを学び、理解を深めるために当報告書を役立てていただければ幸いです。

令和 7 年（2025 年）3 月

滋賀県平和祈念館
館長 朝倉敏夫

例 言

- 1 本書は、滋賀県平和祈念館が令和5年度に開催した第33回・第34回企画展示および地域交流室展示の内容を取りまとめた報告書である。
- 2 本書に掲載した企画展示等の会期は、下記のとおりである。
 - ・第33回企画展示「滋賀県民が見た中国の戦場」
会期：令和5年7月1日～12月17日
 - ・第34回企画展示「暮らしの中の戦争―日々^{なりわい}の生業と食事―」
会期：令和6年1月5日～6月23日
 - ・令和5年度地域交流室展示「破られた約束―太平洋戦争下の日系カナダ人―」
会期：令和5年11月1日～令和6年2月25日
- 3 本書は、展示に際して使用したパネル等の内容に基づいているが、誤字・脱字などの修正を行ったほか、内容を一部省略したものがある。
- 4 各展示の開催および本書の作成にあたっては、多くの資料提供者と関係機関に御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

目 次

はじめに

例 言

第33回企画展示「滋賀県民が見た中国の戦場」	1
第34回企画展示「暮らしの中の戦争―日々 ^{なりわい} の生業と食事―」	47
令和5年度地域交流室展示「破られた約束―太平洋戦争下の日系カナダ人―」	77

滋賀県平和祈念館 第33回企画展示

滋賀県民が見た中国の戦場

(会期：令和5年7月1日～12月17日)



昭和18年に戦地を訪れた滋賀県からの慰問団の舞台を見つめる兵士たち

ごあいさつ

明治時代の日清戦争（1894～1895年）、日露戦争（1904～1905年）を経て大陸への進出を進めた日本は、昭和6年（1931年）の満洲事変以降は、中国との長期間にわたる戦争状態になり、それは昭和20年の終戦まで続きました。これらの戦争には、滋賀県からも多数の方が徴集・召集されて戦場に赴き、昭和初期に中国（中国東北部（満洲地域）を含む）で戦死された滋賀県民は7,000人以上に上ります。一方、従軍された方々以外に、慰問などのために中国戦線を訪れた滋賀県民もおられます。

今回の企画展示では、当時の中国やその周辺地域において、滋賀県民が体験した戦争に関する記憶を、滋賀県平和祈念館が長年にわたって収集してきた関係者の体験談や関連資料などで紹介します。

なお、今回の企画展示開催にあたりましては、資料収蔵者・提供者の皆様から多大なるご理解とご協力を賜りましたことに深くお礼申し上げます。

令和5年（2023年）7月1日

滋賀県平和祈念館

第1章 明治時代の戦争—日清戦争・日露戦争— バナー写真：旧大津陸軍墓地



陸軍歩兵第九連隊の将兵たちの墓碑群



日清戦争で戦病死された兵士たちの墓



大東亜戦争戦没者之碑



日露戦争の戦死
将校の墓碑

日清戦争

清国（1616～1912）の影響下にあった朝鮮では、1894年（明治27年）に日本や欧米諸国を追い払って、政治改革を行おうとする反乱（甲午農民戦争）が起き、戦乱状態になりました。これを収めるため、朝鮮政府は清国に援軍を求めましたが、日本もこれ

に対抗して朝鮮半島へ出兵しました。反乱軍は朝鮮政府と和解しましたが、日本は王宮を占拠して清国と対立し、1894年7月に日清戦争が始まりました。

近代的な軍備を持つ日本が優位に戦いを進め、1895年4月に下関で和平交渉が行われて、日清講和条約が結ばれました。戦争の結果、清国は朝鮮の独立を認めるとともに、台湾などの領土を日本へ譲り渡し、多額の賠償金を支払うことになりました。

なお、講和条約が結ばれた後も、日本は新たに領土となった台湾を平定するため、出兵は1895年11月末まで続きました。日清戦争（台湾平定のための出兵を含む）における日本側の死者は13,000人以上とされています。その大多数はコレラ、赤痢、腸チフスなどの感染症やビタミンB不足が原因で起こる脚気による病死でした。

日清戦争は、近代日本が海外で初めて行った本格的な戦争でした。当時、ほとんどの日本人は海外へ行った経験がなく、馴れない不衛生な環境下での軍事行動によって、多くの命が失われたのです。

【体験談—祖父は、台湾で赤痢で死んでるんですわ—】

後宮 敏夫さん（湖南省市）

私の祖父が、靖国神社に祀られるのにね、日清戦争のあとの台湾の平定に出かけて行って、台中なんですけども、嘉義っていうところで、野戦病院で赤痢で死んでるんですわ。で、戦場で死んだっちゃうことで、戦病死で。

もう、村の真ん中のね、大きな丘に特別な大きな墓を建ててもらって。もう将校で死んだから。兵隊でなしにね。兵隊のは別につくってるんですよ。墓地ね。

ほかの規格品みたいな墓石と違って。けども、そういう、将校で死んでるっていうことでもって、村のど真ん中にある丘の上にね、ごつつう立派な墓をつくってもうとんですよ、戦争中に。

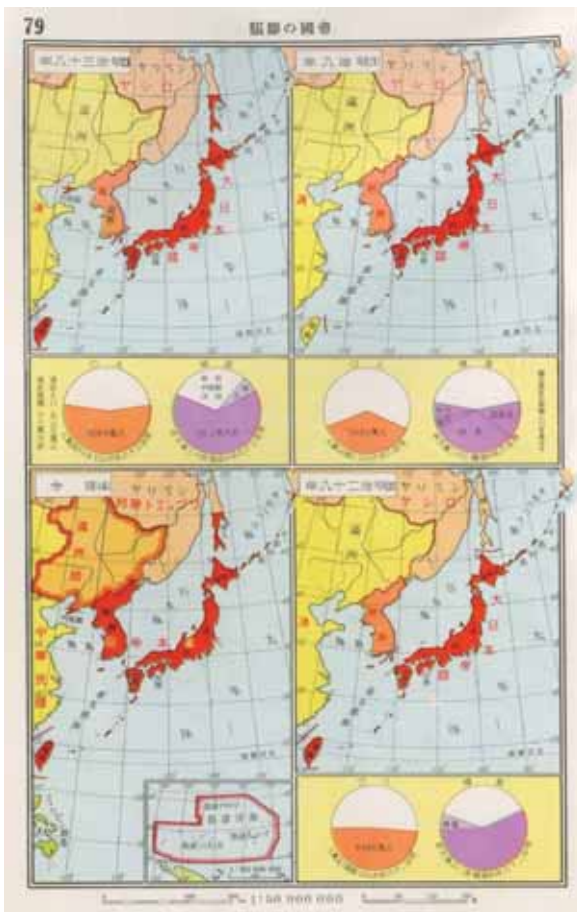


明治二十七八年戦役図（『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院 1938 年（昭和 13 年）訂正発行）による）



明治 19 年制式陸軍騎兵曹長軍衣

1886 年（明治 19 年）に定められた制式で、胸の紐が肋骨（あばら骨）のように見えることから「肋骨服」と呼ばれるタイプの陸軍軍服です。日露戦争後の 1906 年（明治 39 年）に軍装・略装が濃紺色から茶褐色（カーキ色）に変わるため、それ以前のもと考えられます。



帝国の膨張（『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院 1938 年（昭和 13 年）訂正発行）による）



明治二十七八年従軍記念絵馬（栗見大宮天神社所蔵）

旧大津陸軍墓地

大津には陸軍歩兵第9連隊が1875年(明治8年)から駐屯し、この連隊に伴う軍人墓地が、現在の大津市皇子が丘に営まれていました。戦後、国道161号バイパス建設工事に伴って敷地を北側へ拡張し、工事範囲にあった墓碑の移転が行われましたが、現在も当時の様子がうかがえます。

墓地内には、いくつかのグループに分かれて、将兵たちの墓碑や供養塔が建てられています。それぞれの墓碑に刻まれている文字を見ると、日清戦争や日露戦争で亡くなられた方々の墓碑があることが分かります。

死亡年月日から日清戦争で亡くなられた方々のものと推定される墓碑の分布を見ると、将校、下士官、兵士が各々の墓域に分かれて葬られています。墓碑の大きさも、階級別に決められていて、上等兵・一等兵・二等兵などの兵士たちの墓碑は一辺15cm角で、約200基あります。その数から、日清戦争で亡くなられた第9連隊所属の兵士たちの人数を実感することができます。

なお、日清戦争よりも多くの方が戦死された日露戦争では、この墓地内に個人の墓碑を建てたのは将校に限られ、それ以外の方々は、階級別に合葬墓が建てられました。



旧大津陸軍墓地の現状概略図



大津に置かれた陸軍歩兵第9連隊(1925年(大正14年)に京都に移駐)の動向(『満洲派遣記念』アルバム(1936年(昭和11年)発行)による)



盃(凱旋記念・解隊記念)



明治三十七八年従軍記章、凱旋記念の銀杯、感謝状



徴兵身体検査出頭令状、籤札氏名票

徴兵令によって満20歳の男子は徴兵検査を受けることが義務でしたが、検査の合格者全員が兵役につくわけではありませんでした。定員に応じて籤による抽選を行い、徴集する人物を決定しました。



日露戦争中に戦地から送られてきた手紙



明治三十七八年従軍記章、記章の証、凱旋記念の盃



征露記念の盆

日露戦争

清の国内では、欧米諸国を追い払おうとする動きが強まり、1899年（明治32年）には義和団という宗教団体が蜂起して、北京にある外国公使館を取り囲みました（義和団事件）。このため、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、ロシアなどの欧米諸国に日本を加えた8か国が、共同で出兵して義和団を鎮圧します。そのなかで日本が最も多くの兵を派遣していました。

ロシアは、建設中の鉄道が義和団によって破壊されたことを理由にして満洲に大量の軍隊を送り、その後も軍隊を引き上げずに、満洲を勢力下に置こうとしました。これを阻止しようとする日本とイギリスは、1902年（明治35年）に日英同盟を結んで対抗します。

日本では、ロシアとの開戦を主張する声が強まり、1904年（明治37年）2月に戦争が始まりました。日本は旅順や奉天（現在の瀋陽）などでロシア軍を破り、日本海海戦でもロシアのバルチック艦隊に勝利します。そして、アメリカの仲介によって日露講和条約（ポーツマス条約）が結ばれました。

この条約によって、朝鮮半島での日本の優越権が承認され、遼東半島を中国から租借する権利、長春・旅順間の鉄道とそれに付属する権利、そして南樺太をロシアから得ることになりました。朝鮮半島での優越権が認められた日本は、その後、韓国の外交権を奪って保護国とし、1910年（明治43年）には韓国を併合することになります。



旧大津陸軍墓地にあるロシア人捕虜の墓碑



日露戦場明細地図

日露戦争凱旋記念の石造物

日露戦争では、日本軍は日清戦争の4倍以上となる100万人以上の兵力を投入しました（国内での勤務者を含む）。日本側の死者も約8万人で、6倍以上です。

日露戦争に出征して帰国された方々が建てた記念碑や神社に奉納した石鳥居、狛犬などが、今でも滋賀県内各地に残されています。その一部を写真で紹介しましたが、皆さんの身近なところにもあるのではないのでしょうか？ 機会があれば探してみてください。



征露記念碑（東近江市八日市金屋 野々宮神社）



日露戦争からの凱旋を記念して神社に建てられた石鳥居
(東近江市能登川町 愛宕神社)



日露戦役記念火箸、旅順文鎮（日露戦歴記念）、
文鎮（大連埠頭・忠霊塔）

日清戦争と日露戦争で大国に勝利したことは、日本人にとって大きな成功体験として意識されました。旅順などの戦地巡拝がブームとなり、記念品が販売されるほどでした。

【体験談一戦前は、中等学校は5年生になると満韓旅行ですー】
藤堂 誠一さん（東近江市）
八日市中学校（現在の八日市高校）に通っていた藤堂誠一さんが、修学旅行について語っておられます。

修学旅行ちゅうのはね、戦前は中等学校は最後の5年生になると満韓旅行で、韓国とね、満洲のほうを大体1週間かけて旅行してくるんです。

ほいでその満洲は、船で大連へ上がってね、旅順、大連の、いわゆる日露戦争の戦跡地を見て、ほれからずうっと、日本はここでロシアと戦うて、ほんなんで、戦場を回って奉天まで行って、奉天から今度は逆に朝鮮のほうへ安奉線で、新義州から北朝鮮経由で、で、朝鮮のほう行って。大体1週間かけて満韓旅行で、満洲、韓国のところをね、旅行する。

ほんで1年生入ったときから毎月6円ずつ貯金。6円のうち4円が、4円50銭くらいでしたかね、授業料ですわ。ほれから50銭が交友会費と、今で言うたらクラブ活動費みたいもんですわ。そして、あとの1円がね、修学旅行積立金ですわ。



京都帝國大学生の修学旅行記念写真（旅順の 203 高地（爾靈山）にて）



県立八幡商業学校生の修学旅行記念写真（ソウルの崇礼門（南大門）前）



京都帝國大学による鮮満支旅行計画（1931 年（昭和6 年））

第2章 15年にわたる戦争の始まり

パナ－写真：日本軍の南京攻略を祝う滋賀県民たち



大津市役所前に集まって歓喜する滋賀県民たち

中国領土への勢力拡大 ～満洲事変へ～

1910年（明治43年）に韓国を併合した日本は、中国の領土への勢力拡大を目指します。1914年（大正3年）にヨーロッパで第一次世界大戦が始まると、イギリスと同盟を結んでいた日本はドイツに宣戦布告し、中国の山東省にあったドイツの拠点などを攻撃して占領します。翌年には、ドイツが中国で持っていた利権を日本に譲ることなどを求めた21か条の要求を中国に対して出し、一部はアメリカなどの反対もあって撤回しましたが、大部分を認めさせました。これをきっかけに、欧米諸国の日本に対する不信感が高まりました。

1931年（昭和6年）9月18日の夜、奉天市（現在の中華人民共和国遼寧省瀋陽市）郊外の柳条湖付近の南満洲鉄道線路で、爆弾が爆発する事件が起きました。日本陸軍の関東軍は、この事件を中国軍が引き起こしたものとして軍事行動を開始し、満洲事変が始まりました。しかし、現在では、柳条湖での爆発事件は関東軍自身が起こしたものだということが明らかにされています。

日本政府は満洲事変について「不拡大方針」を発表しましたが、軍部は独自の判断で軍事行動を拡大していき、1932年（昭和7年）1月には満洲全域を占領しました。

「満洲」とは

かつて、中国の東北部は「満洲」と呼ばれていま

した。17世紀に、中国に「清」という国を建国した人々は、自らの民族名を「ジュシェン（女真）」から「マンジュ（満洲）」に改めましたが、やがて彼らが暮らしていた地域が「満洲」と呼ばれるようになり、地名として定着したものです。ちなみに「マンジュ（満洲）」という民族名は、文殊菩薩を信仰していたことに由来するという説もありますが、諸説あって本当のところは不明です。

現在では「洲」という漢字が常用漢字ではないため、学校の教科書では「満州」と表記されることが多く、アメリカのカリフォルニア州やロシアの沿海州などのような州の名前だと思っている人がいるかもしれませんが、違いますので誤解しないでください。

満洲国

満洲事変により日本軍は満洲を占領し、1932年（昭和7年）3月1日には、中国の黒竜江省・吉林省・遼寧省を領域とする満洲国の建国宣言が出されました。首都は新京（本来の地名は長春）です。同年9月には、日本は満洲国との日満議定書に調印し、満洲国を正式に承認しました。

日本民族・満洲民族・漢民族・モンゴル民族・朝鮮民族の「五族協和」による「王道楽土」建設をスローガンにし、清国の最後の皇帝だった溥儀を元首として、各大臣は満洲民族が占めていましたが、政治の実権を握っているのは日本でした。中国の領土の一部に建国された日本の傀儡国家であるとして満洲国の独立を承認しなかった国が多く、承認したのは日本の同盟国などに限られていました。

満洲国には、不景気が続く日本の農村から多くの移民が送られました。1944年（昭和19年）2月には滋賀県報国農場が開設されて、滋賀県の若者たちが奉仕隊員として派遣され、農作業に従事していました。

満洲で働いていた日本人は、1945年（昭和20年）8月にソ連軍が侵攻してくると、攻撃から逃げて帰国を目指しますが、捕虜になってシベリアに抑留され、何年間も帰国できなかった方も少なくありません。



満洲国国旗



昭和六七年満洲事変関東軍記念写真帖』(1933 年(昭和 8 年)陸軍恤兵部発行)、『昭和六・七年満洲事変出動記念写真帖』(発行年不明、朝鮮龍山野砲兵第二十六連隊本部発行)



満洲物産地図【『少年倶楽部』の附録】(1932 年(昭和 7 年)3 月発行)、満洲派遣記念絵皿(第 16 師団)1936 年(昭和 11 年)、大満洲国建国功労章、昭和六年乃至九年事変従軍記章、凱旋記念風呂敷、帝国及列強の陸軍軍備



昭和六七年満洲事変関東軍記念写真帖』の中には、国際連盟調査団の写真もあります。



『満洲派遣記念』アルバム(1936 年(昭和 11 年)歩兵第九連隊満洲派遣隊発行)、同アルバム中の「歩兵第九連隊行動概見図」



中華國恥掛圖

発行年が書かれていませんが、1930 年前後に中国で作られた地図と考えられます。この当時、何種類もの国恥地図が発行されており、欧米諸国や日本によって奪われた範囲を図示して、国民教育に利用されたもののようです。

国際連盟からの脱退

中国は満洲における日本の軍事行動を非難し、国際連盟に提訴するとともに、日本製品のボイコット運動を展開しました。

国際連盟は実情を調査するためにイギリス人リットンを代表とする調査団を派遣し、その報告をうけて1933年(昭和8年)2月の国際連盟臨時総会では、満洲を占領している日本軍の撤退を求める勧告案が可決されました。

当時の日本は、イギリス・フランス・イタリア・ドイツとともに国際連盟の常任理事国でしたが、国際連盟の勧告を不服として1933年(昭和8年)3月に連盟脱退を通告しました。

ナチスが政権を握ったドイツも、1933年の10月に国際連盟を脱退し、1937年に脱退するイタリアとともに、1940年に日独伊三国同盟を結成することになっていきます。



満洲事変要図(『新選歴史精図 国史之部』(帝国書院1938年(昭和13年)訂正発行)による

【体験談一朝礼の時間に、国際連盟脱退の話を聞きましたー】

櫻本 善兵衛さん(日野町)

昭和8年(1933年)でしたかな、わしが小学校の時ですわ。覚えてますけどね。小学校の朝礼の時間にね、校長先生が「今日は日本の国のあの、松岡洋右氏がジュネーブにおいて国際連盟を脱退した。」と。これはもう、全世界が日本をあの、目の仇にしてやなあ、日本が立ち行かんようにいろんな面であの、制裁を加え、ちゃんともう、松岡洋右もやな、たまりかねて単独でジュネーブで国際連盟も脱退してしもたんや。これは日本の国が、ほれだけ全世界から、いろんな経済的に、物資的に何もかもで責められてるにや、いうことで。昭和8年の時にね、わしその、小学校何年生やった知らんけども。校長先生が松岡洋右とはっきり、ジュネーブの国際連盟で。国際連盟に入ってたから、ほれを聞いたんや。

ほれがだんだん、こえてきて今の大東亜戦争の時にも完全に日本が経済封鎖を受けたということになったちゅうことを、私らは幼な心から、ほういう聞き方をしてたから。それをどっか一角あけて日本の立ち行くようにしていこうというやつが、南方の各植民地に入ってたがために、それが逆転してしもて、植民地がみな解放されて、独立国になったちゅうので。



国際連盟脱退の詔書

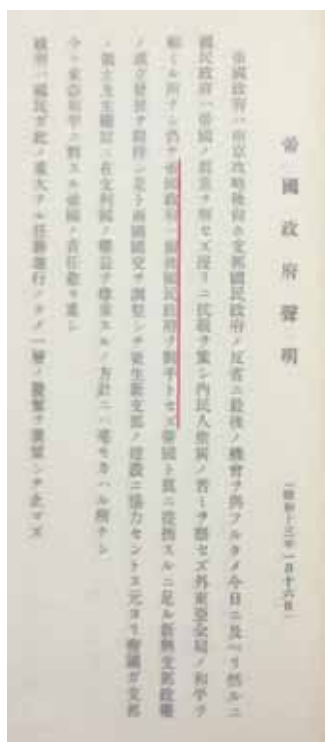
日中戦争の本格化

1937年(昭和12年)7月7日に北京郊外の盧溝橋で、日本軍と中国軍の銃撃戦が起き(盧溝橋事件)、これを発端として日本と中国の間で本格的な戦争が始まりました。しかし、両国による宣戦布告は行われなかったため、この戦いは当時、戦争ではなく「支那事変」と呼ばれました。

日本軍は12月13日に中国の国民政府の首都であった南京を占領します。この際に、日本軍将兵によって非戦闘員も含めた人々への略奪や殺害が行われ、多くの死傷者が出ました（南京事件）。

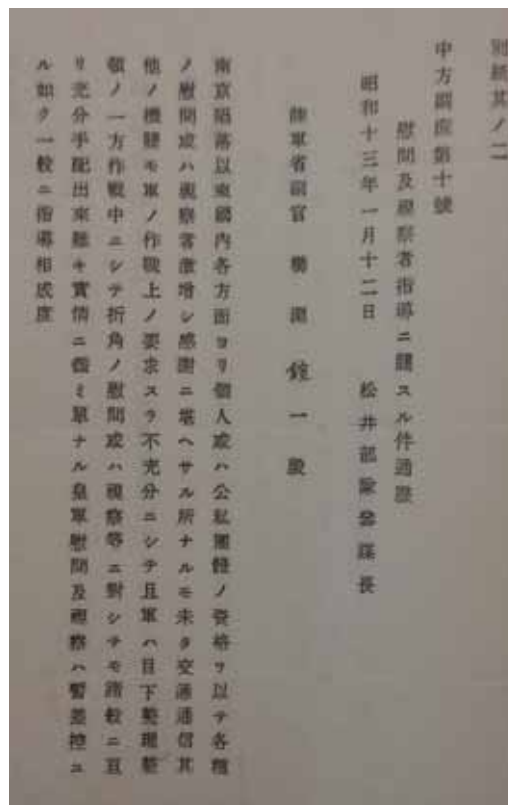
中国国民政府は南京を占領されても、内陸の重慶を首都にして日本への抗戦を継続します。これに対して、日本政府は1938年（昭和13年）1月16日に「爾後、国民政府を相手とせず」という声明を発表し、戦争の目的が日本・中国・満洲国の協力による「東亜新秩序」の建設にあるとしました。そして、国民政府の有力指導者の一人である汪兆銘を重慶から脱出させて、1940年（昭和15年）には南京に新たな政府が樹立されることになります。

中国は、日本の軍事行動を批判するアメリカやイギリスなどの支援を受けて粘り強く抵抗を続け、戦争は長期化します。日本の軍事予算は増大し、1938年（昭和13年）度には一般会計歳出の約4分の3を占めるほどになりました。

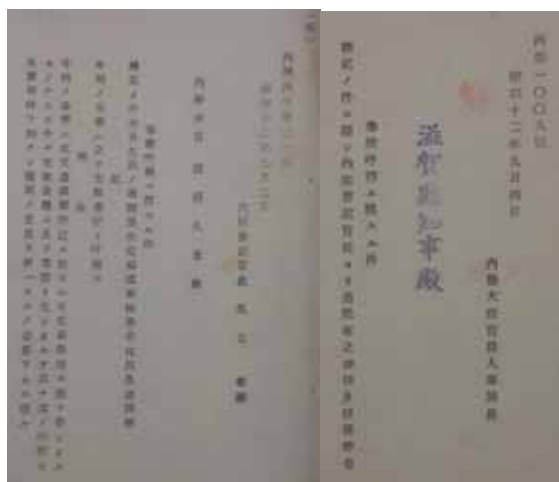


「国民政府を相手とせず」という政府声明（滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-2」）

重慶に首都を移して抗戦を続ける中国国民政府に対して、日本政府は「相手とせず」と声明し、以後は交渉の相手と見なさないことにしました。これによって国民政府との平和の道は閉ざされてしまいました。



慰問・視察を差し控えるように指導してほしい旨の通牒（滋賀県立公文書館所蔵文書「令-2-262」）



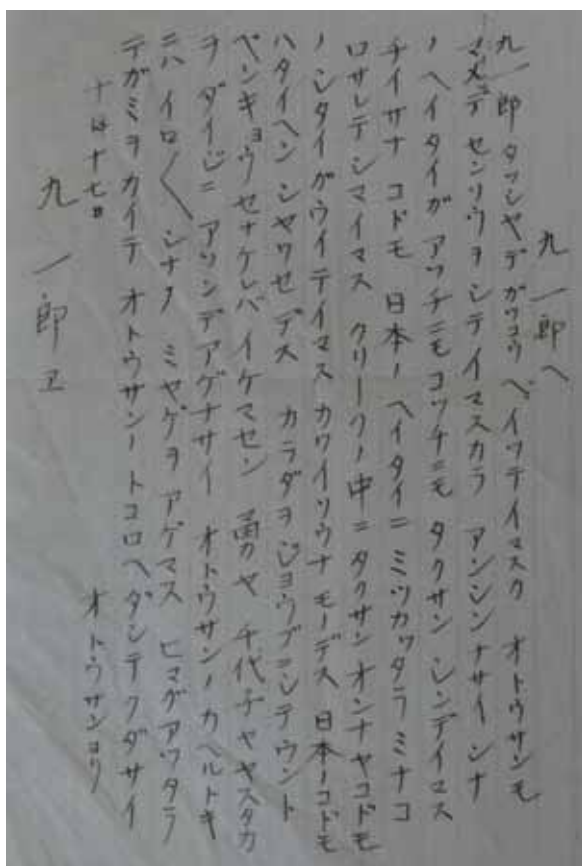
昭和12年の事変の呼称を「支那事変」とする閣議決定に関する通牒（滋賀県立公文書館所蔵文書「令-2-2620」から抜粋）

※「支那事変」は、現在では「日中戦争」という名前で教科書などに掲載されています。

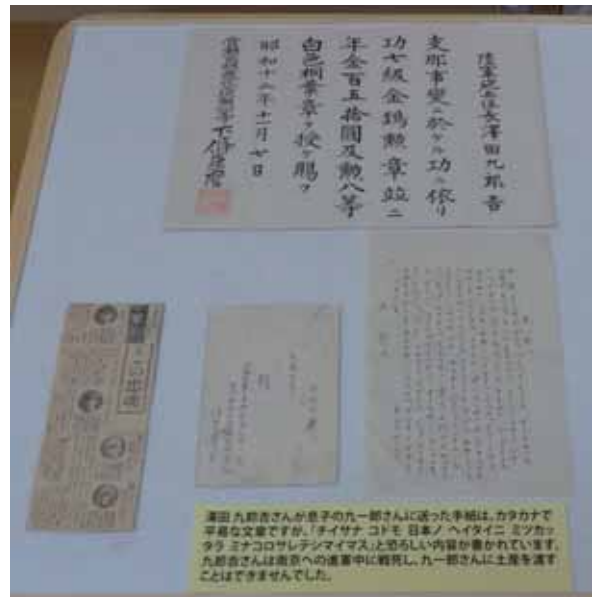
今回の企画展示では、展示資料に「支那事変」あるいは「支那」という用語が書かれているものがありますが、戦争当時に使用されていた用語として御理解をお願いいたします。



盧溝橋の遠景



澤田九郎吉さんが息子の九一郎さんに送った手紙は、カタカナの平易な文章ですが、「チイサナコドモ日本ノヘイタイニミツカッタミナコロサレシマイマス」と恐ろしい内容が書かれています。九郎吉さんは南京への進軍中に戦死し、九一郎さんに土産を渡すことはできませんでした。



澤田九郎吉さん関係資料

功七級金鵄勲章状、戦地から送った手紙、新聞（戦死記事）切り抜き

【体験談—ぐずぐずしている間に、よその部隊に一番乗りされました—】 三木 辰六さん（守山市）

支那事変が始まった時は、まだ京都の歩兵第9連隊に初年兵でおりました。（昭和）12年（1937年）の1月の10日に9連隊に入隊したのかな。

動員令が8月27日に下って、9月に大阪港を出港してね。天津の下にパークという所があって、そこへ上がって、天津の方からずーっと、あそこは湖北省というのかな、黄河の方に向けて、敵とはあんまり遭遇しなかったけれども、討伐というかたちで行ったわけです。

戦争中やから日記なんか書けへんけど、後から思い出して書いているから日時なんかはそう正確なものではないわね。こんなふうに戦争していたんですね。（場所）南京戦ですわ。南京を攻略する時のあれですからね、常州という大きな都市があるんですね、そこを陥落させて、すぐに今度は漢陽へ向かって進撃していった、そりゃあ各部隊がダーと南京へ行っているからね、敵がほんまに浮足だっていたわけですね。

圧勝ですね。この時に初めて敵の戦車が来おってん。それが第3小隊というのが（我々の）8中隊の中に1小隊、2小隊、3小隊があって、3小隊がここ

で防御というのか、命令があるまでしておったんやね。中隊はここに山があって、山の上に陣地をもってね、敵が来たら山の上から撃ったら良いという調子やったんやけどね。その後に第7中隊とか大隊本部とかがずーっと付いて来ておったんです。本当の先頭を切って、うちの中隊は行っておった訳ですわ。ところが、ここに強力な敵がいたわけや、それで向こうから砲撃して来おる。後になったら戦車がダーと来る、絶対下がったらあかんということがあから頑張っただね。それで死んだのが3人やったと思うんですけどね。その明るる日の晩になったら敵は皆、南京に逃げて帰りおったんですわ。(それが初めての)戦闘らしい戦闘でした。その前もパパンとやることはあったけどね。

南京をこれから先に攻めていって、そう戦闘らしい戦闘はしなかったけれどね。うちの部隊はここで3日間ほど手間取って進めないわけやね。それで、よその脇坂部隊かが南京城に1番乗りしおったんやね、神奈川の方の師団かな。ここでグズグズ私らがしている間に、こっちのエエ道をダーッと行って。



三木辰六さん関係資料

手紙(1937年(昭和12年))、図囊、ゲートル

【体験談—学校時代は、何遍も旗行列、提灯行列がありました—】 佐々木 三保子さん(大津市)

(大津の)市役所は、あの時分はまだ小さかったなあ。浜大津の電電公社がありますわなあ。あの向かいに公民館がありますやろ。あれが市役所でした。あそこの前のところは、ダーと広場でした。支那事変のときに南京が陥落したやとか、どこやらが陥落

したやとか、旗行列に提灯行列がありましたしね、晩でも提灯を持ってね、火点けてね、歩きましたよ。私ら学校時代は何遍も何遍もありましたよ。

学校から皆連れて行かしたしね。旗持って、軍の歌をうとて、歩きました。大津を練って歩きましたわ。提灯もかわいらしいのをもらいましてね、蝋燭の火を点けてね、それ持ってね、晩に歩きましたわ。ほんでね、市役所の前で集合してね、いつもいつももありました。支那事変の頃はね、そんなんでありましたけどね。大東亜(太平洋戦争)になってからはね、そんなことはね、全然ないわね。



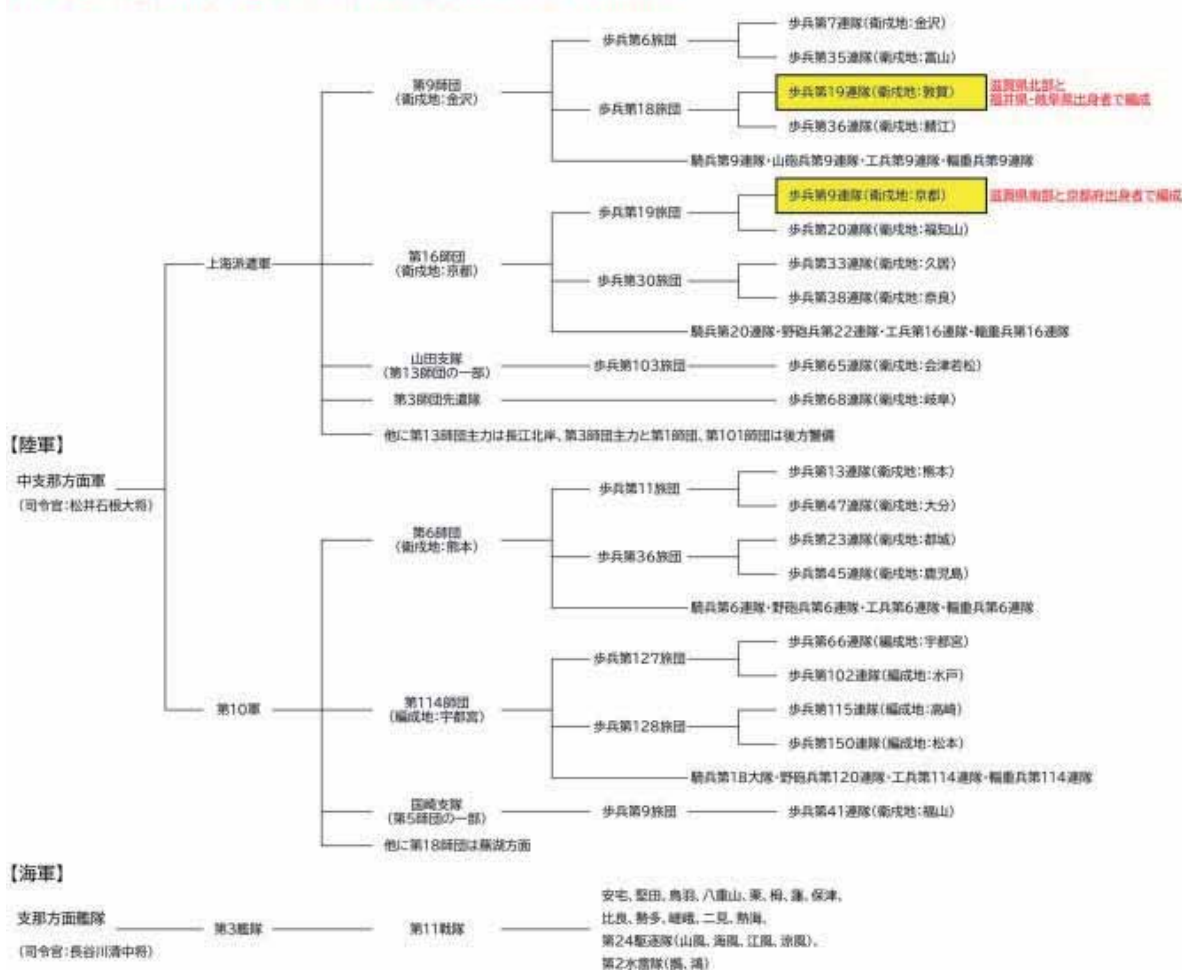
南京攻略を祝って提灯行列をする人々

【体験談—「南京陥落、南京陥落」ちゅうて、旗振って歩くんよ—】 T子さん
彦根で女学生時代を過ごしていたTさんの思い出です。

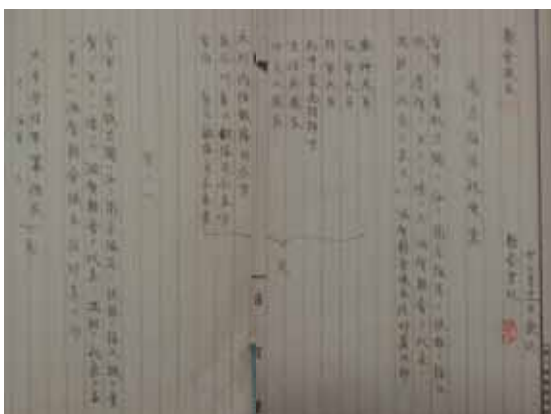
昭和12年(1937年)に支那事変が勃発したやん。中国とやってて、その後アメリカとやってたやろ。その頃はまだ、ましやったんよ、勝ち戦の時やで。支那と戦争してる時やで。そやから毎日、北京たら南京陥落ちゅうて、旗行列に参加してたわ。

ラジオで今日は南京陥落とか言わはるやろ。ほたら町中を「南京陥落、南京陥落」ちゅうて、旗振って歩くんよ。お祝い。私ら彦根やさかい、彦根の町を歩くのよ、そうして。学生がみんな参加して。彦根はようけ学校あったし。高校も中学も女学校もあったし、小学校もよ、陥落したらみんな町を歩くのよ。「陥落、陥落」ちゅうて、旗振って。ほやさかい、まだ勝ち戦やったんよ、支那としてる時は、私の頃は。

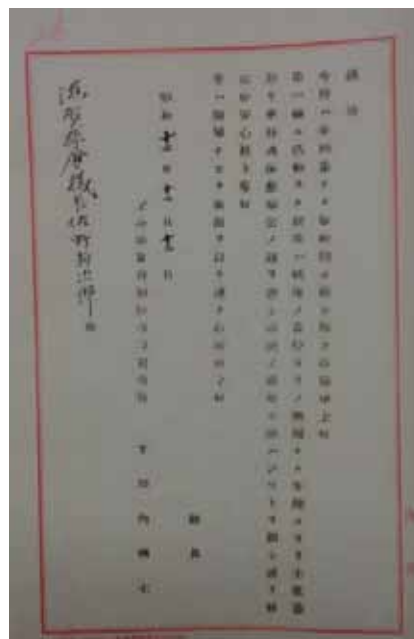
1937年(昭和12年)の南京攻略戦の参加部隊 (笠原十九司著『日中戦争全史』(株式会社高文研2017年)を基に作成)



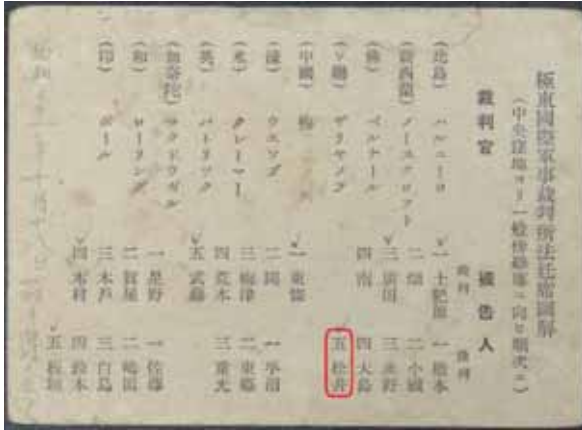
1937年(昭和12年)の南京攻略戦の参加部隊



滋賀県からの南京陥落祝電案
(滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-1」から抜粋)



祝電に対する礼状
(滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-1」から抜粋)



極東国際軍事裁判所法廷席図解

被告人の中に「松井」という名前が見えます。南京攻略戦の際に中支那方面軍司令官だった松井石根陸軍大將は、A級戦犯として死刑になりました。



南京光華門戦跡にて



南京陥落・新政府成立の祝賀行進



1937年（昭和12年）の南京陥落祝賀行事で家に飾られた提灯

【体験談—南京陥落して、もう戦争終わりにやて言うてたら・・・】 戸嶋 源一さん（東近江市）

（出征の）第1回目はね、東亜戦争（太平洋戦争）でなくて事変でね、支那事変ちゅうのが起こりまして、召集されまして、敦賀連隊へ入隊しまして、敦賀の浜で、海岸で訓練受けて俄か兵隊、輜重兵です。

敦賀で半月教育受けて、大阪へ集合して大阪の港から貨物船に乗って朝鮮の釜山につきまして、ほしてずと朝鮮の鴨緑江、あの時分、支那ゆうてました。満洲ですね。今の中国。満洲へ入って、朝鮮から貨物列車に乗って、北京に集合して、それからね、大八車に弾薬やら食糧積んで前線へ。もう戦争が始まってました。支那事変ちゅう戦争が始まってまして。それに回されましたんですけどね。

もう、北支は皆落ちてしもたんで、揚子江のここまで行きました。揚子江から中支ていう。私らは北支です。「北支が陥落した。凱旋や。」で喜んで、みんなもう帰るこしらえて、そして北京の手前、天津に集結して、ほいで、そこでタークーゆう港があります。そこへ集結してもう、日本へ帰れるにやて、喜んで船に乗りました。ほして、一晚船に乗ったら明るる日、海が黄色い海になった一にや。おかしいね、日本に黄色い水の海があるかいて、みな言うてたら、なんの、日中戦争が始まってまして、上海戦が起きたところでした。そこへ、今ゆうてる私らが内地に行けるて喜んでたやつが、上海に上陸させ

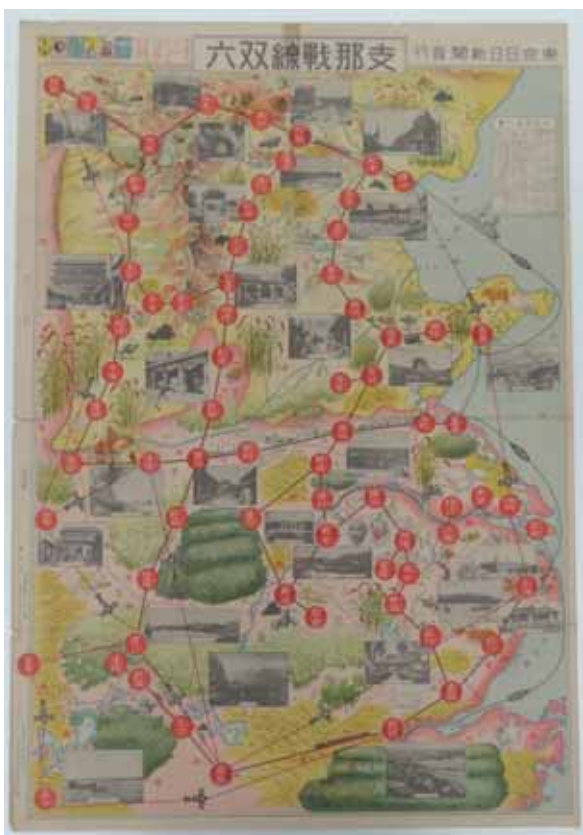
られましてね。

もう上海はガラガラになってまして、工場の中に一晩泊まって、明くる日揚子江に船に乘せられて、揚子江上がっていきますと橋頭鎮ゆう所がありますやろ。揚子江の上流で、揚子江と南京の中間あたり。そこへね、上陸して南京戦の準備ですわ。食糧から弾薬からみな内地から持って来たやつを、その揚子江上がって、私らの鎮江という港へ。橋頭鎮という港へみな軍需品上陸して、南京に行く準備ですわ。

(昭和12年(1937年)に)南京陥落して、もう戦争終わりにやて言うてたら、なんのまだ、ほれからずるずる重慶まで行ったんですけど。



手記「支那事変従軍 戦線之思出」其ノ一・其ノ二



支那戦線双六(1937年(昭和12年))

【体験談一戦地で一番楽しかったことは慰問団やな一】

藤井 憲一さん(長浜市)
長浜郵便局に勤務しておられた藤井憲一さんは、昭和14年から野戦郵便隊員として従軍されました。

南京の郵便局やったら50人は(職員がいました)。郵便の係があつて、貯金の係もあります。兵隊さんが金を入れたり出したりする。勿論小包もあります。家からね、慰問がぎょうさんあります。一般人の慰問は適当に部隊へ配分するわけ。「軍事郵便 慰問」と書いた一冊だけで。で、郵便局員がここの部隊は慰問袋が少ないでここへ入れよう、それは郵便局員の采配です。宛名の書いてないやつは一般慰問として何処の部隊へ配ってもよいわけ。そういう仕組みになった一冊わけ。

南京、上海、上海から今度は杭州から湖州。西北へ30里。湖州の方が長かったですな。1年あまりいましたな。湖州ゆうても長浜よりも大きなぐらいの街ですよ。湖州の方は田舎町やから、杭州から湖州へ30里くらいありますやろ。こっちは兵隊が手薄やから、向こう(中国人たち)は日が暮れるとバンバンと撃って武器弾薬を取りに来るわけ。組織があるような兵隊に見えなんだけどな。ゲリラみたいな10人20人が固まってやな、襲撃してくるわけやな。

あの時分にカメラ持ってるのは、わしぐらいなもんやったやろ。あの時分はカメラ高かったで。勿論兵隊さん高うて買えへんし。給料ようけもろてるもんしか買えへん。それも写真の好きなもんちゅうよりも技術習ろとくもんしか、そういうことを知ってるもんしか。その時分、私は気張ってカメラ撮ってましたんや。早う買うてましたし。そうでないと、ほんな写真残ってない。(現像は)軍の店がある。勿論フィルムも売っている。

(郵便局の中は)現地の人は全然入れへん。掃除夫は雇うけども、郵便物盗まれたら大変ですからね。軍の秘密もありますからね。野戦郵便局、男ばかりや。(女の人は)いません。向こうへ行くと宿舎も兵隊と一緒にやでね、第一線の郵便局は。

(一番楽しかったことは)それやったら、やっぱ慰問団やな。慰問団、一番喜ばはったな、兵隊もな。それも向こうでね、日本髪結うた姿で踊ってくれるんやから、ええわな、向こうでは。偶に1年に

一遍あるかないかや、ほないにしょっちゅう来ませ
んし。来るとなると慰問団も高うつくでな。



南京城で記念撮影（昭和14～16年頃）



出征時の藤井憲一さん



野戦郵便局員の赤タスキ



第47野戦郵便局前にて



南京郵便局小包課員の記念撮影



湖州の電話局

【体験談—上海には慰問団が、ぎょうさん来ましたで—】

戸嶋 源一さん（東近江市）

（慰問団は）ぎょうさん来しました。お宅ら知らんてはるか、渡辺はま子。あれのサインもろたの。どこかこれにありますやろ。渡辺はま子やら上原敏。慰問団で来てくれましてね。前線ではそんな慰問団に接しんできんけど、私らは後方にいましたでね、食べ物是不自由せんと、ほういうあの、慰問団には一番に上原敏やらね、東海林太郎は出会えなんけど、相撲団も慰問に来ました。



無錫にて（戸嶋源一さん）



漢口神社

1935 年（昭和 10 年）に漢口の日本租界に創建され、日中戦争で一度破壊されましたが 1939 年に再建されました。



憲兵による郵便物の検閲

【体験談—中国の住民と軍隊の仲介役をする宣撫班でした—】

角川 次郎さん（高島市）

（昭和 14 年（1939 年）に召集されて）金沢で 2 カ月訓練をうけて、その後中国の中支へ行きました。最初の 1 年ぐらいいは、歩兵をしていたんですが、私は身体が弱かったんで、鉄砲を持って歩いてたらよう倒れるんですわ。それを見かねた中隊長が楽な仕事はないかと、宣撫班に私を推薦してくれたんです。宣撫班というのは、中国の住民と軍隊の仲介役やね。兵隊が移動するとき、住民から略奪したり、悪いことをする奴がおる。それをほっておいたら、日本国の本当の戦争の意味がなくなるから、それを取り締まる。また、村長やらを呼んで、みんなの希望を聞いて、それを兵隊のえらい人に言うて、取り締まる

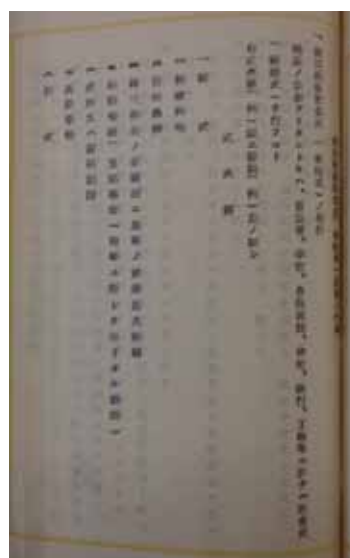
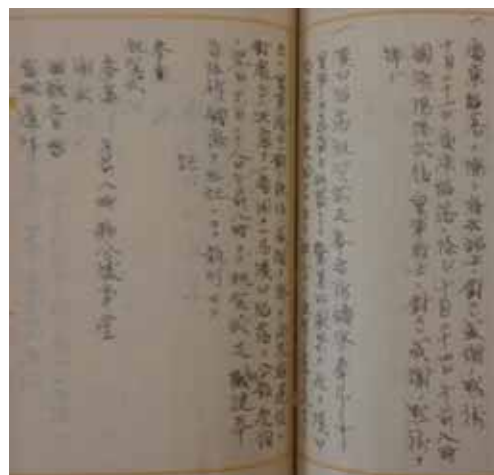
わけ。

南京で、宣撫班になるための教育を3カ月ほど受けました。住民にちゃんと説明できるように「なんのために戦争がおこったのか」「なんで日本軍が、わざわざ中国に来たのか」その意味を中国人に伝えなアカンので、教えられました。その教えによると「世界中が平和であるために悪い奴をこらしめ、そして中国人の生活をよくするために日本軍は中国へやって来た」と中国人に説明するんです。中国人は読み書きがでけへん人が多いから直接の交渉です。また住民に、もし日本兵が悪いことをしたら、どこの部隊か分かる印を兵隊に付けているから、悪いことをしたら、それを覚えておけ。ほんで、それを村長に言え、と住民に言うわけです。ほんだら、その印の部隊に行つて、大隊長とか、中隊長を呼んで、その中隊の兵隊を皆並ばせて、その悪いことをされた人と私が並んで、兵隊のなかを歩いて『こいつや』と言わすわけです。ほしたら中隊長が怒るんです。「お前、日本人やのに、なんで中国人の味方するんや」（と中隊長に言われました。）

せやけど、僕は中隊長より上の大隊長とか師団長の命令でやってるわけやから、中隊長も黙ってしまうわなあ。宣撫班は、中国全部に10人ほどいたんちがうかなあ。



名札、宣撫班腕章、銭別袋



昭和13年10月の広東陥落と漢口陥落記念式（祝賀式・祝捷式）の次第に関する文書（滋賀県立公文書館所蔵文書「昭お31」から抜粋）



屏風

1937年（昭和12年）10月に上海付近で戦死した叔父の弘さんに送られた弔電を屏風に貼ったものです。



一目でわかる支那事変と日ソ関係絵地図【『婦人倶楽部』の附録】(1937年(昭和12年)11月発行)

日本軍が空爆した場所が図示されています。1937年(昭和12年)8月から、日本軍は南京などの都市を対象に大規模な空爆を行います。この攻撃は無差別爆撃であるとして、国際連盟で非難決議が行われました。



中支方面日支両軍態勢要図【『主婦之友』の附録】(1938年(昭和13年)10月発行)と裏面記事の抜粋



「爆弾三勇士」(1932年(昭和7年)発行)

「肉弾三勇士」の肖像写真

満洲事変の翌年、1932年(昭和7年)1月に上海で起きた日中間の武力衝突を「上海事変」と呼びます。この事変中に、鉄条網を破壊するために志願して自爆した3名の一等兵は「爆弾三勇士」または「肉弾三勇士」と呼ばれ、多くの芝居や歌、出版物になりました。1941年には教科書にも取り上げられています。



上海事変(1932年)関係地図

中央付近に「三勇士爆死地」の表記もみられます(『新選歴史精図 国史之部』(帝国書院 1938年(昭和13年)訂正発行)による。)



右：『尋常小学修身書』卷四（1913年（大正2年）発行）

日清戦争と日露戦争で活躍した軍人たちの逸話は、小学校の教科書にも取り上げられました。日清戦争後の台湾平定戦において、陸軍近衛師団長として現地でマラリアにかかって戦病死した北白川宮能久親王は代表的人物です。

左：『尋常小学国語読本』巻九（1921年（大正10年）発行）

「水兵の母」の主人公は軍功をあげた英雄ではありませんが、日清戦争時に軍艦高千穂に乗船していた水兵が、母の「一命を捨てて、君恩に報いよ」という手紙を読んで泣き、上官もこの話を聞いて涙を流したという美談です。



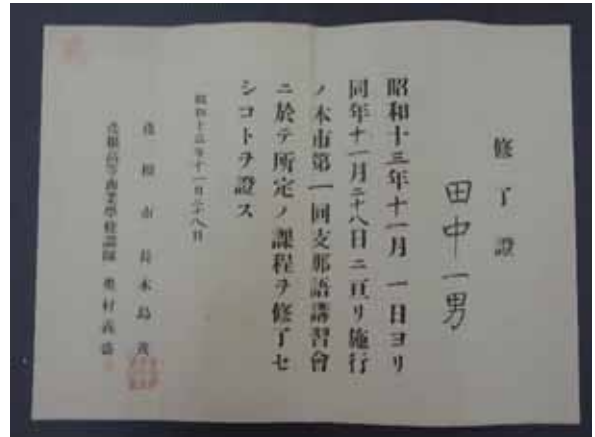
『尋常小学読本』 卷八 (1910 年 (明治 43 年) 発行)

日露戦争では、旅順港で戦死した廣瀬武夫中佐が海軍の、遼陽の戦いで戦死した橋周太中佐が陸軍の軍神として称えられて教科書にも取り上げられ、神社の祭神として祀られるようになりました。



右：『軍神廣瀨中佐』（1904年（明治37年）発行）

左：『橘中佐の教訓』（1940年（昭和15年）発行）



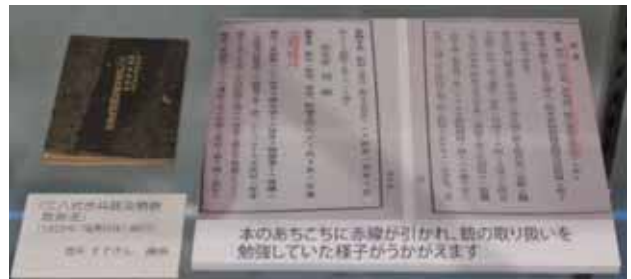
修了証



『簡易日支会話』(1937年(昭和12年)発行)

最初のページに「軍隊名称」の説明が掲載されています。

出征などで中国へ行かれた方々が、中国語を勉強したことが
うかがえる資料です。



『三八式歩兵銃及騎銃取扱法』(1929年(昭和4年)発行)

本のあちこちに赤線が引かれ、銃の取り扱いを勉強していた
 様子が見えます。



三八式模擬銃

日露戦争において日本陸軍の主力小銃であった三十年式歩兵銃を改良し、1905年（明治38年）に日本陸軍に採用された小銃を「三八式歩兵銃」、略して「三八銃」と呼びます。日中戦争以降には、軽機関銃が歩兵の使用する火器の中心になったと言われていますが、「三八銃」を使用していたという体験談も多く聞かれます。先端には銃剣を取り付ける構造になっています。

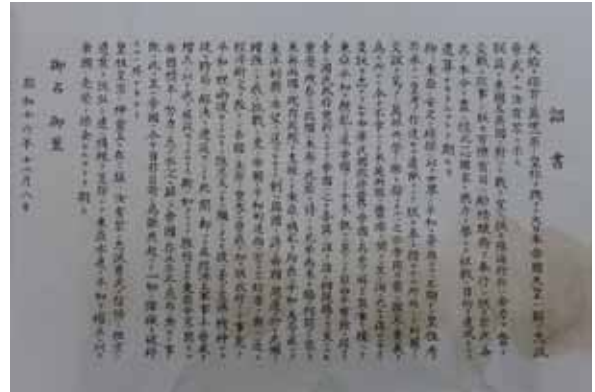


銃剣



宣戦の詔書

第3章 太平洋戦争（大東亜戦争）開戦 パナー写真：太平洋戦争開戦の詔書



日本に警戒感を強めるアメリカは、1939年（昭和14年）7月に日米通商航海条約の破棄を通告し、日本への経済制裁を強めました。

ヨーロッパではドイツが勢力を拡張し、1939年9月に第二次世界大戦が始まります。当初、日本はヨーロッパでの戦争に不介入の方針をとっていましたが、ドイツ優勢の状況の中、ドイツとの連携を強化しようという気運が高まっていきます。アメリカなどによる経済制裁の影響もあり、東南アジアにあるイギリス、フランス、オランダの植民地を日本の勢力圏とし、石油・ゴムなどの物資を獲得すべきという声が強くなっていったのです。1940年には、重慶の国民政府へのアメリカ、イギリスなどからの援助ルートを断ち、東南アジアへ勢力を拡大するため、日本軍は北部仏印（フランス領インドシナ）への進駐を始めました。

1941年7月には、日本は南部仏印（フランス領インドシナ）への進駐を始めましたが、これに対してアメリカは対日石油輸出の禁止など、イギリス・中国・オランダと協力して、日本に対する経済封鎖を強めました。日米交渉に行き詰まった日本は、ついに1941年12月8日にハワイの真珠湾への空襲とイギリス領マレー半島への上陸作戦を行い、アメリカとイギリスに宣戦を布告して太平洋戦争が始まったのです。日本は、この戦争を「大東亜戦争」と呼び、欧米諸国の植民地を解放して、日本を指導者とする「大東亜共栄圏」の建設を目指す戦いであるとししました。



中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料
 (日の丸寄せ書き、写真、戦死状況通知書、荷札、布袋、財布、紙幣(一円札、一角札))
 双六大東亜共栄圏めぐり【『家の光』の附録】(1944年(昭和19年)発行)



中国湖南省で戦死された木村治一さん関係資料
 (陸軍軍服(上・下)、ベルト、図嚢、死亡告知書)



参加作戦名が書かれた日の丸

【体験談一死にに行くのを喜ぶって、今思たらアホみたいな話ですわなー】 平塚 廣さん(長浜市)

昭和17年(1942年)の5月頃かな、男は20才になったら兵隊に行かんならんから、そのための検査が木之本小学校であったんです。徴兵検査です。

そして、昭和17年の12月10日に兵隊に行ったんです。日本の教育というのは怖いもんで、日清・日露戦争から太平洋戦争まで、兵隊に行かんのは男の恥やゆうようなことでね、一命を賭すのは当たり前で、平気でそういう教育を、軍国教育いいますかな、やってきたわけです。で、現役受かって、一家挙げて、死にに行くのを喜んでくれたのを、今でも覚えてますわ。今思たら、アホみたいな話ですわな。

兵隊に行く朝、名誉なことやゆうて、みんなが送ってくれはりましたん。その前には、村挙げて、壮行会ゆうのかな、してくれて。12月10日は、お宮さんと、兵隊に行く者3人でしたけど、お参りして「武運長久」必勝祈願をして、お宮さんの境内で挨拶してね。

で、まあ、私は敦賀に入って、そこで10日間ほど予防接種やとか若干の教育を受けたんです。そしたら、私らが中国行くゆうことは、もう、決まっていたんでしょうな。その時もう、中国の戦地から将校さ

んやら迎えに来てましたわ、私らを。

で、その間に、1回、家族の面会がありました。全然どこ行くか分からなかったけど、兵隊に行くんやで死ぬかも分からんでね、面会さしてくれはったんでしょな。ほんで、敦賀連隊へ家族が来ました。両親と妹とね。いろいろお菓子やらボタ餅やら持ってきてくれてね。わずか3時間ほどの面会ですけど。ほんなん、外地行くとか全く知りませんしね。軍事機密やったんでしょな。

12月20日に、夜中に敦賀連隊を歩いて出発しましてね。お宮さんへ参って、軍用列車で出発したんです。それは、明け方でしたけどね。それから、関釜連絡船で朝鮮の釜山へ上陸したんです。で、釜山から揚子江を遡って、浦口ゆう、南京の近くですね、ここに陸軍士官学校があったんです。そこへ1月2日に到着したんです。

【体験談—日本は点と線しか占領してないんだなと感じましたね—】 関谷 新吾さん(日野町)
関谷新吾さんは、昭和19年(1944年)召集令状が来て出征され、南京、湖南省の長沙や衡陽などを砲兵として転戦され、さらにその先の涪陽で終戦を迎えられました。

昭和19年1月に召集令状が来て、入隊は2月の初めだったですわ。

湖南省が戦場ですね。長江(揚子江)がありますね、この辺で相当激戦があったようです。私らが終戦間際、入隊させられたのが武昌ですわ。この常德辺りは、嵐部隊は相当激戦やってるんですよ。現地入隊するために南京から船旅になるわけですね。上流へ上るわけですね。南京から武昌までずーと。

中国軍が、上流から浮遊機雷を流してくるんです。一発それに触れたら、川船みたいな船ですのですね、沈没ですよ。だから、そういう時を考えて、もし本船が機雷に触れて爆発した場合は、一生懸命にとにかく上へ上がって、船が沈んでいくと同時に甲板から水面に平たく出て泳げ、て言わはるんですわ。ドボンと飛び込んだら、1mぐらい下はもう、あそこの流れはものすごく急流なんですわ。上はゆったり流れてるんですけどね。だから中へボンと入ってしまうと、上へ浮き上がることはできんと。だから、

流れが1mとその下とは全然違うわけなんですわ。それをよく知っとけゆうて、指導を受けましたね。

そういう気味の悪い遡航ですが、そこで経験したのはね、昼間はアメリカ軍や中国軍に制空権を握られてるもんだから、もう、船が動いてたら必ず爆撃されるんですわ。だから陽が沈んで夜の間だけしか遡航できないですね。遡航しててもね、時々びっくりするような音が両岸から聞こえてくるわけです。中国軍が機関銃を撃ってくるわけですね。船影を見てね。だからその時感じたのは、日本はこういうとこまで戦争に来てるけど、完全に点と線しか占領してないんだなということを感じましたね。それ以外のところは、中国軍はウヨウヨしてるわけですね。

日本は本当に古くさい大正時代に開発した機関銃やとか小銃とかね。小銃でも三八銃(明治38年(1905年)に日本陸軍が採用した銃)やとかね。重たくて、どうしようもない物を兵隊は持たされてるわけね。向こうは、最新新鋭のチェコ辺りのね、軽くて銃身でも焼けてこないんですね。時々敵の残した機関銃を取ってきて撃つと、凄く性能がよいわけですね。悲しいことには、弾薬が続かない。そんなことでね、狙撃兵の持つてる狙撃銃でも、凄く優秀な望遠鏡が上に付いていて。だからその当時、部隊の中核のもんやら上のもんは、階級章をみな隠したですわ。それを目掛けて撃ってきますよ。

【体験談—最後は山の中で散々にやられてしまいました—】 関谷 新吾さん(日野町)

最後は嵐部隊は、この山の中で散々にやられてしまうわけですね。涪陽です。この道をずーと来てここから山の中へ入っていかないと、(首都の)重慶へ行けないわけです。ほうするとこの辺の山ゆうとね、険しいアルプスみたいな山なんですわ。山の从上から陣地を作ってね、中国軍は雨が降るように、機関銃でダダダーと谷を通る嵐部隊を撃ってくるわけですね。もう、散々やられたらしいですね。これはもう、ダメだということで、ここで退却して帰ってきたわけですけどね。

その間、私らは師団司令部に移ったものの、師団司令部の残留隊に廻されてね、それで助かったんですわ。司令部について行くよりはまだ、もう一つ助

かったわけですね。司令部は移動していきますわね。司令部のいろんな書類や荷物があるわけですね。それを守らないかんので、劄陽のちょっと手前に宝慶ゆうとがあるんですね。そこに留守部隊がいて、ここでお前は仕事せい言われて、そこで遺骨の整理やら、いろんなことさせられたですね。司令部自身は師団長とも、ずーっと移動して行ってるんですけどね。とても戦争にならないというんで引き揚げていって、この劄陽の街へ集結したわけですね。

その時にはもう、嵐部隊はそれこそ半分以上になつたんでしょうな。まあ、とにかく悲惨な戦争ですのでね、亡くなった兵隊は遺骨のどうのこうの、遺骨なんてないと考えてもいいくらいですね。だから、大きな穴掘って、そこへ放り込んで、終い。

【体験談一弾にあたって戦死する人数よりも病気で亡くなった人が多い】 関谷 新吾さん(日野町)

岳陽から洞庭湖岸を通って汨羅、長沙。ここで初めて地雷というものの怖さを知ったんですよ。この辺りに中国軍が逃げしなにもすごくたくさん、大量に地雷を敷設して逃げたんですね。もう、街のあらゆるところに。

だから私たちが到着するまでにね、長沙は地雷原になっているから注意しろという連絡がありましてね、まともな道を行ったら危ないからというんで、田舎の田んぼ道を通って行ったんですよ。そしたらね、ちょうど私よりも5人先、先頭を歩いてた曹長でしたけどね、それが踏んだわけですね。途端に直径1mぐらいな、高さ10mぐらいな火柱がボンと立ちましてね。ええ。私なんか、地雷が破裂したところから5人目を歩いてたんですけど、距離で言うと10数m後にいたんですね。それで助かったんですけどね。しかし、身体は爆発の風圧で、後に飛んでるんですね。先頭の曹長は全然姿が見えないのでね、亡骸でもどっかにあるやろうと思って、随分探したんですけど全然なかったね。その地域に工兵がそういう地雷の探索をしていたんで、工兵隊がその横の溜池を搜索したんですね。中へ入り込んでね。そしたら首も手も足も取れてしまった胴体だけが見つかった。曹長のね。

その後、夏が過ぎて(昭和19年の)10月頃でし

てね。大激戦の後ですでね、ほとんどもう、補給が途絶えるんですよ。途中を爆撃でやられるもんだから。食糧にしても、服にしても思うように来ないんですよ。栄養失調に近いような状態の兵隊ですよ。だからそういうことで、先ず伝染病が発生するんですよ。激戦のあとゆうのは、身体も無茶苦茶やってますから、衰弱してるし。それから不潔でしょう。泥のついたような手で握り飯食べるわけですからね。手を洗いにいくような水もないし。そういうわけでコレラが流行る、発疹チフスが流行る。脳脊髄膜炎ちゅうような病気まで流行ってね。もう、悲惨なもので。

発疹チフスなんかは、身体に付くシラミでうつっていくんですね。もう衰弱している体にそういう伝染病がうつるとね、死ななしょうがないですね。そんなんでバタバタ。私は、衛生観念があったのか何か、うまく伝染病免れましてね。戦友たちはこれにかかって、弾やなしに病気で死んでいった人が多かった。

それから多いのは栄養失調で死んだ人が多かったですね。いくら物食べても吸収力を失うた状態ですね。胃や腸が食べたものの栄養を吸収しない。これが非常に怖いんですよ。嵐部隊で、そういう激戦で弾に当たって壮烈な戦死する人数よりも、そういう病気で亡くなった人が多い。とにかく中国、悲惨な状態が続きましたね。

ほんなんでもね、野戦病院の周りゆうたら、ばたばた死んでいく兵隊の墓場になってるんですね。周りがぐるーと。それが一重ならいいけど、次から次へとそれが増えてくるわけですから、二重三重に土葬ですね。そのまま。

【体験談一「湖南省で戦病死」と通知がありました一】 富居 春さん(愛荘町)

夫(大正3年(1914年)2月5日生まれ)は、昭和19年(1944年)3月12日、敦賀の連隊に入営しました。

終戦後、稻枝駅に、重いリュックを背負った復員の兵隊さんたちが毎日のように降りてこられました。けれども、夫は帰って来ません。思いあまって天津地方世話部に問い合わせに行きました。その結果、

「昭和19年10月28日に中国湖南省で戦病死」との通知がありました。でも、まだまだ信じられません。

ある日、(同じ愛荘町出身で)夫と同じ中隊だったという人が家を訪ねて来られました。そして、「富居さんは、病気で亡くなりました。私が負傷して野戦病院におり、その後、原隊に復帰した時、軍靴を貰いました。その靴に「富居」と書いていました。不思議に思い、富居はどうしたんですかと訪ねたら、戦病死したとの返事でした。私が腹痛で困っていたとき、富居さんが赤玉神教丸をくれました。ご主人から頂いたこの袋は、今、あなたの手にお返しします」と言われました。もう、これで決定的です。目の前が真っ暗になり、私はしばらく夢遊病者のようになりました。里の母が「お前がそんなことで、2人の子どもはどうなる」と叱りました。母は、今度の戦争で息子を失っています。その心の空洞は歳月も埋めてはくれず、二人で抱き合って泣きました。

夫が中国大陆に渡ってから、一度だけ手紙が来しました。昭和19年6月13日付けですが、内容から見て何回かに分けて書かれたものだと思います。軍事郵便ではなくて、知人に言付けて送ったようです。

「子供の事は頼む」「子供達を立派な日本人として育てて戴きたい」「子供達をよろしく頼みます」と三度も書かれていました。これが最初で最後の手紙になりました。この手紙は、今でも私の心の中に生き続けております。

中国戦線の状況

日本軍は、重慶の国民政府に打撃を与えるため1941年(昭和16年)9月には湖南省の省都である長沙の攻略を目指して第一次長沙作戦を実施していましたが、太平洋戦争開戦後の12月24日からは第二次長沙作戦を開始しました。しかし、連合国の一員となった中国軍に敗北して撤退する結果になります。

日本は、アメリカやイギリスとの戦争が始まると、中国で戦っていた部隊の一部を東南アジアに移動させるなど、中国での軍事作戦の見直しを行っていきます。中国は、日本が占領していた地域でもゲリラ活動を継続するなど粘り強い抵抗を続け、日本軍はこれらの抵抗を鎮圧するためにも多くの兵力を要することになります。

1943年末頃には、アメリカ空軍機が中国南東部で制空権を握るようになります。このため日本軍は、中国に置かれたアメリカの航空基地への攻撃を重視するようになりました。1944年4月からは大陸打通作戦として、中国派遣部隊の大部分にあたる約50万人を投入し、北京(北平)から広州さらに桂林・柳州まで、物資輸送のために重要な鉄道に沿って大陸を打通する大規模な作戦を開始しました。長沙や衡陽など湖南省の範囲も戦闘の舞台となった湘桂作戦も、この大陸打通作戦の一部です。

【体験談—常德作戦—手榴弾の破片が私の鼻の穴から入ったんです—】 平塚 廣さん(長浜市)

昭和18年(1943年)の9月から「常德作戦」に参加したんです。ここに敵の拠点があったんでしょうね。そこへ行けという命令で、私は参加しました。

常德ゆうとこに、私らが攻めに行ったんです。これは、厳しい作戦やってね。ぎょうさん、犠牲が出ましてね。向こうも抵抗しましたから、こっちも対応せなならんし。

ほんで、よう弾が飛んでくるので、皆いっしょに遮蔽物に隠れてたんですわ。ほしたらこれが、よう分からんかって、カヤやったんですわ。カヤが生えてまして、それに隠れてたんですな。そんなもん、あきませんわな。カヤみたいなん、通り抜けてくる。それが、目の前で「パキーン！」ゆう音がしたんですわ。敵が手榴弾を投げよったんですな。それが、バーンとはじいて、破片が私の鼻の穴から入ったんです。それが、口の中の上顎の骨で止まったんです。

それで、すぐに野戦病院に入りましてね、手当てしてもらって。傷は治ったんです。わりに口の中の傷は早いんでね。交戦の最中ですけど、南京の病院に船で下がって、野戦病院に収容してもらって。そこで治療してもらって、外傷は治ったんですけど、どうも口の中がおかしいと先生に診てもらうたら、口の中に破片が残ってたんですわ。それで、それを摘出してもらいました。まだ、戦争の初めの方やったでね。

ほして傷が治ったら、病院でいつまでも置いてくれへんしね。そのまま、内地へ返してくれたらいいけど、そうはいかへん。私も、早う復帰したいと思

うし、また、元の中隊へ帰れゆうことになって。で、退院するもんばかりが寄って、また中隊へ復帰したんです。これが、(昭和) 19 年の 3 月頃ですね。

この作戦で、犠牲者がたくさん出たんです。手元の資料で 225 名亡くなってるんです、部隊でね。こんだけ、激戦やったんですね。私は早うに怪我して、たし、助かったんやな。2 回目 (の湘桂作戦での負傷) も腹を貫通してますし。内臓と皮膚の間を弾が貫通したんです。これはもう 1 歩、足を踏み出してたらあかなんだ。内臓やられてね。人間の運命で分からんもんですね。

【体験談—湘桂作戦—銃弾が内臓と皮膚の間を通り抜けたんで助かった—】 平塚 廣さん (長浜市)

それから、(昭和) 19 年 (1944 年) の 4 月の下旬ですね、次の作戦が出たんですわ。それは「湘桂作戦」ですわ。衡陽に、敵のごっつい師団中心部があったんです。これを殲滅せいうことで、衡陽の攻撃に、うちの中隊も参加したんです。ここに中国兵が駐屯しとったので、ここを攻撃せいう命令を受けたんですわ。この辺は、山岳もあつたけど、まだ街やったね。

これもひどかったんですわ。作戦参加部隊で 731 名亡くなってます。岳州・長沙・株洲・易俗河・衡山・衡陽と、こういうな方向で攻めたんですわ。これがまたひどい激戦でね。うちの 120 連隊が挙げて、何百人という兵隊が、そこへ投入されたんです。

私は、その初戦で腹をやられました。衡陽の作戦で負傷したんです。ちょうどね、山の斜面を歩いたんです、私らの中隊も。そしたら、横から撃ってきよったんですね。ほんで、私は腹をやられたんです。貫通ですわ。まだ、作戦初期の時でしたけど。私も銃は持ってたけど、まさか飛んでくるとは思わなんだし。

ところが、ちょうど内臓と皮膚の間を抜けたんです。で、助かったんです。これが、手とか足やったら根元で止血しますわな。そやけど、腹やからそんなことでけへんしね。内臓ちゅうなとこを貫通したら、それで命が終わりです。けど、内臓と皮膚の間を通り抜けたんで助かった。その頃は、平塚は腹をやられて、もう死んだゆう噂が出てたらしいけどね。



戦場になった湖南省とその周辺「兵用支那地図中南部」(発行年不明)を改変

現在、滋賀県が友好提携している湖南省も太平洋戦争が始まった 1941 年 (昭和 16 年) 頃から主要な戦場のひとつになりました。

【体験談—湘西作戦 (芷江作戦) —逃げて帰ってくるのが精一杯やった。そんな作戦やったんですわー】

平塚 廣さん (長浜市)

退院して、昭和 19 年 (1944 年) の 10 月頃かな、宝慶ゆうとこね、ここで中隊が警備の任務を負ってたんで、ここへ復帰しました。

ほして、また作戦ですねや。昭和 20 年の 4 月 1 日ですけど、湘西作戦、桂林作戦とも言うんですけど。今、観光で有名な桂林てとこあるでしょう、きびしい山岳の。これは、重慶の手前で、湖南省の雪峯山系やけど、ここに蒋介石が拠点を持ってるんで、そこを攻めに行ったんですわ、うちの中隊がね。

アメリカが蒋介石の軍を支援しとったんですわ。ほんで、急激な山岳地帯でしょう。もう、あの時は負け戦でしたわ。もう、ひどいもんには傷つきましてね。攻めに行くゆうより、行ったもんが逃げて帰ってくるのが精一杯やった。そんな作戦やったんですわ。

私は、これも今思うと運がよかったんですけど、うちの中隊長が、こんな言うたら悪いけど、戦争の厳しさを分かってたんやろね。痔の持病が出て、とても作戦に行けんので、後方に残るで申し出はったんや。

こういう、病気のもんやら弱いもんやら作戦に行けんもんは、ある程度軍医が診断して、残しよったんや。残留部隊やね。その中の隊長として、うちの

中隊長が残りよった。ひどい作戦やゆうことが分かったたんやろな。ほんで僕に「おまえ、身の回りの世話に残ってくれ。」言われたんや。けど、私はいやでいやでね。やっぱり、兵隊は戦争に行きたい。今から思たらアホやけど、隊長様々やったんやけどね。その時は行きたかった。けど、命令やでね、残ったんです。(残った付き添いの兵は) 私1人です。

それで、基地に着いたと思たら、早や負傷者が続々下がって来ましたわ、この作戦でね。それくらい、ひどかったんです。そこは基地やったけど、野戦病院もあったしね。もう、それぐらいの負け戦やったですわ。行ったら、逃げて帰ってくるのが精一杯やった。もう、戦争末期やったんですな。

向こうは最新の兵器やらようけ持つとるし、地形も分かるとるし。こっちは、ろくな兵器もないし、地形も分からんのやから、犠牲者出ますわな。飛行機もあらへんしね。もう、アメリカの飛行機が、ブンブンと飛んで来たんやもの。そら、負けるはずです。

【体験談—現地調達て、ええ名前ですけど、略奪ですわな—】

平塚 廣さん(長浜市)

(昭和) 20 年(1945 年)の6月に負け戦で作戦(※芷江作戦)が終わって、中隊はまた湖南省の宝慶の警備にあたったんです。そうしてたら8月16日に、私らは日本は負けたゆうことを知らされたんです。そんなもん、ラジオもなんもありませんし。だから、大隊本部へ行ってそういう情報が入ったんですわ。無条件降伏したというね。

(捕虜生活は) 20 年の10月から、帰るまで。(昭和) 21 年の6月30日に帰ってきました。やっと、21 年の6月に順番が回ってきたんや。監視されてたから捕虜やけど、わりに自由やったですわ。虐待もなかったですわ。私は感謝してます。やっぱり、人間らしい扱いをしてくれよったで。負けたわりに、ありがたい待遇でした。何されても抵抗だけへんものね。自分らが相当やってきましたでね。

私らも、ひどいことしてきましたでね。後方からの糧秣輸送も何も来ませんわやで、いわゆる現地調達ですわ。調達て、ええ名前ですけど、略奪ですわな。食料は自分らで自活せな、何もないんやでね。

調達して食うしかないねや。ほら、気の毒なこともしましたな。

兵隊が各班に分かれ、武装して取りに行くんです。兵隊の数は多いから、1部落に入って、あっちやらこっちやら行ってね。気の毒やけど、僕らもしょうがない。取らな食えんのやで。もう、手当たり次第やね。畑やらね。それから豚やら動物を飼ってますわ、そんなんとか。で、水牛ゆう大きい牛がいますわな、農耕用に飼ってる。そんなんでも、取って食べなしょうがない。豚でも鶏でもね。

家は破壊し、田んぼの牛は殺す、豚は殺す。せっかく作った米は取ってしまう。現地で作ってきたんですわ。そういう目に遭うてる人が、被害者がいるわけですね。それに対して、いくら今ゆうたところで、そういう悲惨な、残酷なことをされた人は、忘れられんわね。僕ら、それは分からんことない。それを、きれいごとで済ますゆうのはね。



初年兵教育を終えた頃の平塚 廣さん



平塚 廣さん関係資料

(従軍証明書、受傷証明書、引揚証明書、名札)

従軍証明書と受傷証明書の「支那派遣軍」と書かれていた部分には墨が塗られ、「中国」という紙を貼り付けています。

太平洋戦争の終結

ヨーロッパの戦場では、日本の同盟国であるドイツとイタリアがしだいに劣勢となり、1943年(昭和18年)9月にイタリア、1945年(昭和20年)5月にはドイツが無条件降伏しました。

1944年末からは、アメリカ軍機による日本本土への空襲が本格化し、1945年6月には沖縄の日本軍が全滅して、アメリカ軍に占領されるなど、日本の敗戦が確実な状況になっていきます。中国戦線でも、1945年4月から6月にかけて湖南省西部で行われた芷江作戦で、日本軍は多くの死傷者を出して敗北しました。

8月には広島と長崎への原爆投下、そしてソ連による満洲・千島列島への侵攻も始まり、日本の無条件降伏を促すアメリカ・イギリス・中国の共同宣言(ポツダム宣言)を受け入れることにより、8月15日に戦争はようやく終わりました。

中国戦線でも、降伏した日本軍の武装解除が行われましたが、満洲では多くの日本人がソ連軍の捕虜となり、シベリアに抑留されて何年間も帰国できなかった方も多数おられます。

【体験談—終戦を聞いたのは、ひと月遅れですわ—】

岸田 吉隆さん(高島市)

(昭和20年(1945年)の)8月15日頃は、今の湖南省の洞庭湖の岳州というところの近くにおりま

した。でも僕らが聞いたのは9月、ひと月遅れですわ。9月になるまで負けたことは知りませんでした。ただ噂では、もう日本は負けるようなことを言ってたし、まあ玉砕やという覚悟は半分くらいあったかもしれないなあ。最後はそういうことになるなあ。しかし、そういうことは、あんまり口にでけまへんねん。みんなヒソヒソというけども。

(8月15日を過ぎると)敵機はぜんぜん来ません。そらあ、おかしいなあと思うなあ。思ってるけど終戦になったという知らせがないから。敗戦を知ったのは、ちゅうど僕等が道路工事で毎日出たときですわ。晩になったら、中国人と日本人が喧嘩しとりますねん。その日本人が中国人を殴ったんやな。そしたら、中国人が怒って、もう日本は負けたとか、中国語でいうてるからよう分からんけども「負けた、負けた」と不思議なことを言って唸ってます。ほんで、毎日来てた飛行機がちょっとも来ん。なんでやろと思てたら、もう負けてたんです。ほんで、そのとき初めて知って。ほんで、(道路工事の現場から)駐屯してる場所へ帰って話をしたら、すでに負けてると。それまでは、だあれも教えてくれませんでした。それが9月でした。

ああ、もうこんで終わるなあ、という気持ちが始どやったんと違いますか。せやけど、はたして日本に帰れるのんか、それは疑問でした。まだなかなか帰る順番は回ってこんし、結局中国人の捕虜にならんあかん、言うことになって、捕虜になったんです。捕虜というても、牢屋もなにもない捕虜やけども、うちの部隊はカンペイ管理所とかなんとかいうて、そこにうちの部隊が全部入ったんですわ。1000人なら1000人、全部固まって、ひとつところに集まったということですね。それが半年間続いたわけです。でも何もなくて、宿舎やらは自分らでつくりました。

終戦後はね、何も食べるもんがないので、中国人の家に働きに行ったんです。それで、私は衛生兵だったんで、少尉さんに「お前と二人でこれから漫遊しよか」と言われて、どこへ行くんやと思てたら「中国人の治療を、病気を診てやろう」ということで、それからふた月ほど二人で中国の奥地まで行きました。薬もまだあったし、そうたくさんはなかったけ

ど、しばらくはいけた。それで二人はそうとう奥地まで行きました。不思議なもので、お医者さんは大事にしてくれたから、食べたことのない餅を食べさせてくれたり、川へ行って魚を捕ってきてくれたり。

第4章 女性たちが見た戦地

日本軍として戦場で戦う将兵は、男性のみに限られていました。しかし、日本赤十字社の救護班などに所属して中国などの戦地へ行き、前線に近い場所で看護婦として従軍された女性は多くおられます。

一方、中国で戦う滋賀県出身の兵士たちを慰問するために派遣された慰問団のメンバーとして、舞台上で歌や踊りを披露したという女性もおられます。現地での様子を記録した彼女の日記を読むと、銃声が聞こえるなどの戦場での緊迫した状況とともに、はるばる訪れた慰問団との交流を通じて故郷を懐かしむ兵士たちの素顔もうかがえます。

そのほか、学校の教師や旅行者、父親の仕事の都合など、それぞれの事情によって戦争中の中国を訪れた女性たちの体験談を紹介します。

【体験談一戦地で人手がないので、養成所を繰り上げ卒業になりましたー】 小亀 喜代子さん（日野町）
小亀喜代子さんは、昭和18年（1943年）に日赤（日本赤十字社）救護班の一員として召集され、南京、武昌など中国の病院で勤務されました。

（昭和）18年の3月に（看護婦養成所を）卒業するはずでしたんやけど、戦地でもう人手がないので、ちゅうので、終戦になるのが、もう、敗戦色が濃くなってきて、ほいでもう繰り上げ卒業ちゅうて、10月に卒業式がありましてよ。17年の10月に卒業しました。

内地勤務と外地勤務とありましたで、内地のは陸軍病院勤めるし、ほで外地行くもんは、ほら中国へ行きましたけどよ。ほやけど、ほとんどのもんが外地行くのは、もうこれ当然の日本国民としては、みな戦争に行かんなんであれでしたでね。戦争せんなん、なりませなんだでよ。当然この職に就いたからには行かんなん。兵隊さん、みな出征していかれますでね。ええ。

ほて私は、あくる年の2月に、召集令状ちゅうの

をもらいましてよ。京都駅から汽車に乗りましたな。

（その時にどこへ行くというのは）分からなかったね。はい。外地はもう確かに聞いてました。どこへ行くちゅうハッキリしたことは聞かされてませなんだしね。ほて私らは、あのどういふにやいな。ほの移動班とかいうので戦争の前線、前線へ進むについて、ずーっと前線、前線へと出ていく班でしてん。

ほて長沙作戦ちゅうのがあって、私、武昌にいまだけど、今度長沙が落ちたら、ほの長沙へ行くようになってました。ほでまあ、結局、重慶まで行く、勝ってたら重慶まで行く班でした。で、どこで、じっと勤務してる班もありましたけどね。ほやけども私らの班は、順番に前線、前線へと、次から次からと付いて行く班でしてん。

1個班は20人です。で、婦長さんと次、偉い主任さんちゅうのと、ほて、上級生が4人と私らのクラスの子が4人と、後は一般の病院、一般の試験で、ほういう私立の病院なんかで免許取った子がいますわね。そういう人が3か月間、日赤の教育を受けて、ほて、日赤の看護婦として。一般の看護婦さんの中から募集しやはりますにやわ。ほと、たくさん応募があって、ほの中から3か月間教育受けて来やはる人がいやはる。ほの人らも、ほんで一緒に行きました。

（他から来られる班と合わせて）50個班程あったんと違いますか。全部、下関集合して、ほて下関から釜山へ渡って、ほて釜山からまたずーっと汽車でずーっと大連から、なんや山海関ちゅうとこかいな通って、北支通って、ほて南京まで行きました。

（昼間は）隠れるちゅうか、動かんとしてよ。輸送してるちゅうことが分からんようにやろね、あれ。汽車を停めといて、夜になって動きますでよ。2月に乗って、3月の中旬にしか着いてえしませんわ。だいぶん掛かりましたけど、私らは南京の陸軍病院へ入りました。

【体験談一負けたんやで言われても、どういうことが分からなんだねー】 小亀 喜代子さん（日野町）

南京の陸軍病院ていうのは、南京大学ゆう大きな大学を日本が接收ちゅうのか、とってしまつて、その全部を病院にしてみましたでな。ほんで大きな病棟

がいくつもあって、大きな大きな病院でした。

(現地に着くまで、どこで働くかは) 分からしませんでした。みんなね、どこへ勤務やちゅうて、今のよう
に給料なんぼや、ほんなことは思いもつかんことで
したな。給料なんぼくれはるにや、休みは何日くれ
はるにやとかまあ、ただ、ただ、もう、そこへ勤め
に行かんならんちゅう具合に、仕込まれてますでよ。
小さい時からね。満洲事変から。なあ、ちっちゃい
時から、(小学校) 1 年入ったときから、もうほれで
育ってますでよ。ね、毎朝教育勅語と、兵隊さんあ
りがとうって、もう、小学校から、はっはっはっは。
ほれで育って来てますでよ。もう、ほれでほの時分
はみんな、国民全部がほう思ってたんと違いますや
ろか。ほんでに、どこ連れていかれるやら、ちゅう
なこと、どこに勤務なるやらちゅうなことも、全然
もう知りませんでしたな。

(昭和) 18 年でな。ほやな、20 歳ぐらいやな。う
ん。女学校 4 年行って、ほれから(看護婦養成所等
へ) 4 年行ってるで、ほんなもんですやろな。私ら
若いのと何とで無我夢中でしたけどな。ええ。

もう、ほらいつ空襲があるやら。はい。ほでもう
南京、武昌にいたとき、武昌のこっちべら、漢口ち
ゅうとこがある。漢口の租界(日本の管理地域) な
んか、まっ赤に空が焼けて、内地の空襲といっしょ
でしたな。ほて、どんどん、どんどん、もう、ひど
い音がして、まっ赤に焼けてね。日本の租界が焼け
てるにや、ちゅうて聞いたけどよ。ひどいもんに、
まっ赤に空襲で焼けてましたよ。うん。

武昌にいる時に敗戦ちゅうことは分かってたでね。
南方が落ちたゆうことも聞いてましたでな。うん。
サイパンやったかいな、もう、玉砕しやはったゆう
こと聞いてましたさかいよ。日本の飛行機は、たま
で飛ばへんし。(中国大陆でも) だいぶん敗戦になっ
てきたな、ちゅうことは分かってました。

(病院に) 来る人が、もう前線ではあかん、ちゅう
ことを言うてましたで。兵隊さんらがね。もう、
向こうでは、全然あかん。まあ、逃げるちゅうのか、
夜も隠れてるゆうのかな。戦闘ちゅうなもんには、な
ってないのと違うやろか。うん。もう、ほとんどが、
ほう言うて、前線の人が帰って来やはるでね。勝っ
た、勝ったちゅうのは、全然聞きませなんだ。ほこ

へ、南方が落ちたちゅう噂が入ってきますしよ。こ
れは、負けるにやなと思って。ほいたら、8 月の 15
日に放送があつたけれども、何も聞こえしませなん
だけどよ。一応、ラジオの放送は全員、真ん中に庭
があつて、そこへ集まれちゅうので、集まって聞く
のは聞かされましたけどな。

兵隊さんが「もう戦争終わったんやで。」て、言う
てくれはらなんたら、みんな何のことかさっぱり、
飲み込めませんでした。飲み込んでも、負けたちゅう
ことがどういうことか、ちゅうことが分からし
ませんわな。これから、どうなるちゅうことが、分
からしませんでしたわ。戦争に負けたんやで言われ
ても、どういうことか、はっきり分からなんだね。
ほの時分はまだ。



南京病院にて
建物の壁は銃弾の跡だらけです



病院本部
藤井さんのアルバムには「兵頭病院本部(元中央大学)」と書
かれています。



伝染科病棟前にて



日の丸寄せ書き、千人針

1937年（昭和12年）9月に応召し、1939年（昭和14年）11月まで上海陸軍病院などで救護看護婦として勤務された田中ちよさんの遺品です。日の丸の寄せ書きは、入院中の兵士たちが書いたものです。千人針の裏面には「盡忠報國/中里村/處女會」と書かれています。



勲八等瑞宝章、支那事変従軍記章、負傷者用エフ（タグ）

【体験談—たくさん日本人もいるし、向こう（中国）へ行ってもいいね、と母が言ったんです—】

西村 仲子さん（大津市）

昭和18年（1943年）に女子専門学校を繰上げ卒業した西村仲子さんは、北京の女学校に就職されました。

（昭和16年）4月からは、かつての京都府立女専（女子専門学校【現在の京都府立大学の前身】）ですね。あそこに行ってたの。それで、行った年の12月にパールハーバー（ハワイの真珠湾攻撃）が始まったわけです。だから、その次の年から女専は全部繰上げ卒業になったの。だから、まともに行っていないの。私ら（昭和18年）9月卒業。それで、皆とにかく出されたの。女学校が5年で、女専が3年だったわけですね。で、9月の終わりに卒業して、そしてね、皆ほとんど全部どっか就職したの。就職しなきゃいけないんですよ。

それで、学校卒業した者は、あそこは教員免許書が出ますから、ほとんど先生になって、どこかに勤めたの。で、私は、母がその前に婦人会の代表で慰問に行くというので、中国の、今の南京からロカンの辺りまで行ってるんですよ。そこでいろんなもの見て来て、たくさん日本人もいるし、向こうへ行ってもいいね、ということを母が言ったんです。で、学校で就職の話が出た時に、そういうことを言ったんです。そしたら、その頃、向こうに北京日本第一高女という日本人の女学校があって、いっぺん聞いてみようかなと（先生が）言われて、すると向こうは探してました、と。待ってたわけね。で、ぜひ来てくださいというので、10月の初めに。その頃の北京は、日本人の人口が大津より多かったんですよ。大津が7万か8万のときに、あそこは10万（人）の日本人が住んでたんです。

うちの祖母がね、あの頃は皆、先生でも、どこ行きなさい言われたら、四国でも九州でも行かなきゃいけないわけね。海渡るんやったら一緒よ、と言ったの。それから、日本がわりあい広がってるから、それほど思わなかったんかね。

母が北京まで送ってきてくれてね。あの頃は、関釜連絡船ですよ。下関から釜山まで船で行って、朝鮮半島抜けて、列車で2日くらいかけて行ったわ

け。それで、北京の駅に着いたら、校長先生と、女学校の先輩で、音楽の先生が迎えに来てくださってね、どうもなかったですか、って言われるんだけど、何がどうもないのか意味がわからなかったのね。そしたら、私らの乗ったすぐ次の船が、初めて機雷に引っ掛かった船だったの。崑崙丸といってね、そのひとつ前の船に乗ってたの。

ただ、まだ北京の街は、戦争中ではありますけれど、わりあい安定していたわけ。日本が行ってるし、盧溝橋はすぐそばだったんですけど、街の中の治安はわりあい良くて、そんなに心配することはなかった。丸2年勤めて終戦になって、さあ、それからが大変。外国にいるわけですから。

【体験談—銀行とかにお金を持っても、それは全部押さえられてるから—】

西村 仲子さん（大津市）

北京の高等女学校で教員をしていた西村仲子さんは、中国で終戦を迎えました。

（北京に行ったころは）そう、今でいったらまだ成人（満20歳）になってないわけね。繰上げ卒業でしょう。で、私は3月生れだから、早いでしょう、ひとつ。だから、行った年は、満19（歳）か。数え年の20歳だから、今の成人式（※体験談聞き取り当時）のまだ前やね。

（北京の）その学校は、今でいえば外務省の直轄でしょうが、その当時は大東亜省という国の役所があって、そこが直接、管轄しているから、大使館の直轄学校なんですね。そこへ（昭和18年（1943年））10月に行きましてね、そのままその女学校にいたもんですから、向こうで終戦になったんです。

（敗戦になって）お金がなんにもなくなるでしょう。お給料は貰えないでしょう。何にもないでしょう。全部、ストップしてしまっ。だから、古くからいる方は、持ってるものの、いわゆる売り食いですやん。ほんで私たちみたいに、あんまり物のない者は、それが辛いわけね。だから、最後の方は段々、食事回数減らしたり、ご飯をお粥にしたり。それから、あの辺はね、仕事している貧しい人たちは雑穀食べてるから、同じように私らも、粟とかキビとか入れて、お粥してのぼして。で、あんまり激しい運

動したりなんかしなかったら、あれだからというので、3回を2回にした。いわゆる食べつなぐのが、大変なんです。

（いつ帰れるか、分からないから）出来るだけ食べつなぐ方法考えて。持ってるものがないでしょう。それから、皆、銀行とかそういうところにお金を持っても、それは全部押さえられてるから、なんにも出ないしね。それから後の方が、なんとなく。なんにも出来ないし、お金はないし。だからボツボツ皆、売るわけよね、持ち物を。ところが買いに来るのが、いっぱいボロ買いみたいなのがいるんですよ。いても、どうせ持って帰れないだろうって、たたき値になるわけね。

【体験談—私を満洲へ移民さそうと思ったのかな—】

竹村 芳子さん（守山市）

竹村芳子さんは高等女学校生だった夏休みに、お父さんに連れられて満洲を旅行されました。

父は、満蒙開拓青少年義勇軍の教諭をしたりしてたんです。開墾を教えてました。父は、私に満洲を体験させよって、女学校の夏休み約30日ほど連れて行ったんです。別の機会には中国やらにもね。私、旅行が好きやし。日誌に「満洲へ 父富三郎と 夏休み50日間の思出」としたるわ。「大事に残す」て書いてる。日誌に書いてあるでしょう。夏休みと、夏休み終わってから、10日ほど休んで。

私を連れて、父が朝鮮半島からずっと、奉天から新京・哈爾濱から鴨緑江下ってね、ウラジオストックの手前まで。東寧かな、そこまで旅行に連れて行って。哈爾濱から小型（飛行）機で、牡丹江下がって、ソ連の国境まで行ったんです。旅客機は小型なんで、よう揺れてました。10人ほどしか乗ってへんかったわ。もうほんでね、飛行機で行ったり来たりするんです。哈爾濱から牡丹江とか宝清とかね。ま、汽車もあったけどね。（初めての海外の印象は、）もう、こんなところへ来るの、かな（わ）んなと思った。

父もね、みんなに満洲行ってくれ言わなあかんかったから、私を分家として満洲へ移民さそうと思ったのかな。私が1番上やったから。父が、ぎょうさん開拓団として、日本人を連れて行ったんやわ。日本が過剰になってきたから、第2の郷里をつくるよ

うにと国から勧められたのかな。

(満洲の風景は、)ほんとは行けども行けども地平線という感じ。そして、家はゆうと、ちっとも立派なことないの。もう、貧相なゆうか、小屋みたいな感じ。ほんで、日本みたいに建て詰まったらへんし。私の叔父さん、父の弟が宝清ゆうとこに、缶詰の技術員として行ってたんです。で、私も叔父さんのいはるところへ寄って、そこで一晩泊めてもうて。

中国にも行ったけど、中国は別の機会やな。私、いとことね、北京から南京から重慶の方へ行っただすわ。万里の長城もずーっと歩いた。そして、北京に帰って、上海行って、南京の方へも行った。



休暇日誌帳 (1940 年 (昭和 15 年))

竹村 (旧姓西村) 芳子さんの満洲旅行日程 (「日誌帳」を抜粋・要約)

1940 年 (昭和 15 年)

- 8 月 9 日 父親からの電報で、渡満の予定を聞く。
- 8 月 12 日 朝、自宅を出発し、下関より連絡船に乗る。
- 8 月 13 日 **釜山着**⇒新義州
- 8 月 14 日 夜行列車で**鴨緑江を渡って満洲へ**。
新京中央農事訓練所訪問。夕食は野外でジンギスカン料理を食べる。
- 8 月 15 日 病院でコレラの予防注射。
- 8 月 16 日 観光バスで**新京市 (満洲国の首都) 内観光**。
新京は建設中の街。

寝台列車で哈爾濱 (ハルビン) へ。

- 8 月 17 日 **ハルビン市内観光**。松花江を下り、ハルビン青少年義勇軍の訓練所へ。
夜、**列車で牡丹江**へ向かう。
 - 8 月 18 日 昼に牡丹江着⇒乗り換えて東安へ。
 - 8 月 19 日 **東安の第 5 次信濃村へ**。
 - 8 月 20 日 朝、東安発⇒バスにて密山⇒飛行機にて**宝清へ**。
 - 8 月 21 日 赤痢でなくなった隊員のお葬式に参列。
 - 8 月 22 日 尖山開拓団へ行く予定が、トラックがぬかるみから出られず、闇の中を歩いて途中の**萬金山開拓団へ**。
 - 8 月 23 日 満洲人のトイレに驚く。満洲人の子供と遊ぶ。
満洲国歌と日本国歌を歌ってもらった。
 - 8 月 24 日 萬金山開拓団⇒宝清⇒**東安へ**。
この辺は兵舎ばかり。
 - 8 月 25 日 五道崗へ行くつもりなのにトラックが来ない。
 - 8 月 26 日 五道崗行きは断念して、**第 5 次信濃村開拓団へ**。
 - 8 月 27 日 お腹が痛い。信濃村小学校を訪れた。満洲人のお葬式は、鳴り物でやかましい。夜、東安発。
 - 8 月 28 日 汽車内で夜を明かし、牡丹江着⇒**ムーリンへ**。
興農合作社の舎宅は建ったばかりで、満洲には珍しく電灯が灯る。
 - 8 月 29 日 昼食後、大連行きの汽車に乗る。
 - 8 月 30 日～9 月 2 日は記事無し
 - 9 月 3 日 5 時に車中で目を覚ます。大連で乗り換えて旅順へ。**旅順で日露戦役戦跡巡り**。
 - 9 月 4 日 旅順からバスで**大連へ**。
土産を買いに三越へ行った。
 - 9 月 5 日 昨夜は胃腸が痛くてたまらなかったが、朝には治った。**大連から扶桑丸に乗り帰国の途へ**。税関の検査が厳しかった。
 - 9 月 6 日 一日船中で過ごす。
 - 9 月 7 日 瀬戸内海を航行。
 - 9 月 8 日 朝、神戸に上陸し、守山に帰着。
- ※赤字は次ページの写真に対応するものと思われる記述を
当館が強調したもの



旅順にて

パナー写真：滋賀県が中国に派遣した皇軍慰問団
(昭和18年)



慰問先で歌う女性たち



哈爾濱（ハルピン）にて



舞台上で江州音頭を披露



新京忠靈塔前にて



トーチカで記念撮影



漁船で移動中の一コマ



腕章をつけた善野令子さん

【体験談―「神さん仏さんが守ってくれはる。お国のことだけを思て行ってこい」―】

善野 令子さん（守山市）

善野令子さんは、昭和18年（1943年）に滋賀県が派遣した中支嵐部隊慰問団演芸班のメンバーに選ばれ、約2ヶ月半にわたって中支戦線の嵐部隊の慰問に回られました。

私は県立大津高等女学校へ行ってました。（昭和13年に）卒業して、どこへも（仕事などに）行かんと、お花生けたり、お茶を習ったりしてたんです。

「令子、お前な、兄ちゃんが戦争行ってるにやさかい、お前も行くか。」「私も会えるかも分からんやさかい、戦地へ行きたい。」言うてね。「お前が行ってる間に、お母ちゃん死んでもだんないけ（構わないか?）。それでも行くけ。」（と母が）言うて。父がね、「行ってこい。ちゃんと神さん仏さんが守ってくれはる。よこしまな心を思うやない。お国のことだけを思て行ってこい。」て父が言うたからな。「はい。お父さん、やらして下さい。行って参ります。」言うてね、仏さんの前でね。

兵隊さんはね、ピンクの赤紙が1枚来てね、「はい、召集令状」。嫌もくそも、みな行かれましたやろ。同級生の子がね、優秀な子らが早稲田大学やらね、東京やら行ってるんです。ほの人らが学徒動員でね、1枚の紙切れでね、皆行ってる。それに私が、女学校まで出してもろたのにね、行かな罰が当たる。どんなことがあっても行こう。怖いのと行こうという心とで、ずーっと迷いもって行って。純粋な気持ちでしたわ。

慰問団は女が7人です。近江神宮で出陣式をね。

知事さんも来て下さってね。神主さんにお祓いしてもらって、兵隊さんの出征の時と同じです。大津駅で知事さんも送って下さいましたわ。知事室へ寄せてもろてね。私ら直立不動してましたわ。

善野令子さんの慰問日誌（抜粋・要約）

※赤字は当館が強調したもの

昭和18年（1943年）

4月23日 大津出発 ⇒ 30日 上海に到着

5月1日 上海司令部に挨拶。自動車に乗って上海の街を見学。あまりの大都会に、皆呆然として夢を見ているようであった。夜10時に南京に到着。

2日 司令部に挨拶。昼から市内見学。物価が高くて目をむくばかり。

3日 朝早く南京を出発。蕪湖に到着。今日から兵隊さんを心ゆくばかり慰問できると思って勇氣百倍。夜7時から慰問開始。第1回として上々の成績だったと思う。

4日 朝、トラックで移動し、波止場から乗船。揚子江を移動して大通着。

5日 朝7時乗船。海軍の警備船に乗り換えて、午後2時過ぎ安慶着。本部に行き、そこで全部消毒されてビックリした。参謀長たちに挨拶して指示を仰いだあと、宿舎の安慶ホテルに到着。

6日 大公館へ慰問に行く。午後1時から演芸開始。汗だくになってやった。大変喜ばれた。最後にこらえていた涙が一時に出て、歌を歌うことができなかった。帰って即、映画の撮影に向かった。終わってから6225部隊で慰問。

7日 休みで、昼から街に出る。買いたいものがあっても高くて手が出ない。

8日 朝早くホテルを出発。漁船で東流に向かう。大詔奉戴日。船の中で宮城遥拝。東流に着き、午後3時から慰問開始。

9日 今日は歴山に向かう。山また山の中を警備の兵隊さんに護られて行く。慰問終了後、東流へ戻り、泊。

10日 本部の前で連隊長に挨拶し、記念撮影のあと出船。川幅は狭くなってきて、あたりは一面キビ畑。やがて望江着。慰問は2時からと7時からと2回する。

- 11 日 望江出発。湖口に向かう。船の中での食事。
本当においしかった。湖口に近くなるにつれて、
景色がとてよくなった。ちょうど島めぐりを
しているようだった。夜、稲妻がして怖かった。
- 12 日 朝、まだ少し雨降り。娯楽室でピンポンしたり、
外で縄跳びしたりして遊んだ。
昼から公演。随分たくさん人でビックリした。
海軍の人も来ておられた。三里街に向かう。
とても新しい兵舎で気持ちよかった。
- 13 日 【記述欠落】
- 14 日 今日はとても体が疲れて、一昨日ピンポンをし
たのだと思った。
トラックに揺られて横山に行く。随分奥地の山
の中、最前線に来了感じがする。
暑い中、慰問する。もう1ヶ所最前線の沈村に
行くべく出発。雨が降り出し、雨具の用意がな
いので毛布をかぶり雨をよける。兵隊さんが外
被を脱いで着せてくださった。慰問が始まりだ
したら、ものすごい夕立。終了後、暗い中を出
発。やっと三里街に着き、就寝。
- 15 日 今日は朝から雨。海軍の優待で九江へ行くはず
だったが雨のため中止。ゆっくり休養ができた
が、緊張が欠けるのが一番毒だ。
- 16 日 朝8時出発。副官の馬に乗せてもらったが、
急に動き出したので、怖くて飛び降りた。
湖口まで3里の道を歩く。湖口から乗船、彭澤
に向かう。
10時過ぎ到着。すぐに方家嶺に向かう。
午後2時から慰問開始。慰問がほとんどない山
の中なので、たいへんに喜んでくださった。
夜敵襲があつて、私たちはとても緊張した。
4人戦死されたとか。
- 17 日 方家嶺を出発し、彭澤に向かう。きれいな宿舎。
とても立派で、今までのなかで一番きれいだった。
午後2時より慰問開始。とてもきれいな舞台
でビックリした。夜、会食。面白い将校さん
ばかりで、今までの会食で一番楽しかった。
- 18 日 トラックに乗って、黄栗樹に10時半着。
さらにトラックに乗って、幡陽湖畔着。美しい
けれど、淋しい山の中。
- 部隊長さんが留守のため、(慰問は)明日昼から
することにする。
- 19 日 朝早くラジオ体操をする。午後2時開始。とて
も暑くて、のぼせてしまいそうだ。
夜会食。今日は私の誕生日。皆さんに乾杯して
いただいて恐縮した。
- 20 日 朝から公演を1回やって午後1時出発。
午後5時安慶着。
- 21 日 今日は休養日。朝から洗濯をする。
昼から皆で善野一等兵に案内されて街を見物に
行く。ホテルのおばさんがゼンザイをこしらえ
て下さった。美味しかった。夜、報道班の人が
みえて、私たちに感想を書いてくれと言われた。
- 22 日 何だか朝から足が痛い。きつと疲れたからと思
う。トラックで揚家橋の隊に着いて、軍医さん
に見ていただいた。湿布をしていただいたが、
まだ痛かった。足を引いて舞台に出た。
- 23 日 とても悪い道をトラックで棗園に向かった。こ
こには野洲郡の人は一人もおられなかった。郡
の人がいないと寂しい気がする。
- 24 日 棗園を出発、廣竹園に向かう。午後2時から開
始。直前に雨が降り出して舞台変更、兵舎で行
われた。夜会食があつたが、突然非常呼集で、
皆出ていかれたので何事かとビックリ。何かあ
つたに違いない。
- 25 日 朝、出発前に南少尉さんと吉田さんと3人で山
に登った。望楼の前でカメラに入る。美しい山
岳地帯にしばし見とれる。
10時に出発。龍門橋に向かう。最前線で、今な
お建設中の隊であつた。楠中尉さんは兄と伏見
で同期。向こうから尋ねられてビックリした。
- 26 日 朝から山の陣地へ登るはずだったが、雨が降り
そうなので、その代わりに射撃を見せて下さつ
た。機関銃射撃のとき、私にぜひ撃てと言われ
たので勇気を出して撃った。
午後4時出発。全身ずぶぬれになってホテル
に帰る。
- 27 日 今日は海軍記念日。昨日の雨で、服は着られな
いので着物を着る。昼から報道班の人といっし
よに記念日の陸戦隊の祝賀行事を見に行く。
夜、安慶劇場へ「ハワイ・マレー沖海戦」を見

- に行く。初めて着物着て外出した夜、楽しかった夜。
- 28日 船で光山咀に向かう。前湖口というところで降りて、トラックで美しい山道を行く。
慰問後、夜の会食。
- 29日 最前線、陰家涯に向かう。たくさん墓標が立っていて、涙がこみ上げた。お花を供え静かに合掌。昼から池洲へ向かって出発。船の中で、何だか急に家のことが思い出されて泣いた。
- 30日 朝9時から慰問開始。舞台一面にのぼりや花輪で飾られビックリした。皆ほんとうに歓迎して下さって、涙が出るほどだ。
- 31日 朝9時出発。トラックも乙女部隊を送るために飾り付けられ嬉しかった。11時大通着、お昼から慰問をする。夕方、忠魂碑にお参りする。
- 6月1日 朝9時から1回慰問。雨の中、濡れながら見て下さる兵隊さん。
午後2時から大通の陸軍病院で慰問する。歌が涙で歌えなかった。アッツ島の玉砕の報告があり、夜の会食も楽しめなかった。
- 2日 朝8時に出発し、安慶に帰る。これで慰問の行程は終わった。責任を果たした安堵感、もうすぐ日本へ帰れる嬉しさ、中々寝つかれない。
- 3日 安慶に別れを告げ、浦口へ揚子江を下る。
- 4日 浦口出発。立派な船で南京へ向かう。南京で孫文の中山陵へ行く。立派さにただビックリする。
- 17日 なつかしい湖国へ帰った。県庁で知事に挨拶ならびに報告。出迎えの親とそれぞれの家路についた。



善野令子さんの従軍手帖と日記

【体験談一何が起こるか分からないからと大反対されました】 0さん

大津市出身の0さんは、昭和18年(1943年)に滋賀県が計画した慰問団の一員として、善野令子さんたちと一緒に、中国の中支方面へ派遣されることになりました。

(派遣メンバーのひとりだった) Fさんと仲がよくて、その方と2人がね、行こかゆうて。家で随分反対されたんですけど。

その頃、そんな中支まで慰問団なんて玄人の方ばかりで、行ったら何が起こるか分からないから言うて、兄なんか大反対したんですけどね。県庁の平井さんゆう方と、高島の前田さんというお医者さん兼県庁の人と、寺本さんゆう方と3人ですね、3人がついていくから絶対大丈夫やとお話いただいて。それで、そのFさんとこのお母さんもやっと納得されて、それじゃ、やっぱり2人で行こか、ゆうことになったんですね。

私が20才でね、太田(善野令子)さんは3つか4つぐらい上やったんかな。1番若い人は18才ぐらいやったかな。で、決まってからはもちろん、ずっと毎日県庁へ行って、いろいろ踊りやとか、全然できない素人やから教えていただいて、練習していました。出発が(昭和18年)4月やったから、あんまり時間もなくて即席の余興でね。江州音頭とかしたことないのに、皆教えていただいてね。

そうですね、制服なんかも県庁からいただいて、よれよれでしたけどね。洋服はこれ1枚ですしね。それと着物を持って行きましたね。洋服も、今思ったら生地もベラベラでね。戦争時分やし、いい生地がなかったんでしょうね。

で、長崎へ行って、長崎で出発の船には乗ったんですが、明くる日、目が開いたら、もう着いてるはずが、スパイの関係ですか、出発せずにそのまま停まっていたんですよ。ある程度まで出て、出航したように見せかけて、また戻ってきたようですね。

で、私たちが行った後、京都の方が行かれたんです。それまでは、玄人の方が行かれてたんですが、私たちが行ったんで、京都の方も、女子青年団か何か結成されて出発されたんですが、それに魚雷があたって全部沈没したらしいんですよ。私らのときは、

出発したように見せといて、また戻ってきたりして
みたいです。朝起きたら海の水の色が変わって
るゆうことやったんですけど、そんなことなかつた
んで、ある程度動いて、また戻ってきみたいです。
そのくらい怖かったんですね。昭和18年ですから、
厳しくなりかけてたんですね。



トラックでの移動



軍歌を斉唱する皇軍慰問団

**【体験談－慰問先の看護婦さんも、兵隊さんも皆泣か
はりますー】** 善野 令子さん（守山市）
善野令子さんたちが慰問で訪れた中支嵐部隊は、京
都府と滋賀県出身の方たちで構成されている部隊
でした。

（私たち慰問団は）京滋代表で、京都は芸人を頼
む。滋賀県はね、プロを頼まんとね（素人の芸芸班
やった）。ほんまに夢中のどういう気持ちやったか
としますわ。

戦地へ行ってね、知事さんのメッセージを読むん
ですわ。交替で読むんです。「私たちは滋賀県代表で
皇軍兵士を皆様の・・・、滋賀県から寄せて参りま

した。ただいまから並川知事（※在任期間：1942～
1943年）様の言葉をお伝え申し上げます。皆様の
ご武運長久を滋賀県民一同心よりお祈り申し上げてお
ります。」そういうような言い方を。

私ともう一人、堅田から出やした人が年が上で
したけどね、みんな18（歳）から23（歳）まででし
たわ。何しよう言うて。「私音楽な、私踊るわ。」言
うて、お互いに。私が踊りを知ってましたから「愛
国の花」やら、みんな教えてね。ほして、それを踊
りました。

野戦病院行ったら、従軍看護婦さんいやはります。
私ら、「従軍看護婦の皆様は捧げます。」とか、ええ
言葉でね。ほいて「ほづつのひびき遠ざかる・・・」
てありますやろ（婦人従軍歌）。あれを歌いましたね。
もう、看護婦さん皆泣いてはりましたわ。

（兵隊さんの反響は）どんなに暑うても、汗流そ
うが、身動きもなさらないで、もう、ひとつになっ
てましたわ。兵隊さんと私らとが。私らかて、もう、
ほんまに一生懸命で。若いなにて。今から思たら笑
えますわな。ほんまに感動、感動、感動で、別れし
なに兵隊さん、皆泣かはります。こっちも皆泣きま
す。兵隊さん感動してね、泣かはる。一緒に歌てね。

兵隊さんがね、軍帽をね、「自分の被ってくれ。自
分の被ってくれ。」言うてね。皆それ被ってね、踊り
ましたわ。「御武運長久をお祈り申し上げます。あり
がとうございました。」言うて挨拶します。「最後に
兵隊さんと一緒に「海ゆかば」を歌います。」て言
いますやろ。兵隊さんも泣く、私らも泣く。それで、
帰りしなね、みんな知らないお方やのに、みんなが
ひとつになってね。

**【体験談－慰問しに行ったのか、されに行ったのか
分からへんくらい歓迎してくれはりましたー】**

0さん

**滋賀県出身者が多かった嵐部隊への慰問団として
派遣された中国での体験談です。**

向こうでは、慰問しに行ったのか、されに行った
のか分からへんくらい歓迎してくれはりましたね。
大津・堅田・守山・八幡と、だいたい滋賀県の中心
のほとんどのもんが（慰問団として）行ってますで
しょう。兵隊さんがものすごく喜んでくれはってね。

素人のしょうむない（つまらない）芸やのに、喜んでいただいて。いつも皆で言うてました、慰問しに行ったのか、されに行ったのか分からへんねえって。

宿舎は兵隊さんの所に泊まりましたけどね。あれ、どこやったかしら。第一線の手前まで行ったことあるんですよ。寝る時に銃声が聞こえてきたことありました。それはちょっと怖かったですね。たまに、なんですけど。

で、トラックで皆移動ですからね。トラックに乗って次の部隊に移動する時、谷間でちょっと上から撃たれる可能性のある時は、皆荷台に座って、上から何か掛けて人間が乗ってないようにして移動しました。普段は、普通に座ってたんですけど、そういうところへ来ると、そうやって被って。

それで着きましたら、そこへ舞台を作っていただきましたね。たくさん、皆集まって下さいました。だいたい夜やったように思いますね。で、それが済んでから、将校の方やらと晩餐会ですか、晩ご飯いただいて。

お風呂は、野戦のお風呂ですから囲うものが何もないでしょ？ だから、兵隊さんが覗きに来るゆうことでね、藁かなんかのムシロみたいなんをつけて。そして当番の方が上官から言いつかって、お風呂の周りに見張りをつけてくれはって。そんなんしてお風呂入ったん、覚えてます。

（舞台の時間は）1時間はありましたね。で、江州音頭なんかすると、滋賀県の方は皆、（踊りの）輪に入って来て、一緒に踊りなさるんですよ。（慰問に行った）その嵐部隊というのは、滋賀県の方が多かったのですよ。

それから、あの頃流行った歌ですね。『湖畔の宿』という歌が流行ったんですよ。それから、『椰子の実』かな。そんな歌をいろいろ歌いました。Fさんのアコーディオンで歌ったんですね、皆。Fさんはピアノをされるから、お上手で。練習しはったんやろね。

寸劇する時はね。軍服やとか長靴ね、皆お借りしてしましたね。皆、喜んで貸して下さったようです。靴はサイズが合わなくて、難儀したように思います。長靴って、ここまでありますでしょう。履くのがね、サイズが合わなくて。

【体験談—師団司令部の兵隊さんに、安慶の街を案内してもらいました—】 善野 令子さん（守山市）各地での慰問活動を一旦終えた善野さんたち演芸班一行は、安徽省安慶の街まで戻って来ました。彼女たちの休日に、安慶の街を案内したのが善野一等兵でした。

「善野、滋賀県から皇軍兵士慰問に来てるあの子らを案内したれ。」と、まあ言わはったんですやろ、将校が。ほんでに「はっ！」言うて来たんですやろ。安慶の街を案内してもらった。

名所とか、安慶のいいとこばかりですわ。振風塔ゆうて、すばらしい何十階建て、上がったんです。安慶の港の際に建ってましたわ。すばらしいですよ。私、「善野さんて、あの人なんて人。あんな高いところへ。私らかなんわ。」言うてね。ほんで、「怖かった、怖かった。」と（当時の日記に）書いときます。そうそう。張り切って連れて行かはった。ほんでにもう、不思議な不思議な生の不思議を思いますわ。

安慶劇場やったかな、（善野一等兵は）師団司令部に勤めてましたからね。安慶のええ劇場でしたわ。そこで（慰問団の）発表会があつたんです。そこで（慰問団の舞台を）見た言わはったわ。

善野一等兵は、戦争が終わった後に令子さんと結婚されました。まるで、映画のストーリーのような話です。



ホテル前での記念撮影

【体験談—「日本負ける、負ける」と言われて、石を投げられました—】 清水 恵美子さん（東近江市）太平洋戦争中に中国の上海で高等女学校に通っていた清水恵美子さんの体験談です。

あれは何年やったやろか？（華中鉄道に勤務していた）お父さんが（昭和）14年（1939年）に行かかって、ほんで「落ち着いてから、来い」と言わはったさかい、（中国に行ったのは昭和）17年かな、いや16年かな。

鎮江へ行ってね。鎮江というたら、南京のちょっと先で。その後、お父さんが転勤になったで、上海に行きました。行ったときは、上海はきれいでしたわ。フランス租界（フランスが管理している地域）というたら、世界中の人が集まってはったもん。その時分、うちらは、まだ第八国民学校に通ってたわ。

（状況が悪くなったのは、女学校の1年生だった昭和）19年からやったわ。何月やったやろか？ あれ、夏服着てたでなあ、石投げられたのは。学校へ行くのによ。

（通っていた女学校は日本人街の）外にある。ずっと歩いて行かんならん。（日本海軍の）陸戦隊の横やったかなあ。ほで、陸戦隊というのがあって、そこに行くのにな、皆集団で行った。

もう、「日本負ける」と言うて。私ら女学校の1年のときに、石投げられた。中国人に。中国人がね、早よから「日本負ける、日本負ける」言うてましたわ。それまでは、日本人は威張ってたからなあ。（値段を）まけさしたりなあ。そらあ日本人、（自分たちよりも）早よ行ってはる人らは、悪いこととしてはったらしいからなあ。（石を投げられるのは）朝、行くときが多かったなあ。

私は終戦前に疎開で、満洲まわって、朝鮮まわって帰ってきた。昭和20年3月に帰ってきた。もう、「日本負ける、負ける」と言われて石投げられたから。（普通の経路では、帰って来れなかったんで）徐州から南京、新京まわって、釜山に行って、釜山から船に乗って、行くときとえらい違いや。日本に戻ってくるのに、一週間かかりました。

（中国から脱出するときの状況は、）そんなに覚えてないけど、とにかく早う出なあかん、というのでな。（お父さんが）「明日帰ろ！」言うて、早かったですわ。とにかく早かった。どっかでなあ、聞いてきたんやろなあ。



皇軍慰問学芸会プログラム
子どもたちから父親への慰問の手紙（1942年（昭和17年））

～エピローグ～

太平洋戦争が終わってから80年近い年月が過ぎました。滋賀県平和祈念館が行っている戦争体験者の話を聞き取る活動でも、最近では実際に戦場に行かれた方の話を聞ける機会が非常に少なくなりました。

今回の企画展示の最後に、日本陸軍の兵士として中国で戦い、悲惨で残酷な戦場の様子を見聞きしたAさんの体験談を紹介したいと思います。

戦争は国と国が戦って、お互いの国民の命を奪い合う行為です。これまでの戦争で亡くなられた方や様々な苦労をされた方々に想いを寄せ、悲惨で残酷な戦争を決して繰り返さないように平和への願いを継いでいくことが大切です。

【体験談—滋賀県民の代表が慰霊に廻らないかんとします。—】 関谷 新吾さん（日野町）

もっともってね、国も国やけど、大いに民間交流して、私は思うんやけど、（滋賀県は）湖南省と友好提携してる以上はね、そういう施設に私ら思うと滋賀県民の代表が慰霊に廻らないかんとするんすわ。それによってね、もっと中国の人々との心の交流ができるやないかと思うんです。観光やなしにね。慰霊ゆうのは大事やと思いますよ。そういうことをひとつ、お願いしたいと思っています。

【中国で従軍されたAさんの想い】

当館では、中国での戦争に参加された多くの方から体験をお聞きしています。そのうちの1人であるAさんは、平成17年（2005年）に体験談をお聞きしたのですが、改めて平成25年9月に、裏の話をしたいということで、戦場での悲惨な出来事を聞くことが出来ました。

戦争体験の聞き取りを行う際には、通常は録音を行うのですが、このときは本人のお申し出により、録音せずに筆記で記録を取りました。その内容の一部を紹介します。

徴兵検査で第2乙種であったAさんにも昭和18年（1943年）、臨時召集令状（いわゆる赤紙）が届き、応召し陸軍二等兵となった。入隊した日に、いきなり往復ビンタの洗礼を受け、その場でぶっ倒れるぐらいの衝撃を受けた。満20歳のAさんは、軍隊とはこういうとこかと、心身ともに大きな衝撃を受けた。

親しくなった中国人ガイドは満洲出身の人であったが、Aさんたちは撫順炭田近くの小部落に案内された。その部落に、戦時中、中国人スパイが逃げ込んで、村人が隠した。野菜などを越冬させるために地下に穴を掘って貯蔵庫としているところへ、そのスパイを隠したのである。日本軍がやって来て、村人全員を尋問し、スパイの行方を質したが、村人は誰一人明かさず、日本軍は村人全員を虐殺した。その後スパイが穴から這い出して来て、助かったということである。

Aさんは野砲隊に所属し、砲手であった。当時野砲は山砲に変わっていた。中国奥地への進撃では道路状況が悪く、重量のある野砲は輸送に困難をきたしたためである。山砲は砲身や架台等に分解でき、運搬しやすかった。運搬には馬を利用したが、空襲などで馬が死に、馬の調達が出来ない時には、「調達」として、山や部落などに潜む中国人の若い人を数珠つなぎに狩り出し、馬の代わりに車両を引かせた。若い人であっても、だんだん疲れて来て、終いには動けなくなった。そういう人たちは軍事機密を知っているということで、みな殺していった。それも鉄砲の弾が惜しいので、銃剣で突き刺した。Aさんは、直接それに関係したのではないが、そういうことを

しながら進撃した野砲隊にいた。

終戦になって印象に残ったことは、蒋介石が「仇を恩で返す」と布告したことである。おかげでAさんたちは、中国人の民家に分宿することが許可された。芷江作戦の後、徒歩で岳州まで引き上げた。岳州からは、無蓋貨車で上海まで帰ることができた。岳州の手前で、蒋介石の布告があった。正月には獅子舞が舞った。見に来いと中国人が誘いに来た。一般の中国人は、まるで友達のようにAさん達を扱ってくれた。中国軍は日本人捕虜に対して、普通の扱いをしていた。一般人には迷惑をかけないというのが中国軍のやり方だった。日本軍のやり方は恥ずかしいものであった。

これまで話したことの中でも、これが皇軍なのかと思ったことがたくさんあった。軍の機密を守るために若い中国人を殺した時は、口の中で念仏を唱えていたこともある。しかし命令は絶対であり、背くことは出来なかった。

今日、話したことは、自分にとって深刻な記憶である。しかし、国際問題になるようなことには、決してして欲しくないのも、その点は十分注意していただきたいと思っている。頭に残っていた醜いものを洗いざらい話したので、今安心している。

長年、口にできずにいたことを語って下さったAさんは、平成26年にお亡くなりになられました。

第33回企画展示「滋賀県民が見た中国の戦場」展示資料一覧表

展示資料 番号	資料名	点数	資料説明	提供者名
第1章 明治時代の戦争―日清戦争・日露戦争―				
1	明治19年制式陸軍騎兵普長軍衣	1		個人
2	明治二十七八年従軍記念絵馬	1		聖見大宮天神社所蔵
3	缶(凱旋記念・解隊記念)	5		小嶋幸男さん
4	明治三十七八年従軍記章	1		田附弘明さん
5	凱旋記念の銀杯	3		田附弘明さん
6	感謝状	1		田附弘明さん
7	徴兵身体検査出頭令状	1		武村友幸さん
8	飯札氏名票	1		武村友幸さん
9	日露戦場明細地図	1		高橋正徳さん
10	日露戦争中に戦地から送られてきた手紙	2		田中五平さん
11	明治三十七八年従軍記章	1		飛田修さん
12	記章の紐	1		飛田修さん
13	凱旋記念の缶	1		飛田修さん
14	征露記念の缶	1		中西一雄さん
15	日露戦役記念火箸	1		中西一雄さん
16	旅順文嶺(日露戦役記念)	1		中川みつのさん
17	文嶺(大連埠頭・忠霊塔)	1		中川みつのさん
18	京都帝国大学による鮮満支旅行計画(写真)	1	1931年(昭和6年)	個人
第2章 15年にわたる戦争の始まり				
19	満洲国国旗	1		中川みつのさん
20	満洲物産地図	1	『少年倶楽部』の附録(1932年(昭和7年)3月発行)	宮内宏昌さん
21	満洲派遣記念絵血(第16師団)	1	1936年(昭和11年)	林静子さん
22	大満洲国建国功労章	1		植西みきさん
23	昭和六年乃至九年奉天従軍記章	1		植西みきさん
24	凱旋記念風呂敷	1		個人
25	帝国及列強の陸軍軍備	1		奥島すみ子さん
26	『満洲派遣記念』アルバム	1	1936年(昭和11年)歩兵第九連隊満洲派遣隊発行	個人
27	『昭和六七年満洲奉天関東奉天記念写真帖』	1	1933年(昭和8年)陸軍砲兵部発行	北川弘さん
28	『昭和六・七年満洲奉天出動記念写真帖』	1	発行年不明、朝鮮龍山野砲兵第二十六連隊本部発行	北川弘さん
29	中華國恥掛図	1		足立道さん
30	國際連盟脱退の詔書	1		東近江市立能登川西小学校
31	大阪毎日新聞号外(写真)	1	1931.9.25付け	中西一雄さん
32	功七級金馬勳章状	1	澤田九郎吉さん関係資料	澤田九一郎さん
33	戦地から送った手紙	1	澤田九郎吉さん関係資料	澤田九一郎さん
34	新聞(戦死記事)切り抜き	1	澤田九郎吉さん関係資料	澤田九一郎さん
35	手紙	1	三木展六さん関係資料、1937年(昭和12年)	三木展六さん
36	図表	1	三木展六さん関係資料	三木展六さん
37	ゲートル	2	三木展六さん関係資料	三木展六さん
38	樞東國際軍事裁判所法廷席図解(写真)	1		村田利之さん
39	1937年(昭和12年)の南京陥落祝賀行事で家に飾られた提灯(写真)	1		森野久嗣さん
40	手記「支那奉天従軍 戦線之思出」其ノ一・其ノ二	2		田辺久良さん
41	野戦郵便局員の赤タスキ(写真)	1		藤井憲一さん
42	名札	1		角川次郎さん
43	宣撫班腕章	1		角川次郎さん
44	錢別袋	3		角川次郎さん
45	『爆弾三勇士』	1	1932年(昭和7年)発行	北川麗三さん
46	『肉弾三勇士』の肖像写真(写真)	1		個人
47	『尋常小学修身書』巻四	1	『北白川宮能久親王』、1913年(大正2年)発行	個人
48	『尋常小学国語読本』巻九	1	『水平の母』、1921年(大正10年)発行	個人
49	『尋常小学読本』巻八	1	『廣瀬中佐・橘中佐』、1910年(明治43年)発行	個人
50	『軍神廣瀬中佐』	1	1904年(明治37年)発行	田村芳江さん
51	『橘中佐の教訓』	1	1940年(昭和15年)発行	個人
52	修了証	1		田中一男さん
53	『陸島日支会誌』	1	1937年(昭和12年)発行	青木喜代さん
54	『三八式歩兵銃及騎銃取扱法』	1	1929年(昭和4年)発行	目片すてさん
55	銃剣	1		田村芳江さん
56	三八式模倣銃	1		滋賀県
57	支那戦線双六	1	1937年(昭和12年)、東京日日新聞発行	滋賀県
58	屏風	1		木村信さん
59	中支方面日支両軍態勢要図	1	『主婦之友』の附録(1938年(昭和13年)10月発行)	佐々木観高さん
60	一目でわかる支那事変と日ソ関係地図(写真)	1	『婦人倶楽部』の附録(1937年(昭和12年)11月発行)	佐々木観高さん
第3章 太平洋戦争(大東亜戦争)開戦				
61	宣戦の詔書	1		東近江市立能登川西小学校
62	日の丸寄せ書き	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
63	写真	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん

64	戦死状況通知書	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
65	荷札	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
66	布袋	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
67	財布	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
68	紙幣(一円札)	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
69	紙幣(一角札)	1	中国湖南省で戦死された菅野定三さん関係資料	菅野サトさん
70	双六大東亜共栄圏めぐり	1	『家の光』の附録(1944年(昭和19年)発行)	滋賀県
71	陸軍軍服(上・下)、ベルト	一式	中国湖南省で戦死された木村治一さん関係資料	木村まささん
72	図章	1	中国湖南省で戦死された木村治一さん関係資料	木村まささん
73	死亡告知書	1	中国湖南省で戦死された木村治一さん関係資料	木村まささん
74	参加作戦名が書かれた日の丸	1		宮村喜代治さん
75	従軍証明書	1	平塚廣さん関係資料	平塚廣さん
76	受傷証明書	1	平塚廣さん関係資料	平塚廣さん
77	引揚証明書	1	平塚廣さん関係資料	平塚廣さん
78	名札	1	平塚廣さん関係資料	平塚廣さん
第4章 女性たちが見た戦地				
79	日の丸寄せ書き	1		田中直美さん
80	千人針	1		田中直美さん
81	鮎八等瑞宝章	1		田中直美さん
82	支那事変従軍記草	1		田中直美さん
83	負傷者用エフ(タグ)	2		中川みつのさん
84	休戦日誌帳	1	1940年(昭和15年)	竹村芳子さん
85	従軍手帳	1		善野令子さん
86	日記	1		善野令子さん
87	皇軍慰問学芸会プログラム	1		内堀甚一郎さん
88	子どもたちから父親への慰問の手紙	1	1942年(昭和17年)	田中五平さん
エピソード				

第33回企画展示「滋賀県民が見た中国の戦場」写真・図表パネル一覧表

章	項	写真・図表タイトル	提供者名	備考
メインタイトル	バナー	昭和18年に戦地を訪れた滋賀県からの慰問団の舞台を見つめる兵士たち	善野令子さん	
第1章 明治時代の戦争―日清戦争・日露戦争―	バナー	旧大津陸軍墓地（陸軍歩兵第九連隊の将兵たちの墓碑群、日清戦争で戦病死された兵士たちの墓、日露戦争の戦死将校の墓碑、大東亜戦没者之碑）	当館撮影	
		明治二十七八年戦役図	個人	『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院1938年（昭和13年）訂正発行）による
		帝国の膨張	個人	『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院1938年（昭和13年）訂正発行）による
		旧大津陸軍墓地の現状概略図	当館作成	
		大津に置かれた陸軍歩兵第9連隊（1925年（大正14年）に京都に移駐）の動向	個人	『満洲派遣記念』アルバム（1936年（昭和11年）発行）による
		旧大津陸軍墓地にあるロシア人捕虜の墓碑	当館撮影	
		征露記念碑（東近江市八日市金屋 野々宮神社）	当館撮影	
		日露戦争からの凱旋を記念して神社に建てられた石鳥居（東近江市能登川町 愛宕神社）	当館撮影	
		京都帝国大学生の修学旅行記念写真（旅順の203高地（爾靈山）にて）	個人	
		県立八幡商業学校生の修学旅行記念写真（ソウルの崇礼門（南大門）前）	個人	
第2章 15年にわたる戦争の始まり	バナー	日本軍の南京攻略を祝う滋賀県民たち	逢坂小学校	大津市役所前に集まって歓喜する滋賀県民たち
		『満洲派遣記念』アルバム中の「歩兵第九連隊行動概見図」	個人	
		『昭和六七年満洲事変関東軍記念写真帖』の中には、国連連盟調査団の写真もあります。	北川弘さん	
		満洲事変要図	個人	『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院1938年（昭和13年）訂正発行）による
		「国民政府を相手とせず」という政府声明	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-2」
		慰問・視察を差し控えるように指導してほしい旨の通牒	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「令-2-262」
		昭和12年の事変の呼称を「支那事変」とする閣議決定に関する通牒	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「令-2-2620」から抜粋
		盧溝橋の遠景	服部雪川さん	
		南京攻略を祝って提灯行列をする人々	逢坂小学校	
		1937年（昭和12年）の南京攻略戦の参加部隊	当館作成	
		滋賀県からの南京陥落祝電案	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-1」から抜粋
		祝電に対する礼状	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「昭き17-1」から抜粋
		支那事変（盧溝橋事件）		大阪朝日新聞 昭和12年7月9日朝刊
		南京陥落・新政府成立の祝賀行進	服部雪川さん	
		南京光華門戦跡にて	戸嶋源一さん	
		南京城で記念撮影	藤井憲一さん	昭和14～16年頃
		出征時の藤井憲一さん	藤井憲一さん	
		第47野戦郵便局前にて	藤井憲一さん	
		南京郵便局小包課員の記念撮影	藤井憲一さん	
		湖州の電話局	藤井憲一さん	
		漢口神社	藤井憲一さん	
		慰問に来た有名人たち	戸嶋源一さん	
		無錫にて	戸嶋源一さん	
		憲兵による郵便物の検閲	戸嶋源一さん	
		昭和13年10月の広東陥落と漢口陥落記念式（祝賀式・祝捷式）の次第に関する文書	当館撮影	滋賀県立公文書館所蔵文書「昭お31」から抜粋
		上海事変（1932年）関係地図（中央付近に「三勇士爆死地」の表記もみられます）	個人	『新選歴史精図 国史之部』（帝国書院1938年（昭和13年）訂正発行）による
第3章 太平洋戦争（大東亜戦争）開戦	バナー	太平洋戦争開戦の詔書	能登川西小学校	
		戦場になった湖南省とその周辺	当館作成	「兵用支那地図中南部」（発行年不明）を改変

		初年兵教育を終えた頃の平塚廣さん	平塚廣さん	
第4章 女性たちが見た戦地	バナー	滋賀県が中国に派遣した皇軍慰問団（慰問先で歌う女性たち、舞台上で江州音頭を披露、トーチカで記念撮影、漁船で移動中の一コマ、腕章をつけた善野令子さん）	善野令子さん	昭和18年
		南京病院にて	藤井憲一さん	
		病院本部	藤井憲一さん	
		伝染科病棟前にて	藤井憲一さん	
		旅順にて	竹村芳子さん	
		哈爾浜（ハルビン）にて	竹村芳子さん	
		新京忠霊塔前にて	竹村芳子さん	
		竹村（旧姓西村）芳子さんの満洲旅行日程（「日誌帳」を抜粋・要約）	当館作成	
		善野令子さんの慰問日誌（抜粋・要約）	当館作成	
		トラックでの移動	善野令子さん	
		軍歌を斉唱する皇軍慰問団	善野令子さん	
		ホテル前での記念撮影	善野令子さん	

滋賀県平和祈念館 第34回企画展示

暮らしの中の戦争一日々の生業と食事―

(会期：令和6年1月5日～6月23日)



筍売りに集まる人々（戦時中、現在の近江八幡市北里学区）

ごあいさつ

昭和6年（1931年）の満洲事変以降、日本は中国と戦争状態となりました。戦線は、太平洋にまで拡大していき、日本政府は戦争を遂行するために、暮らし中にある資源や物資等を統制しました。そのような中で、戦時中の人々は、どのように暮らしを立て、食べていったのでしょうか。

戦時中の商店は、体験談によると当日配給される品物だけが並び、閉店するお店が増えたといえます。農家では、収穫したお米を供出しなければなりません。働き手を戦地へ送った家では、昼夜問わず農作業をしましたが、家族が食べるための食糧を確保するのがやっとのことでした。

配給品となった生活用品や食糧は、十分な量が行き届かなくなりました。人々は、日々の食糧を求めて、物々交換やヤミ市へ行きました。敗戦後は、引揚者の増加などにより、食糧不足がさらに深刻となりました。

滋賀県平和祈念館では、体験談と資料をもとに戦争によって資源・物資が統制され、滋賀県内に暮らす人々の生活が変わりゆくようすを紹介します。

令和6年（2024年）1月5日

滋賀県平和祈念館

はじめに 身近な品物が配給品・代用品となる

昭和 12 年（1937 年）に日中戦争が始まると、政府は、国民に対して戦争への協力を促しました。また、必要な資源や物資、労働力を軍や軍需品の生産へ集中させるための政策をおこないました。

日中戦争開戦当初から、少なからず国民生活への影響が想定されており、国民に対して消費の抑制や代用品の活用を求めました。昭和 13 年（1938 年）には、鋳物、金属製品、ゴム製品や皮革製品の民間での使用が禁止または制限され、代用品が製造されました。

なかなか終わらない戦争。日々の生活に必要な食糧や日用品は欠乏していきました。国民に対して、昭和 15 年（1940 年）から都市部を中心に必要な数量を公平に配るための配給制度が導入され、全国へ拡大しました。しかし、食糧不足・物不足は解消されませんでした。



信楽焼の作業風景



陶器製の郵便ポスト

明治 5 年（1872 年）に郵便事業が始まると、全国各地に郵便ポストが配置されました。明治期は、火事に強い鉄製の赤

色丸型ポストが普及しましたが、戦時体制下にはいると鉄製の郵便ポストの代わりにコンクリートや陶器の郵便ポストが出現しました。

子どもの履物—運動靴が配給品となった—

昔の子どもたちの履物は、藁で編んだ草履でした。昭和期に入ると次第に運動靴（「ズック」とも言います）を履く子どもが増えました。しかし、戦争によって、運動靴が配給品となりました。

子どもの運動靴は、学校を通して配給されました。数に限りがあったので、クジやじゃんけん等で決め、当たった子どもへ配られました。配給された運動靴は、布地が薄く、ゴムがすぐ割れ、粗悪なものが多かったようです。靴がない時は、藁で草履をつくり履いていました。



「国民学校にて縄縫い風景」

【体験談—町のよろず屋さん—】

小林 幸子さん(守山市)

戦時中は、軍で使うものの生産が優先され、生活に必要な品物が不足するようになりました。生活に必要な食料や衣料品は配給制、切符制となり、決められた場所、決められた数だけ購入することができました。

よろず屋。今のスーパーのちっちゃいの。ないもんないねんもん。学校の運動靴やらでも、みんな配給で取りに来はるやろ、子どもらが抽選で当たって。そういうもんを売ってたの。一括して、うちへ送ってくるさかい。これはなに学校の分、これはなに学校の分ゆうて送ってくるのやわ。学用品も食料品も、そうやって売ってたし。

私のうちは、文房具からなにから、何でも売ってましたんや。そやから、私は不自由したことがなかったの。食べ物でも、百姓の人が、なにが欲しいゆうて、お米持って来はるねん（いわゆる物々交換）。

【体験談一 供出した宣徳火鉢】

H さん（東近江市）

昭和16年（1941年）、「金属類回収令」が公布され、家庭にある鍋や火鉢などの貴金属やお寺の鐘などを供出しました。人々は「金属供出」といい、仕事などで必要な金属以外は差し出しました。

終戦の少し前、金属供出で家にあった宣徳火鉢（真鍮製）をいくつか出した。木製の台が付いていたのであらかじめ外し、火鉢の部分だけを上羽田の光照寺へ持って行った。持って行くと、その場で村の人が金槌で叩いて壊していた。多分、二度と使えないように、また横流しにしたり誰かが持ち去らないようにするためだったと思う。あちらこちらの家から供出された金属類が山のように積まれていた。

宣徳火鉢は、家にとって大切な行事の時に使うもので、正月ですら使っていなかった。よほどのおめでた事などの時に使うものであった。黒光りした真鍮製の火鉢で、複雑な装飾が施されていた。把手（取っ手）にも飾りが付いていた。火鉢一つ一つに木製の台が付いていた。残ったのは木製の台だけで、それも子どもの玩具にしていたから今はこの3個しか残っていない。宣徳火鉢はそこそこの数があったと思うが全部供出してしまった。日常に使う火鉢ではなかったから別段不自由はなかったが、貴重品でもあり今思うと惜しいものである。

【体験談一 代用品 陶製の釜】

國友 義一さん（長浜市）

家でご飯を炊いてた釜。母親が使っていた。戦争中後半の昭和18～19年（1943年～1944年）頃や。一升ぐらい炊ける。当時、うちは6人家族。両親と子ども4人やった。足らんけど、戦争中やで、そんなに食べられなんだで。うちは百姓やってたけど、供出が厳しいさかい。ほんでも、田舎のことやで、豆入れて増やしたり、大根刻んで入れたりして炊きましたわ。



実際に使用していた陶製の釜



衣料切符制図解点数表（物資配給購入券保存袋の裏面）

図解点数表は、点数によって買える衣料品がわかるように、絵で示しています。切符制度では、点数分の衣料切符と代金を支払って衣料品を手に入れることができます。しかし物不足のため十分な品数がなく、ほしくても買えませんでした。



配給品のシャツ



左は戦時中の配給された品々、右上は金属の代わりの代用品



左：衣料切符、右：家庭用米穀配給通帳

配給制度

戦争が長引くと、日常の生活に必要な衣料品や食料品などは、国が管理する配給制となりました。切符制や登録制のほかに、町内会や隣組で配給するところもありました。

第1章 資源獲得、統制経済と供出の強化

戦時体制下の資源—統制と供出—

資源の乏しい日本は、以前から多くの資源を輸入に頼っていました。戦前の輸入品は、綿花、米、油糟、鉄類、硫酸アンモニア、羊毛、毛織物などがありました。日中戦争以降、戦時体制下となった日本は、重要な資源や物資を軍需品の生産へと集中させました。戦時体制下における重要な資源は、石炭、鉄、石油、銅、ゴム、綿花などであり、多くは輸入品でした。

一方、民間における資源の使用は、統制されました。昭和13年（1938年）には、ガソリンや石炭が切符制となり、綿製品の製造・販売が制限されました。

また、鋳物、金属製品、ゴム製品や皮革製品の使用が禁止されました。政府は、金属製品や皮革製品の代わりとなる品物の製造を推奨し、生活の中に浸透していきました。

日中戦争以降、日本政府は、官公庁や民間に対して金属類の資源回収をおこなっていましたが、昭和16年（1941年）の「金属類回収令」では、お寺にある梵鐘や家庭にある鉄、金属類の供出が求められました。

戦時中の仕事について、農業、ブリキ屋、漁師、眼鏡時計屋、旅館、和菓子屋などで働いた方々の体験談を紹介します。

【体験談—肥料がないさかいに、農作物が取れなんだー】

犬上郡甲良町長寺東和楽会のみなさん
戦争中は、食糧増産が重要政策のひとつでした。農家では、より多く収穫するために肥料は必要でしたが、化学肥料や有機肥料は次第に統制されていきました。農家の方々は、昔ながらの方法で肥料を自家でつくり、工夫していました。

K.Tさん：肥料やらないさかい、取れへなんだ。

O.Tさん：ほうよ、みな、肥桶ばかりやたで。下肥。

O.Yさん：肥料がないこやで、たちまち米は作れせんわ。あの下肥。よそのね、都会のほうの非農家の人の肥を汲んできて。肥取りゆうてな、八日市やら能登川やら。八

日市よう行かほりましたわ。歩いて、リヤカーで。みな、迎えに行ったもな。あっはっはっは。だんなが肥取りに行かほった。

K.T さん：大八車みたいなもんや。大八車とゆうてもな、金の輪でな。ほんまに、リヤカーやったら有難かった。リヤカーのゴム車がありましたんやわ。

O.Y さん：ずーっと肥取り、もう、毎日行かほりました。

O.H さん：子供でな一し、ちょうど、沖村まで一里（約3.9km）ぐらいある。

O.H さん：春日橋よ、あの愛知川の川まで。愛知川の川まで、みな、八千代橋とかいうところまで行かほったんやな。

O.H さん：ほこらまで、迎えに行ったこと覚えてますわ。

O.Y さん：先引きゆうて。もう、あのへんは疲れはるで、ここへもんで来るの。

O.H さん：ほんで、今の子みたいに塾やなんやのてはなかったけど、そういう事に忙しかった。家帰ってから子守りさせられるかな、何か。

O.N さん：恥ずかしかったわ。後々、ずーっと恥ずかしかった。肥取りの先引きゆうのほんまに恥ずかしかった。

H.R さん：(当時は) 自給自足やで。

K.T さん：牛や馬を飼うたりな、ほと、ほれの糞

H.R さん：嫁もらうにやったら、せんち（トイレ）よう行きよるやつもらえ、ゆうてな、あっはっはっは。

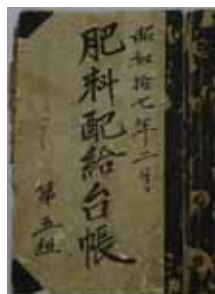
H.Y さん：ほれしか、肥料が（なかった）。

O.Y さん：ほんでもやっぱり、お腹ふくれるまでな、あの、サツマイモよばれたりしてましたで、ほら、出るのは出ましたやろうけど。

肥料の統制

お米や農作物などの植物の栽培に使われる肥料は、日中戦争から統制がはじまりました。肥料の統制は、化学肥料にはじまり有機肥料まで対象が拡大し、それとともに昔ながらの下肥（人間の糞尿を肥料にす

ること）やたい肥などの自給肥料の増産が奨励されました。



左：「昭和拾七年二月 肥料配給台帳」

右：隣組の台帳などを保管していた木箱



【体験談—肥料はなかった—】

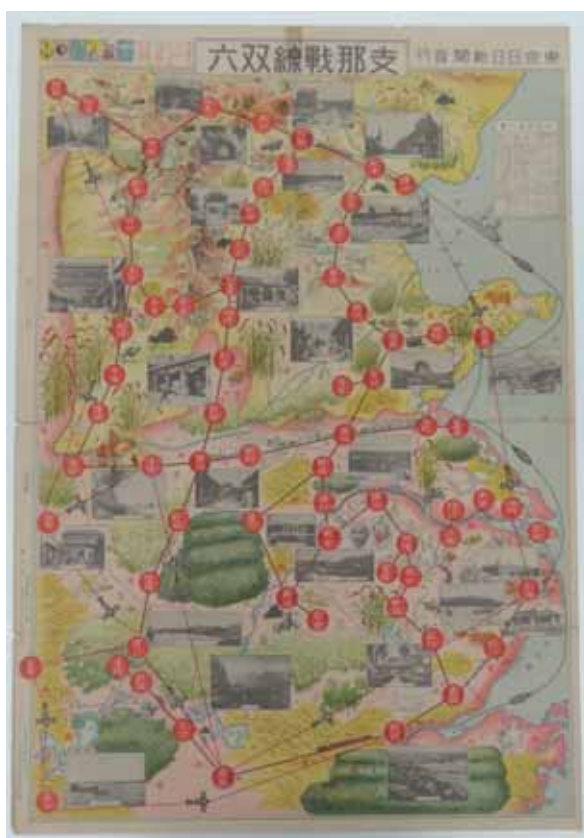
K さん（米原市、女性）

戦争中はもう、肥料てない、ニシン糟をやるか、山でたちばゆうて、ツツジの木やとかを刈ってくる。雨降りにそういう草刈りして。束にしてもらって、急な山から持って降りてきて、田を掘らはると、そこへ一掴みずつはさんでいきました。それが肥料でした。6月ごろの田植えでした、4月ごろになると田を起こしかけはったで。ニシン糟もカマスで配給で来たんと違うやろか。ええとこを食べました。身欠きニシンゆうて。肥料はその糟みたいなとこをやりました。

私ら学校へ行ってた時に、肥料用のニシンを食べられると思って、食べて病気になった子もありましたで。やっぱり中毒おこさはったことがありました。小さい子ですけど。何せ食糧難やったで。



鉄と銅をお國の為に



すごろく「支那事変双六」(東京日日新聞社発行)
中国を中心とした大陸の都市と資源などが掲載されています。

第2章 戦争によって変りゆく街と農村

【体験談一町のブリキ屋さんー】

町のブリキ屋さん S さん (愛知郡愛荘町)

その時分 (日中戦争前) には、亜鉛引き鉄板のトタンで桶をこしらえて掛けていたのや。それ以前は、イギリスやアメリカから来た石油の一斗缶やらをこぼってそれで桶をこしらえたんや。ほんで、ブリキをつこうて桶やらをこしらえたから「トタン屋」と

ちごうてブリキ屋ちゅういわれらしい。家庭金物もつくってた。バケツに鶴瓶、杓、ジョウゴ、米唐櫃ちゅうもんもつくってたんや。

滋賀県ブリキ屋組合

昭和 10 年 (1935 年) になると、まだ戦争も始まってないんやけど、仕事がだんだんと少のうなってきたわづかな仕事でも取り合いせんならん。安う請け負わなならんゆうようなことばかりしてられんさかいに、組合こしらえて値段をきちんと決めてやどうやろうゆうことで、昭和 10 年 (1935 年) に蒲生、神崎、愛知の三郡のブリキ屋で鉄葉組合をこしらえたんや。

ほして、昭和 12 年 (1937 年) に戦争が始まると、材料ちゅうもんは配給やいいよって、なんや月に 10 枚か 15 枚ぐらいしか亜鉛引き鉄板の配給がなかったんや。ほんで雨どいは禁制品、豆入れは禁制品、バケツは禁制品いよるやろ。ほと、こしらえるもんもあらへんなんだけど、今まで月に 50 枚も 60 枚も使えたもんが、月に 10 枚や 15 枚では仕事にならんやろ。ほんで、鉄葉組合をもうひとつ大きいして、滋賀県ブリキ屋組合ちゅうもんをこしらえたんや。

軍の弾薬箱づくり

日中戦争が始まると、今までの仕事が一切ないようになり、軍需品の製造をしなければお金が入らない状態になった。軍需品しようと思うと組合をこしらえなあかんから、昭和 12 年 (1937 年)、戦争が始まるとただちに滋賀県鉄板組合をこしらえたんや。

ほいて、軍の仕事さしてもらいたいで何か斡旋してくれゆうて、県の商工課へ行った。ほいて舞鶴の海軍の弾薬箱やったんや。もちろんほれは県が注文を受けて、組合に下請けさしてくれるわけや。ところが、今ゆうて今、金にならへん。試作品ちゅうもんこしらえて契約するのにふた月からみつ月かかる。ほいで 100 個なら 100 個おさめて、金下がってくのがほれからふた月ほどあとや。一つの仕事さしてもらうのに、おおかた半年ほどかかったんや。呉の海軍工廠でも思わしいなかって、組合でやるにやさかいに、仕事がいくらでもあるようなものないやろうかいいうて、県の商工課へ頼みにいったんや。ほいで、大阪の砲兵工廠の弾薬箱があった。陸軍の弾薬箱やさかいになんぼでもいるさかいにゆうて、砲

兵工廠の弾薬箱の請け負いしたのが、昭和 13 年（1938 年）の 11 月のころやった。

【体験談―戦時中の旅館―】

旅館の女将 Y さん（大津市）
観光客でにぎわう石山寺の周辺には、多くの旅館が建ち並んでいましたが、戦争に入ると閉める旅館が増え静かになっていったといいます。旅館業を営んでいた Y さんは、本業の合間をぬって挺身隊として、東洋レーヨンの勤労奉仕もしていました。

旅館業

旅館の周辺は、戦前は石山寺に参拝する客でよくにぎわい、今よりも多くの旅館があった。戦争中は参拝客や観光客はぱったり途絶え、唐崎や滋賀里にいる兵隊に面会する大阪や近畿から来る家族が泊まりに来た。

旅館はなんでも配給になり、組合を通して大津まで物資をもらいに行ったりした。マッチや糸まで配給になっていた。旅館の玄関のところで食堂も営んでおり、代用食として乾めんを出していた。たまに米食がある日には、どこで聞くのか、朝から客がずらっと遠くまで並んだ。雑炊を売ったことはないが、泊まり客は自分で米を持って来ていた。米を差し出して、弁当用の握り飯を頼んでくる客もいた。

石炭が配給になった。それも不足すると、客にいちいち「お風呂ができませんが」と断った。客の方も「非常時ですから」と納得してくれた。瀬田付近にはサンヨーや住友など、東京から疎開して来た工場が多くなり、その寮に入った人たちが時々泊まりに来た。配給の酒は 1 人、銚子 2 本までと決められていた。おかずはあまりなく、サツマイモのツルや軸、サツマイモ団子なども工夫して出していた。

敗戦後

敗戦後しばらくは客がなく、まったく商売にならなかった。それでも配給は実績支給なので、旅館を休むわけにはいかない。大きな旅館は、GHQ に接収された。

【体験談―町のメガネ時計店―】

眼鏡時計店を営んでいた T さん（高島市）
昭和 18 年（1943 年）に T さんの夫が軍隊へ入った

後は、義母と 2 人で時計メガネ店を経営しました。戦争によって材料が統制されていく様子を語っています。

時計

男手が減って時計の修繕などが大変難しくなった。すべてが配給制。県の時計組合から掛時計は月 2 ～ 3 台しか配給がなかった。掛時計の歯車は、ジュラルミンのような白い柔らかな材料で作られるようになりました。

腕時計は、当時は高校入学時に買うのが普通で、入営時は誰でも持っていた。修理の注文が多く、分解掃除して歯車の真ん中の穴がしだいに大きくなって行くのをハンダで塞ぎながら磨いていた。機械を磨くための揮発油も配給で、月々警察署へもらいに行っていた。腕時計のバンドは軍隊で靴か何かの余った皮を 2 か所だけミシンで縫ったもので、すぐに壊れるようなものだった。これらの補修品は京都へ仕入れに行った。しかし、職人も軍隊に取られてからは、時計の修理は断った。

メガネ

レンズは五零（小さい円形）、寸五、ボストン型の 3 種類であった。レンズが円形のため、枠を筒形にはめて伸ばせばレンズをはめることができたので、饗庭に演習に来た兵隊たちのために、姑と二人で腕が痛くなるほどたくさんメガネを作った。当時付近にメガネ店はなかったのも、一手に引き受けていた。レンズや枠などの材料は、大阪の空襲が激しくなってきた時、大阪の間屋が閉業するので 1 箱送ってくれたから、商品は豊富にあったし、足りないものは京都へ補充に行けばよかった。メガネは最後まで配給にはならなかった。

レコード、楽器

戦争中は演歌調や浪花節のものがよく売れた。戦争前はレコード会社に注文すると、飛脚が運んで来てくれて、お金を払えば良かったが、やがて大きなメーカーは契約をストップして来て、しかたなく京都の衣笠まで取りに行った。100 枚のレコードを運んだ。レコードも時計も仕入れさえすれば、よく売れ、大変喜ばれた。洋楽、クラシックなどはこの辺りでは聞く人がなく、仕入れていない。禁止されてはいない。

戦後になってから、歌謡曲や洋楽やクラシックがぼちぼち売れるようになった。楽器はハモニカを売っていた。戦争が激しくなっただけからはハモニカは扱っていない。蓄音機はゼンマイがよく切れ、修理の注文が多かった。戦争中は販売していない。

【体験談—山村の暮らし 木炭の供出—】

山村に住むYさん(高島市)
Yさんの家は農業のかたわら、木炭をつくり販売していました。昭和19年(1944年)、国民学校高等科2年生(14歳ごろ)の山村の子どもが体験した戦時下の暮らしと木炭の供出についてお話をいただきました。

山の子どもの暮らし

学校は小学校までやったんや。ほして、伊黒というところに高等科があつて、そこへ4kmの道を毎日通たんや。自転車なんか皆持つてゐる時代とちやうかつだから、皆歩いて行つてた。

雪道のときは立いたなあ。学校に着くまでに、もう膝ボンから上あたりまでズブタンボや。学校着いたとたん火鉢にかぶりついてたんや。ほんでも、戦時中やったさけいに、大きい火鉢に火をおこしてくれるねんやけど、朝一遍だけ、小使いさんがおこしてくれはると、もう、後はないんや。炭が貰えへんのやさけい。まあ、一日これだけと決めて、学校も焚いたはったんやろなあ。

炭焼きの供出

戦時中は、大人もあの時分は、松根油ちゅうて松の根を掘つてきて、下にな、それを加工ちゅうのか、油にする工場があつたんやわ。そこへ運んでいって、そこの仕事を手伝いに行つて、みんな割り当てで行つたり。家の防火訓練もあつたわ。鹿ヶ瀬のお寺とか会議所であつたわ。それで、あの時分、生産能力半分やったんとちがうかなあ。

炭を供出に出したら、屑しか残らへんかった。ほんで、屑をぎょうさんこしらえるんや。供出の量は一人が気張つてこれぐらい焼けるというあれがあるやろ。わしの窯やったらこれぐらいやという。中に、またなんというか生産者の長みたいなんがおるわけや。それが適当に決めはるねん。そういう人らが決めはったことは守らんなんわけや。それで、言わ

れた分は出さんなんわけや。ほと「わしはこんだけしか焼けなんだんや。おい、おまえ、ちょっとゆとりがあつたら、おまえのを分けてくれ」と。せやけど、屑はけっこう残つた。ちょっと燻るけど。

だいたい炭焼きというのは家内工業みたいなことやさけいな、男一人の仕事でないわけや。家族みんな寄つて、親っさんが切つてくれた木を嫁はんが運んだり、ほして、子どもが手伝いに行つたり。ほで、炭出しに行くのでも、嫁はんとやつたり、親子がやつたり、家族みんながやつてたわけや。せやから、働き手の父親が戦地に行つたりしたら、それでもう終いや。そうなつたら、そんなもんわかつたさけい、供出はせんでもようなる。せやけど、米の方は働き手がおらんようになって、面積に合わせて供出はあつた。(木炭は米と比べたら)厳しさはなかつた。生産者にしたら、ただ検査がうるさかつただけで。

農林規格というのがあつてな、良い悪いで等級つけられるんや。ほで、原木の品種というのかな、それでも分けてな。

昭和16年度木炭生産各区目標

昭和15年度の実績と昭和16年度の各区の目標を示したもの。

**【体験談一魚はようけおったわな。ギギなんかもの
すごうおったわー】 漁師のTさん（大津市）
戦前の琵琶湖の漁**

冬場は北湖や。夏場は南湖の方が魚が多いけど。これからは、ドンドンドンドン北向いて、魚は深いところに行きよる。というのはね、琵琶湖の魚は暖かいところが好きで、冬になると逆に琵琶湖大橋からこっちは水が冷えて冷たなる。せやけど、北湖の方が底は暖いわねえ。年間を通じて、(水温が) 6度くらいある。こっちは冬になると、氷点下になってくるわね。ほと、暖いところへ移動する。ほんで、夏場はまた反対になるでよ。北湖は、20~90 メーターになるとね、一年中一定の温度で変わらへん。せやさかい、こっちの水が暖くうなったら、魚が冷たいところからこっちに来よる。産卵時期も重なってきて、夏場はこっちの浅いところにおる。冬場はこれから秋にかけて、今現在は 20 メートルの所から、30 メートルにいて、これからドンドンドンドン深い所に行きよる。

今のエンジンやと、琵琶湖の長浜、今津までは、その日の内に朝出て帰ってくるわな。昔はそんな訳には行かへんしねえ。エンジンを付けても小さいエンジンやさけい、帆を付けてた。エンジンかけて、風によって帆を掛けて、その帆の力を利用して。その帆によって、燃料の使用が少なくなつて。そういうような考えもしてたわねえ。

その時分は漁そのものは、まあ、今と比べたら雲泥の差があるけどな。けど、魚はようけおったわな。今のだいたい網でも、4分の1程度やねえ。それでも、昔は、オオ〜！と言うてた。そして、いろんな種類の魚がおった。まあ、エビなんか、琵琶湖のゴミと言うてたわな。捕っても売れへんさかいになあ。イサザでも、モロコでもおったし、今おおかた絶えよったけど、ギギなんかは、ものすごうおったわな。網にいっぱい入つて。

**【体験談一兄2人が兵隊に行きよったんで、小学校
を出てすぐ船に乗りましたー】 Mさん（大津市）**

(戦時中は) 魚を捕る人間が当時は少ないわな。漁師が皆兵隊に行つてしもてるから。せやから残ってるのは年寄りと、兵隊に行けへんギリギリの若い

もん、わしの歳ぐらいのもん。ほんま言うたら、高等科2年生まで(学校へ)行かんなんねんけどな、私が高等科1年生に入った途端に一番上の兄貴が1月に兵隊に行つたでな、それからずっと乗ってるさかいに、わしが一番若かったんと違うかなあ。わしの同級生は、高等科2年まで皆学校に行つとるわな。わしとは働き手が無かったさけいに。親父がおったんやけど、親父は今で言うたら町内会長をやつとったんで、その仕事が忙しいんで、船にはわし一人で乗つとったんや。

漁業は統制。統制経済というのがあつてな、捕ってくる魚の値段が皆決まってるんや。単価が決まってるんやから。とにかく、覚えてるのはうなぎが一貫目、今の4キロやな、それが6円。ジヒナマズが1円80銭。それは覚えてるわ。魚屋さんがな、当時は組合を作つて、そして、結局魚屋さんも統制を受けてるわけやから。せやけど、考えてみたら今よりも昔の方が良かったんと違うやろか。ボロ着てても恥ずかしなかつたし、食べるもんもないというても、ぼくらは魚を捕ってるから、百姓と物々交換ということな。案外、漁師は戦争中でも食うもんはあつたな。まあ、無いというたら、当時は着るもんぐらいいかなあ。

エンジンはあるが、油がない

(戦時中は) エンジンは付いたんだけど、油が無い。せやから皆押して、昭和30年前半ぐらいまでは、油が無かつて。エンジンは付いたんだけど、押して出たな。ほんで風が吹く時だけ、エンジンかける。もう緊急の場合だけやわな。

堅田の漁師は琵琶湖全部や。せやから夏の漁になると3日に一遍か4日に一遍帰つて来るぐらいでな、もう出っぱなしや。今は違うけどな。

漁の最中にグラマンに襲われる

船は、墨汁に菜種油を混ぜて黒く塗つたで。逃げ場所というのが無いさけいに、白い船の帆を黒ろう染めたり。忘れもせんのが8月14日の終戦の前の日に、ちょうど今の中主の沖でグラマンが何を思たか、船を目掛けて撃つてきよったんや。親父と二人で乗つてたんやけどな、うなぎがよう捕れた日でな、その日はうなぎを16貫ほど釣つたんや。その時にグラマンが6機きよったんや。それが最後やったな。



琵琶湖の漁師

【体験談—戦時中の八百屋 お店を閉ざしたような状態でした—】

八百屋の〇さん(東近江市)
〇さんの実家は八日市(今の東近江市内)で八百屋を営んでいました。食料品が配給となると、配給品は受け取る人数の数量だけが店頭に並びました。戦

時中の八百屋さんは、品物を自由に仕入れることが出来ませんでした。

何もかも配給でしょ。そのころはお砂糖を売っていたんで、お一人さんに半斤(300 グラム) ですよ、月にね。それでチケットを持って来られるんです。それで、チケットと交換でね。自由には買える物って何もございませんでしたから。自由に売れません。あのころはね、お砂糖、バターでしたか。

戦時中は、家族がどうにか息を繋げるという程度でした。ですから、自分たちの食料のお野菜なんかは、父がサツマイモや小さいものを作りましたわ。自分たちの食べ物は作らないとね。お米は配給ですから、家で作ったじゃがいもを入れて、お米よりじゃがいもの方が多いご飯を食べてました。サツマイモの茎を、配給の種油で炒めたりね。種油も店で扱っておりました。

配給のある日は、お店の前に列ができる事もありましたね。前はね、いろいろ売ってましたが、そのころはまったく店を閉ざしたような状態でした。店先には、配給の物がポツンとあるだけで。さびれたもんです。配給の無い日はガランです。ですから、自分たちの食べる分は作らな仕方ないんです。

【体験談—お菓子屋さんと言っても看板だけやったからね—】

武田 倫江さん(長浜市)
食料品や衣料品などが配給制や切符制となった戦時中の街の印象を語っています。昭和 18 年(1943 年) 当時、武田さんは長浜国民学校(今の長浜小学校)の 1 年生でした。

まあ、思い出と言ったら、食料がない、街に出ても、魚屋さんも、八百屋さんも何にもないの。だんだんお店がなくなってきてね、小さいころはいろんなお店がありましたけども。配給制度になっちゃったから、お菓子屋さんと言っても看板だけやったからね、何にもないんですもんね。

【体験談—従業員は、徴用やら兵隊に行ってしまう—】

野村 善一さん(彦根市)
野村善七商店は、犬上郡中川原村出身の野村善七さんが、明治 26 年(1893 年)に彦根町銀座で創業した紙類の卸問屋です。紙類の卸を本業とし、王子製

紙の代理店などになり、障子紙、印刷用紙類、チリ紙などを周辺の小売店に卸しました。障子紙は自社の工場で、一般家庭用に加工して商品化しました。その後、文房具類も扱うようになり、学用品や帳簿、インクなど取り扱い商品が広がっていき、次第に主体商品となっていました。

当時、日支事変（昭和12年（1937年）からはじまる日中戦争のこと）言うてました。ほいで、それも、私のほうのお店には丁稚（住み込みで店の雑用などを奉公をする少年）や番頭がいましたんで、それが皆やっぱり兵役に行ってしまうんで、ほいで大変だったんですね。言うなれば、小学校卒業したら、うち、丁稚に来ますやん。うちに住み込んでましたで、皆。それが、二十歳になったら兵隊に行ってますがな。

自分とこの商売はもう配給なってもうて何もあらへんで。ほいで、従業員は全部、徴用やら兵隊に行ってしまうて、もう私が、店の開け閉めから皆させられた。もう大変でした。

人手がないでしょ。ほいで私に皆、何もかもせな。ね。ほいで、うちの親父いうのは体が弱かったん。ほいで、もうしょうがないさかいに、彦根の学校行けっていうて、彦根工業専門学校（戦後は、滋賀大学経済学部にとめられた）に入ったの。



従業員の出征



えびす講売出し 野村紙文房具店（昭和10年11月18日）



彦根市銀座商店街の防火訓練の様子

戦時中の農業用具

農業で生計を立てていたYさん（女性）は、夫と義両親、ふたりの子ども5人で暮らしていました。夫は昭和19年（1944年）に戦死しました。

夫が出征した昭和18年（1943年）末から、家事と子育てをしながら、義両親と田んぼの仕事をしました。「私は他人の2倍働かなければならなくなりました。当時の田んぼの仕事は本当に辛かったです。」と語っています。

Yさんが戦時中に使用していた農具



苗かご 苗を運ぶ時に使う入れ物。天秤棒で担ぎます。



糞なおし 糞を広げるものです。



天秤棒 女性用。男性用はもっと太くて長いです。もっこ 天秤棒の両端にかけて、少しかさの高いものを運ぶ時に使います。

【体験談—家族分以外のお米をすべて供出せよ—】

高月町東物部のみなさん（長浜市）

肥料の配給が、一戸に硫安（硫酸アンモニウム）三合ほどで、たいへん苦労した。田んぼには、おもに、レンゲ草を鋤込んだりハンノキの新芽の出た枝を鋤込んだりした。だが、一方では、ハンノキは田んぼに日陰を作るので切り倒せとの命令もあり、矛盾していた。百姓をしても、食べるものは十分にはなかった。それは、供出が厳しかったからである。

こんな計算で、供出量が決められた。一反の米の収量は、何俵。お前の家では、何反耕作しているから、一年の収穫量はどれだけ。そこから、自分の家の一年間の消費量が差し引かれて、残りは全部供出せよということだった。政府で決めた収穫量には中々至らず、米を供出するために、農家でも、サツマイモや大豆・カボチャなどをご飯に混ぜて食べた。



皇紀二千六百年記念開墾地 北里校での代かき

コラムー彦根市安清乙町と戦争ー文書綴りにみる 戦中から戦後にかけての隣組ー

昭和20年(1945年)3月末から翌年の昭和21年(1946年)11月にかけての市役所や警察などからきた調査依頼文などの文書や、安清乙町(今の安清自治会)内の隣組から町内会長へ宛てた文書あわせて622枚が綴られています。

文書をみると、アルミニウムや銀をはじめシュロの皮などの供出を求めています。供出や回収という言葉だけをみると、50件以上ありました。また、終戦後も、さまざまな物資の供出をお願いしたようです。防空関連では、6月10日付の「防空態勢ノ急速整備ニ関スル件」の文書以降、市や警察署、各町内会長が対策をとっていったことがわかります。

昭和20年10月4日に進駐軍が滋賀県へ来ました。進駐軍の対応や労務者数や労務内容を把握するための調査が行われています。また、戦地から帰還した住民を迎え入れる行事がありました。

戦後の昭和21年(1946年)に入ると、戦争によって中断したエビス講が再開し、にぎわいを取り戻していく街の様子がわかります。



彦根市安清乙町 文書
(昭和20年3月末～昭和21年末)



第3章 銃後の食事

【体験談ー食糧難はひしひしとー】

Kさん(米原市)

Kさんは、祖父母と両親、きょうだいあわせて12人の大家族でした。農業を手伝いながら、イナゴを取って佃煮にしたり、伊吹山の山菜を取っておかずにしました。食べ物で工夫したことをお話いただきました。

イナゴ捕りもよくしました。袋に入れて取ってきて、大きな鍋で佃煮にしたりしました。田んぼの消毒をしないからイナゴがいっぱいたんです。理科室やったと思うが、大きな釜で茹でて、しょうゆで佃煮にしたり、乾燥させて、出しじゃこの代わりにした。香ばしくておいしかった。そのままの格好やけど、何ともなかった。みんなが食べはるし。食べるものがなかったで、何でも食べられたんですわ。

高等科時分(12~14歳のころ)の昭和15年(1940年)はサツマイモの混ぜご飯、菜っぱの混ぜご飯を持っていきました。田んぼを親が作ってましたんで、多少なりともお米はありましたけど、なんせ一反に三俵です、私らも兄弟8人でした。ほして、祖母と両親とで12人家族でした。大家族で、食糧はほんまにね、もう。

伊吹山へギボシ(食用植物の一種)をね、(小学校)5年生ぐらいの時にお母さんと、5合目ぐらいになるかな、子どもでもカマス(藁むしろを二つ折りにして、両端で綴じて封筒状にした入れ物)負うて、お母さんのも負うて採りに行きました。それをおひたしにしてね、それでお腹を膨らすぐらい。ほして、茹でて干しといて、ご飯に混ぜて食べたりもしました。食糧難はほんまに、ひしひしと。

その時にね、お魚もそんなにあたりませんし。ここらはもう、海に遠いし、お店がなかったし。出しじゃこさえも、長浜まで買いに行かないとなかった。親が大八車で、炭やとか柴やとかつけて売りに行つて、そして帰りに買ってきてくれた。昔はみんな柴やとか炭ばかり使ってた。

今はもう食べませんが、イボ菜ゆうて葉っぱにイボがちょちょこと着いてる葉っぱが、軟らかくておいしいんや。それをご飯の中に入れて混ぜたり、いろんな木の芽を採って入れたりして食べました。ギボシでも、誘い合いして採りにみんなが連なって行きました。それをご飯に混ぜたり、おひたしにしてお腹ふくれる程食べたりしました。鶏も飼うてました。食べるのは盆、正月だけでしたわな。お父さんがつぶして。卵はありましたけど、飼うても10羽ぐらいでしたわな。

【体験談一娘が「家で食べるご飯は細かいクズ食べるの」ちゅうて泣かれましたー】

吉田 越子さん(近江八幡市)
軍隊へ入った夫を太平洋戦争で亡くした吉田越子さんは、義母と2人で六反あった田んぼでお米を作っていました。

娘のみよこが泣かれましたわ。「みんなほんな出してか、家で食べるのこんな細かい、細かいクズ食べるのー」ちゅうてよ。大きいのが食べたいち

ゅうて、泣かしたのはなあ。家に残しとるのは、細かいのばっかし残して、大きいのはみな供出に。ほれも等級つけてもろてよ、出しましたがな。ちいさいの、クズはあかんちゅうことや。ほういう厳しいなあ……。お米かて、どんだけ田作ってたら、どんだけ出せーって、ほんなやかましい言わはりましたがな。強制的に、うん。今やったら、どんだけ売ろうと、自分のあれでなんどすけどなあ。ほの時分は、何反作ってたら、決まって何俵出せーちゅうて決めはったでなあ。百姓でもおかゆ食べてましたでなあ。ほの時分でもなあ。

【体験談一農家の食事 白いご飯はよう食べられなんだー】

甲良町長寺東和楽会の皆さん(犬上郡甲良町)
戦時中の農家は、田畑の面積に応じて供出する農作物の量が決まっていた。家族が食べる分は保有米として確保できましたが、供出した後は小さいもの、割れたお米が多かったようです。

O.H さん：ほらあの、じゃがいもまでも供出があつてな。ほらほんまに、こんな小さい芋でも、丁寧に捨てないでよばれたんやわ。百姓やでもな。

O.Y さん：小麦はあつたわ。百姓やから、もう二毛作やで、稲作ったら、小麦か大麦かビール麦か。それも供出した残りを。

H.R さん：それも二番麦や。

O.R さん：二番麦を粉に引き換えに入ったり。

H.R さん：二番麦を粉に換えてくれるにや。あれ。

K.H さん：ご飯の半々ぐらいは大麦を入れてよばれたもんな。白いご飯はよう食べられなんだ。

O.N さん：ほんな白いご飯はない。

O.Y さん：今みたいに、あない、押し麦になったらへんでな。家の麦を入れたんやさかい、おいしいないにやわ。まあ、都会の人とはまたね、ほういう米はありましたで。まだ、喜ばんならんな、話聞いとると。(お米は)強制的に出されたで。ほんなもん隠しといてもわかるさかい、全部出されましたで。

H.R さん：ほんなかでも、結構うまいことやらはる

人もいるにや。
O.Nさん：地下掘って隠したり。

【体験談―農業をやったかて、ろくな物が食べられへん―】 Oさん(高島市)

第一そんなもん食べたら叱られる。それに、農業をやったかて、今みたいに収穫があらへん、肥料かて、ろくすっぽあらへんし、米かて一反に二俵か三俵採れたら上等や、米はほとんど採れへんかった。これは土地によって状態が違うだろうけど、そんなような状態だったな。

私はおやつという言葉の意味が小学校6年生の時に初めて分かった。おやつなんてないから、おやつって何のこっちゃと思ってて、おやつという言葉はこの辺では、「ええもんくれ、ええもんくれ」と言ったんです。学校から帰って来ると、山へ遊びに行つて、やぐみを食べたり、桑の実を食べたり、いろんな事をして食べたわね。今、庭のつつじの葉のところに白い実がありますが、つつじもうと言って一種の病気(もち病)ですが、あんな物は採って食べて、みんな食べてしまってたんですよ。食べられるさかいに、おやつでしてん。

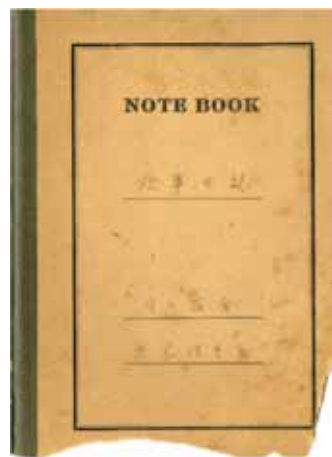
甘い物なんてせいぜい芋飴と言って、芋で飴を作るくらいで、甘い物なんて、配給で来るくらいで、何があろいね。おかずを炊いても、塩を入れて醬油をちょいちょいを入れて、醬油だつて配給だから、何ぼでも買えるのと違うんだから、そんなような生活をしてたんと違うか、そりゃあ苦しかったで。

『炊事日誌』74日間の疎開児童たちの食事

東京や大阪などの都市では、激しくなる空襲に備えて、子どもたちは空襲の少ない地方に学校ごとまとまって移動し、生活しました(「集団学童疎開」)。昭和19年(1944年)9月2日、大阪市の堀川国民学校の児童253名が滋賀県の今津町(今の高島市今津)へ集団学童疎開してきました。堀川国民学校の児童が食べた食事内容が『炊事日誌』に記録されています。

『炊事日誌』は、堀川国民学校の寮母さんを務めた方が、同年9月2日から11月18日の74日間、220食の献立のほか、食材の調達や食事後の児童の様

子が書かれていました。配給のお米の量が減ったため、ほかの食材とあわせた混ぜご飯が増えてきました。また、おかずの品数や量も少なくなりました。次第に配給の量が減っていった様子がわかります。



『炊事日誌』の表紙

月	日	献立	分量	備考
九月	五日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	六日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	七日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	八日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	九日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十一日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十二日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十三日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十四日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十五日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十六日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十七日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十八日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	十九日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十一日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十二日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十三日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十四日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十五日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十六日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十七日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十八日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	二十九日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
九月	三十日	味噌汁、煮物、漬物	五升	

9月5日火曜日の献立、『炊事日誌』より
「先生が集めたシジミやカラス貝をよばれました。」
この時は、五升のお米を炊いていました。

月	日	献立	分量	備考
十一月	十七日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	十八日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	十九日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十一日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十二日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十三日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十四日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十五日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十六日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十七日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十八日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	二十九日	味噌汁、煮物、漬物	五升	
十一月	三十日	味噌汁、煮物、漬物	五升	

11月17日の献立、『炊事日誌』より
サツマイモご飯や菜飯といった混ぜご飯になりました。
お米の量は、三升五合に減りました。



11月9日のお昼ご飯、『炊事日誌』より



11月9日のお昼ご飯 サツマイモご飯、白菜のおひたし、漬物
当館ボランティア戦時食再現グループが調理したものを食品
サンプルとして製作しました。



面会日

面会の日は、疎開児童とその家族と一緒に食事をしました。



大阪市菅南国民学校の疎開児童の開墾の手伝い



琵琶湖で魚釣り（大阪市菅南国民学校の疎開児童）

琵琶湖や寮の近くの川で魚堀みをしたという体験談があります。



バンバラをもって雪かき（大阪市菅南国民学校の疎開児童）

昭和19年（1944年）の冬は、雪がたくさんふりました。

戦時食の代名詞 すいとん

すいとんは、小麦粉に水を加えて団子をつくり、煮立てた汁に落として作ります。小麦粉が無い場合は、大豆やイモ類を粉状にしたものを代用したり、あり合わせの野菜を入れて煮汁にしたりしました。戦争末期によく食べられた代用食です。



『戦時食生活—混食、代用食、雑炊の栄養献立—』
(昭和19年1月、滋賀県発行)

[illegible]

「節米栄養食献立例」、『戦時食生活』
(昭和19年1月、滋賀県発行)

【体験談一戦時中の和菓子屋さんー】

和菓子屋のＴさん(野洲市)
戦争中は、砂糖が配給制となり、入手が困難になりました。和菓子屋さんを営むＴさんは、砂糖の代わりに芋などのでん粉の甘味物質を使用して和菓子を作ったようです。

うちはお菓子を製造してたんで、芋からお砂糖を取りました。親類が大きい百姓やったでな、芋をぎょうさん買うて、ジョウセンしたりな。ほんで、それから最中をこしらえたりな、そして、余ったお米を二日か三日に一遍私が自転車に乗って、今みたいにええ道やったらええけど、昔の悪い道を、八幡まで最中の皮を買いに行きますねん。そら、飛ぶように売れましたで。せやけど、年寄りと私が作る分やで、そう作れませなんだけど。

お菓子とは、主人がいる時は主人も作ってましたけど、私も、作り方を2～3年習いましたから、一緒に作ってました。せやけど、原料を買って作るのとは心安いけど原料がないんで、おじいさんの長年の経験でね。野洲にビールを作ってはる工場があって、ビールをつくる種、ビール麦というんでしゃるか、それを買って来て芽を出して、ほんで、釜で炊いて、それを寝かせて汁飴を作らはるんですわ。まあうちだけ違くて、ここらのうちでは皆、お米とかお芋でジョウセンを作る道具がありましたでな。炊く鍋から、皆ありましたでな。

小豆は手に入らんなんだんで、お芋で餡を作るんですわ。小豆やなしにな。手に入るものだけを使ってお菓子を作ってはったんです。もう、そら、なんぼでも、買いに来やりましたわ。ほんで、どうして作るんやというてな、他のお商売屋さんがな、よう尋ねに来やりましたわ。そういうのは、みんな、おじいさんが考えた。

もう、そんな時分に、食べとうても、そこらに売
ってははしませんがな。ほんで、そのお芋を絞って、
汁飴を取った粕に、また自分で作った汁飴を入れて、
お団子にしはるのです。ほんで、それを、また一回
焼かはるんです。そこは、商売人やったんでしやう
な。それを、買いに来やはる人がいやはるんですわ。
どっからか聞いて、遠いところからも来やはったで。
せやけど、そのころで、おじいさんは60を超えては

ったし、病気を持ってはったんで、作れる数は知れてましたけど。



農会主婦会協同水あめ製造講習

【体験談—水あめ、醤油、味噌づくりの講習会—】

高月町物部のみなさん（長浜市）

何もかもが品不足である。だから、出来るだけのものは、自分たちで作ろうということになっていた。小麦粉で醤油を作る講習があった。麦芽で飴をつかった。親父たちが一生懸命作っていたのを思い出す。ソラマメで出来た味噌があった。大豆は主食並みで少なかったからだ。ソラマメの味噌は、やはり味が落ちた。サツマイモの菓子もあった。

【体験談—戦時中のおやつ—】

甲良町長寺東和楽会のみなさん（犬上郡甲良町）
戦時中の子どもたちのおやつを紹介します。

- 0 さん：昔はね、ゆりこ団子で、二番米なんですね。
ほんで、それを、昔はもう、つかんと、白米にせんと、玄米なり、ほの粉に挽いて、石臼で粉にして、こねて「きづけ」ゆうてね。「切込み」ゆうか、かぶらの葉っぱの間引きをきざんで。中身に入れたり、尾から入れたり、素朴な味で。上焼きだけして焼いて。昔のお風呂は藁で焚いてたんです。糠もくべて、焚いた。その火で、もう一回それを焼くと、香ばしい焼けるといいます。
- H さん：藁やら糠で焼くとな。こっそりと焦げるのがうまいにやわ。炭やらで焼くと、上が焦げてしまいよるでな。
- 0 さん：こんがりと上手に焼けるんです。
- H さん：戦時中のなによりのおやつやった。

- 0 さん：主食みたいなもんですね。もう、あんまりおやつやなしに。戦時中ね。うーん。ほんで、よいお米は供出に出して、ほして、二番米でね。
- K さん：昔は粉にしたあれやったら、もっと口当たりはザラザラやったな。
- 0 さん：きょうび、そんなまずいのは食べませんけどな。
- 0.H さん：粉そのものを臼でぐるぐるんとかう夜なべにゆりこを石臼で挽いて。今は機械でさあ一つと擦ってくれはるで、細かいで、口当たりがよろしいにや。
- 0 さん：毎晩擦ってましたわ。もう、正月前やと、いりこでのな、みな家でな、大麦煎って。はったい粉、それをお湯にかき混ぜて、よばれたし。おやつは新聞にほれをちょっともうて、砂糖ゆうたかて、余計ないでな。もう。まあ、それがおやつでしたわ。私ら。

そのほかに、梅干しを竹の皮に包んだ「さんかく」やはったい粉、ふな焼き、ふかし芋やおかきなどを食べていました。



『食べられる野草』（陸軍獣医学学校研究部著、昭和19年6月20日再版）

戦時中に推奨された食材や調理法などが記載されています。



祈念館のまわりでみつけた野草

第4章 食糧難—戦中から戦後にかけて—

配給

【体験談—配給ちゅうと太鼓をたたいてくれはんねん—】

吉田 越子さん（近江八幡市）

砂糖の配給、油の配給いうてね。ここはずっと太鼓たたかいましたわね、人が集まるのは。油の配給ちゅうと太鼓たたいてくれはんねん。油のあれ（入れ物）もってもらいにいくねわ。砂糖の配給ちゅうて言うてくれはると、もらいにいきますねわ。ほういうことどしたわな。

太鼓たたいてくれはると、入れもん持ってもらいに行きますにや。ほんで油の配給やと、ほれもってもらいに行きますにや。

ほんで、味噌も醤油でも、家で造ってなあ、造りましたがなあ。ほれに塩があらしませんやかいな。ほと米とほの塩と。ほういうヤミ屋さんがいやはってよー。替えてもらうんやった。ほと、ザラザラのなあ、ザラメみたいな塩でなあ。ほれでお醤油造ったりなあ、してましたがな。配給の醤油にほれを足

してなあ、薄い薄い醤油を造ってよ、色のついてないな。

【体験談—役場の配給係—】

K さん（米原市）

K さんは、昭和 19 年（1944 年）から女子青年学校に籍を置いたまま、役場に勤めはじめました。役場では配給係の仕事に就きました。

当時女の人は少なかったですけど、税務係やらで 5 人いました。その時は役場全部で 10 人くらいいましたかな。村長も兵隊に行かれましたでな。将校さんでしたけど。2 年の内に村長が 3 人替わられました。

配給係の仕事

妊産婦の方に鯉がよう効くさかいにゆうて、鯉を仕入れはって、紙を鯉の目玉にぺたぺた貼って、取りに来やはるように配給した覚えがあります。食糧難やさかいに、妊産婦の方が栄養不足になるとあかん。あんな時分は、“生めよ増やせよ”やったさかい。

お米やほういうものでも家族の人数割にして、チケットを送ると、農会の方へもらいに行かかったと思うけど。各字の区長さんへも渡していた。塩なんかも配給があったと思う。それも、みな区長さんを通じて、渡したようなことを思ってますわ。

たばこなんかも、青年になると買える権利がありますで、たばこ屋さんは別ですけども、役場から「たばこが吸えるようになりましたので、売ってやって下さい」という証明書を発行していました。違反するといけませんので、生年月日やらきちんと入れます。それがないと、たばこ屋さんはくれはらんわけ。それを思い出しましたわ。

衣料品も配給でしたし、指定した店がありましたで、衣料切符を区長さん宛に送ったことも、ようありました。区長さんへはよう、封筒を書いた覚えがあります。

【体験談—結婚式の特別配給—】

T さん（東近江市）

市辺のほうから農業指導員で勤めていた主人が桜川の役場へ転勤で来まして、農会の主任がお世話してくださって、ほの人と結婚したんです。結婚した

のは昭和 17 年（1942 年）4 月 12 日です。

結婚式は昔はみな家でしました。貸衣装屋さんありませんしね、だいたい娘がいたら最初の娘に留袖をこしらえて順繰り、順繰り来てね。ほいで、私も女では 5 人目ですので一番上の姉の留袖を借りて、主人の家に行きました。

主人の家の仏壇に参って、ほんで 2 人が並んで、そこへ親戚がずうっと並んでくれはって、お膳並べてね。親戚も両方で 20 人ぐらいの質素なものでした。戦時中やから派手にしたらいかんということだね。でも、結婚しますからいうて届け出したら衣料切符を 5 枚くれはるんですにや。特配いいましてね。ほんで、砂糖もお米も結婚する時には特配というのがありました。

【体験談—米の配給統制係—】

↑さん（東近江市）

昭和 17 年（1942 年）4 月に結婚するまでは、桜川の役場に勤めておりました。

役場のなかに桜川村の農会という農業の指導をするよなところがありました。ほんで、私は昭和 16 年（1941 年）に入っていますので、農会のお米の配給統制係をやっていました。

家ごとに台帳をつくりました。家族は大人何人子ども何人で、その家のお米は一年分どんだけという量は決まっていますので、それによって、非農家ですとお米の配給切符を月いっぱい出しまして、その切符でお米の配給所へ買いに行かれるわけです。大人一人三合ないぐらいやったと思います。農家でしたら作付反別にとれる量はだいたい決まっていますので、自分とこの 1 年分食べる量を残してあとは全部供出するということになっていました。作付面積と収穫量を計算して、あんたのところはこれだけ供出なさいという通知を出してね。



「米穀消費者台帳」

家族の人数と属性によって保有米の量は決まっていました。

【体験談—ネズミみたいな形をしたサツマイモ】

中澤 光子さん（東近江市）

戦時中は、三食食べたが、お米の量がだんだん減っていった。お米は黒かった。

ご飯のカサを高くするために、サツマイモとカボチャを一緒に炊いた。当時のサツマイモは、ネズミみたいな形で、今のようなおいしさではなかった。配給されるサツマイモは苦くかたいものも入っていたため、もらっても半分は食べられなかった。しだいに配給も遅くなった。

非農家の家は、田んぼの畔を利用して、大豆を植えた。成長した大豆は、すりつぶしてお味噌にした。

戦後の 3～4 年の間は、食べる物がなくて苦労したという記憶がある。メリケン粉で作ったパンを食べた時、とてもおいしいと思った。

家庭用米穀配給通帳（昭和 20 年（1945 年）1 月 1 日～9 月 1 日まで）

通帳には、配給される食べ物の品名と量が記録されています。配給は、月 2 回程度、お米のほかにも豆類や芋、粉などが配給されていました。



左：家庭用米穀配給通帳（表面）、右：割当表

家庭用米穀配給通帳（配給の内訳）

上から、配給月日、品名、数量、価格、配給所印。

【体験談—蛇溝町の配給所—】

食料や衣料などの配給品は、商店のほかに、町内会や隣組などの地域の指定した場所で配られました。

町に配給品がくると、品物が限られてるので、該当者に告知して取りに来てもらった。主として、何銭という単位で、円単位の高級な物はなかった。衣料切符を持って商店へ買いに行く配給とは違って、醤油・酢や農家に必要な地下足袋やシャツなどがあつた。

家族数や年齢、また土地の面積などと当てはめて配布した。その他に必要な物があれば、衣料切符等

の範囲内で、商店に切符を持って行って買うことはできた。ただ、物が不足してるので、こんな手袋が欲しいと思っても、どこにでもそれがあるとは限らない。そのために、衣料切符を使い切るということではなかった。

塩・醤油等の配給は、家族に合わせて一戸当たり二合という具合。生活用品や作業着が役場を通じてきた。町内においても、どういう配り方をすればいいか困った。数がまとまってあればいいが、地下足袋が二足という具合で来るし、大きさもあるので。当てはめて配給するのに、台帳が必要だった。

「左ノ者、保有米ヲ食了シタルコトヲ証明ス」—農家でも食べるお米がない—

農家は収穫したお米を供出し、家族分を保有米として残すことができました。しかし、作付面積によって供出するお米の量は決まっていたので、不作の時期は、手元に残る保有米が少なく、収穫前になくなってしまいう状況に陥りました。

戦後、東近江市の芝原南農事実行組合には、農家から「配給米がほしい」や「お米の供出量を減免してほしい」などの要望がきたといいます。資料は、農事組合が発行した証明書であり、保有米がないことを示しています。農家も食料に困っていたことがわかります。



「左ノ者、保有米ヲ食了シタルコトヲ証明ス」

戦後

【体験談—「今回の配給はザラメよ」—】

武田 倫江さん（長浜市）

敗戦後の配給について語っています。お米の代わりに赤い色のザラメが配られました。

戦争のころはおやつなんてなかったわ。だけど、終戦になってからは、だんだん配給の中に、ザラメがご飯の代わりにいっぱい入ってて、アメリカがくれるのね、バケツに一杯のザラメばかり。「今回の配給はザラメよ」って言ったらザラメばかり、ご飯の代わりに来るのよ。ほんでカルメラというのを、毎日おやつに作ってくれました。それでも美味しかったよ。

それが、終戦になって甘いものを口にした最初かな。お砂糖なんてないんだから。

【体験談一魚の缶詰の配給一】

Ｔさん（東近江市）

終戦の時は、今日放送がありますから、正午にラジオを聞くようにと隣組からふれ歩かれましたからね。ほんで、主人も役場から帰ってきて、ラジオがない近所の方も一緒に集まって聞いてましたけども、雑音が多くてはっきり聞き取れんで、戦争が終わったみたいやなていうことぐらいしか、その時はわかりませんでした。

終戦の詔勅を聞いてしばらくしたら、鎌掛に軍隊の倉庫がありましてそこに缶詰をいっぱい入れたったらしんですや。ほんで、サンマの缶詰とかイワシの缶詰とかいろいろな缶詰を配給してくれはったんですや。お魚欠乏していた時ですから、戦争に負けてこんなたくさん缶詰もらって、ごちそうが当たるんやったら、負けてよかったな、ゆうてお婆さんたちがゆうておられたん聞いてましたけど。

終戦直後の食糧難

終戦後のほうが、食糧は不足してきましたね。親許がちょっと作ってましたんで少しわけてもらいましたけど、家では何にも作っていませんので、ほんまの配給だけでした。お米なんかずうっと切符制でしたね。配給受けたんですが、配給量がだんだん少なくなってきた、遅配になって。お米がもらえる日でも、まだ入ってきてないにやで当たらん、いわれて。ほんで、代わりにお砂糖の配給があったりね。お砂糖を米の代わりにもちろて、腹ふくれへんわいゆいもって。

ほんまにお米一合に一升ぐらいの水入れて、そこへサツマイモを細かく切ってイモがゆにしたりね。ほんでもお米が入られるうちはよろしいけども、

お米の代わりにメリケン粉が配給されて、水団（すいとん）ゆうておつゆにメリケン粉丸めて入れたこともありますね。

【体験談一卵１個が10 銭でね、闇やと 30 銭一】

甲良町長寺東和楽会のみなさん

国から配られる配給品だけではとても足りなくなりました。人々は、物々交換をしたり、また、政府が認めた価格（公定価格）よりも高い値段で売られていた闇市で買うことができました。闇市の値段は、公定価格の20 倍～130 倍の差がありました。

O.H さん：配給以外ゆうと、やっぱり闇で買わんならんゆうことや。闇や。砂糖にしろ、何にしろ、欲しい思たら高い金。ルートがあったからな。自由には買えなんだけど、まあ、金だしてでも。出してでも買うたわな。

K.T さん：ほやけど、米と替えることが多かったな。

O.H さん：みんな現金収入やさかい、自分の家で食う米をちびって、ほいて買い物や。ふっふっふ。闇市では食料品、衣料品何でも買えました。

O.H さん：酒なんかでも、好きなもんはやっぱり闇で買わんならんやろ。

O.N さん：あれ、ほんでも、物々交換は、終戦後の方が多かった。

O.H さん：終戦後やけど、ほら、終戦前も、終戦前ちゅうか、戦争中もほうやったが。

H.R さん：ほんでに、その米は。ほのもうた二俵なり三俵なりの保有米を残して交換した。

O.Y さん：ほんで、こんな米1 升50 銭やとな、闇やとな、3 円。うん。書いたあーるで。50 銭で公定の値段で闇で買うと3 円ですわ。ほんで、卵1 個が10 銭でね、あの、闇やと30 銭。

H.R さん：で、金さえあればなんでも買える。

O.Y さん：で、砂糖が一貫目（3.7 キログラム）2 円20 銭やと50 円。闇やと。昔は一貫目、2 円20 銭が普通値段で、闇やと50 円よ。50 円よ、砂糖は。

昭和20年（1945年10月）闇市の価格と公定価格は以下の通りです。

お米（一升）…公定価格53銭／闇市の価格は70円

砂糖（一貫）…公定価格3円79銭／闇市の価格1000円

短靴…公定価格42円／闇市の価格530円

※当時の大卒の銀行員の初任給が80円

『未来へつなぐ 歴史資料集』（新学社、194ページより）



戦後の闇市の様子（撮影：浅岡利三郎さん）

【体験談——番先に自由に買えるようになったのはパンやー】

Yさん（高島市）

戦後2年ほどしたら、ちょっと物が店で自由に買えるようになってきた。一番先に自由に買えるようになったのは、食物ではパンや。小麦もその時分、作ってたしなあ。最初は小麦をこんだけ持っていくとこなけパンくれるわ。とかな。物々交換や。戦後2年程は物々交換の方が生活の基盤やったかもわからん。

ほんで、魚でもこの山超えて向こうへ行くと北小松に出て、漁師町になるんや。そこへ炭一俵な、暗いうちに。まあ、言うたら闇やな。炭一俵で山越えて、ほんで魚もろて。戦時中は、警察がきびしかったから、そんなんだけへんかったけど。ほで、お互いがトゲトゲしてるやろ。非国民ちゅうて、闇するやつは非国民や、ちゅうて。戦後は、もう負けた年の正月のこしらえが、そもそも物々交換やったなあ。

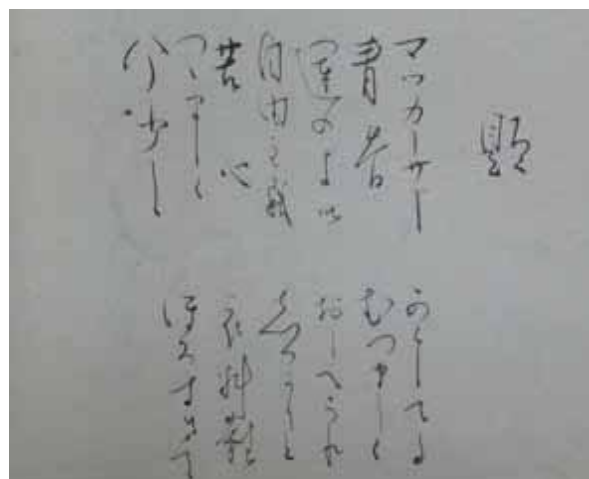
正直な話、パンやてこらのもんはぜんぜん食べたことがなかった。ほんで、戦後パンちゅうのが、なんちゅうかアメリカ式のもんやということで、食パンてなもんは、始めは全然出なんだんや。パンの物々交換は明くる年ぐらいから始まったんとかやう？その時にパンを始めて食べた。そらあ、うまかったでえ。こんなうまい食べ物があるんやと思たねえ。ほんでパン作りというとな、町の人か、利口な人ちゅうのか、パンをつくるのにな、こんな木の箱があるわけや、その箱のなかへこっちプラス、あっちマイナスの電気の版を刺すとパンになりよるん

や(※)。ちょうどカステラみたいな。ええもんは入れられへん。砂糖はないし、自家用や。それが、ここのパンのはじまりや。「こんなんをこしらえるのを習てきたでえ」と教えてくれるんや。考えてみたら、家でパンをこしらえるようになったんは、こなけの小麦を持って行くんなら、家でこなけのもんができるやんけ、というのを覚えてきたんや。こなけのパンやけど、小麦粉にしたらこなけほどやのう。ということや。

ほんでその時分、まだわしら田舎もんやったんかもしれんけど、イースト菌みたいなもん知らんもん。ほだら、利口な人がおって、親戚からイースト菌をもろてきやはる人とか、それを、もろたりな。わしは、そのとき18かそこらやったから、遊ぶことは好きやったから、そんなんこしらえて、喜んでた。「お前とこの子は、やっぱり余所へ出ただけあって、利口やなあ」と近所の人に言われたことがある。
※パン生地には2つの電極板を入れ通電させて熱を発生させると焼きあがる。「電気パン」のこと。

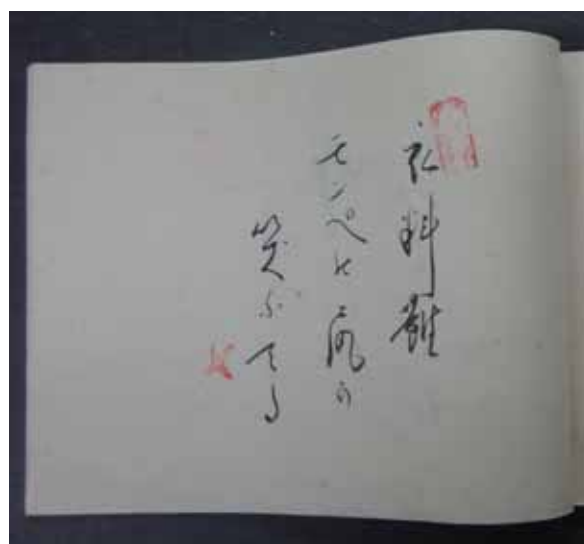


〈参考資料〉パン焼き器



「冠句集のお題」、松尾青進会親睦冠句集、昭和22年(1947年)

冠句にはお題の言葉が用意され、下の句を作って詠みます。「マッカーサー」「青春」「自由主義」「衣料難」「苦心」などの世相を反映した言葉が並びます。



「衣料難 モンペの尻が 笑ふてる」松尾青進会親睦冠句集、昭和22年(1947年)より

【体験談—えらい苦労をしました—】

北村 みさをさん(米原市)
夫の出征を機に、勤めていた学校を辞め家の農業を始めた北村みさをさんは、1人で田畑の作業をしました。収穫した作物は供出されてしまい、家族が食べるお米はありませんでした。年老いたおじいさんが亡くなり、その後に子どもが栄養失調で亡くなりました。

はつきり覚えてないんですが、昭和17年(1942

年)まで学校に勤めてました。ほんで、主人が戦地へ行ってからは辞めてたと思うんです。しょうがないから、その間は農業をやってたと思うんです。せやけど、エラかったです。今みたいに機械があつたらよろしいけど、そのころは、やっぱり男手ないとでけへんことがようさんあつたし。

子供が病気した時、ほんで死んだ時、断腸の思いをしましたけど。死というものは、人生において、一番不幸やし、「かわいそうに」と思てなあ。いくら、母親の愛やと思ても、食料はないし、医療はないし、物はないし。食物でも、医療でも、皆配給でしたから。細かい、切符みたいな紙が来ますんやで。ベラベラの紙です。それに、飴なら、飴玉と書いてあつて、私らみたいな下っぱには、いいのが来ませんかな。

ほんで、自分とこで野菜やらは採れるけど、それでも出さんならん。サツマイモも麦も出さなあきません。麦の中にね、種類がたくさんあるの。大麦、小麦、裸麦、ほでから、燕麦。裸麦なんか、十六貫(60キログラム)も出さなあかんねんで。十六貫なんて持てしませんで。

百姓は、私が妊娠してできない時は、おじいさんがやってくれてはったんですが、そのおじいさんも歳がいつて亡くならはったで。その後ですわな、娘の紀代子が死んだんは。おじいさんの葬式の時、紀代子が、泣いて、泣いて、焼香に行きませんねん。その後、すぐに紀代子が死んで行くやて。その時、私にはわかりませんやん。もう7つぐらいになつたと思うけど。支那事変の後に生まれた子やで、勝ち気な子やった。木なんかもダツと上つてな。ほんま、かわいそうなことをしました。食べもんがなくなつてね、大腸カタルみたいになりまして。家の前に医者がいってくれはりましたんけど、そんなん、あきまへんがな。もう度を越してたもんで。痩せて、3つぐらいの子供になつて「おかっちゃん」言うて、死んでいきました。心臓に注射してもろて。食べられませんのや。食べるもんがないんやて。注射かて、ええのがありませんしな。ほんで、下のテツオも同じ病気になりましたん。みんなこの辺、病気になりましたで。

子供は弱いで。栄養分は取れませんか。お魚

とか、肉とか、そんなもん配給にあらしません。野菜一点張りで。大根の葉やら、かぼちゃの茎やら、そんなん混ぜてな、ご飯のかさを上げますねん。お米がないので。

ほんま、エライ苦勞をしました。今の難民みたいな生活でした。

【体験談一栄養失調で亡くなった赤ちゃんもいましたねー】

林 スエノさん(高島市)

林スエノさんは、尋常小学校高等科2年生(14歳)を卒業後、病院勤めをしながら看護婦の勉強をし、昭和12年(1937年)に看護婦の免許を取得しました。結婚を機に、昭和15年(1940年)に今の高島市に移り住み、村でたった一人の保健婦兼看護婦として役場に勤めていました。

結婚して、こっちに来てから、保健婦がいなかったもんやから勧められて昭和17年(1942年)に保健婦の免許を取ったんです。

当時、この大津から高島町まで1人しかお医者さんがいらっしやらなかった。ほでね、大津に保健所がありまして、大津の保健所から先生がみえてね、1ヶ月に1回、処方箋を書いてくださって、お薬の人は薬局で合わせてもろて、処置は私が皆してたんです。

乳幼児の栄養指導というのもありました。それにずっとまわってました。それと、生後1ヶ月から3ヶ月の間にね、その記録を大津の保健所に送ってたんです。ほんで、なかなか忙しかったです。

戦時中は粉ミルクなんて、ほんまになかった。ほんで、練り粉です。お米の粉を練るんです。でも、それも配給です。ほと、それも証明を書かんもらわれへんから、みんなが書いてくれ、書いてくれ言うて、役場に詰めてきはりましたわ。お乳が出えへんで、栄養失調になつてる子が可哀想でね。優先的に券を出しましたわ。でも、その練り粉も、お砂糖がないでしよ。だから麦の芽を出して飴を作って、それで甘みをこしらえて、子どもが泣くとガーゼにその飴を入れてね、吸わせてはった、そんなこともありました。

ほんで、畚(ふご)いうてね。藁を入れてね、ほ

んで大きな布をおいてね、その上に座らせてね、腰をくくってね、1日そこに座らせとくんです。

栄養失調で亡くなった赤ちゃんもありましたね。お乳の出ん人でね、そういうのがありましたね。ちょいちょい栄養失調でね、どうしようもない子がありましたね。経済的にどうしてもやっていけない家もありましたね。今なら「もう2人でやめとこ」いうて産児制限をしますけど、その時分は産めるだけ産むでしょ。毎年、年子のように産んでたんですから、栄養失調になって死ぬ子がいたりね、いろいろでしたね。戦時中食べるもんがないでしょ。



新聞記事「学童の体力低下」、滋賀新聞 昭和20年(1945年) 9月23日



新聞記事「乳児の命取り」、滋賀新聞、昭和20年(1945年) 12月5日



新聞記事「死亡の大半は乳児」、滋賀新聞、昭和20年(1945年) 12月9日

第34回企画展示「暮らしの中の戦争－日々の生業と食事－」展示資料一覧表

展示資料 番号	資料名	点 数	資料説明	提供者名
はじめに 身近な品物が配給品・代用品となる				
1	陶製釜	1	戦時中、ご自宅で使っていたもの	國友 義一さん
2	代用品 貝製おたま	1	ホタテ貝の貝殻と竹でつくったおたま	個人
3	代用品 茶こし	1		個人
4	たばこ「ひかり」外箱	1		個人
5	たばこ「金鶏」外箱	1		個人
6	「家庭用マッチ購入票と配給券」(複製)	1		個人
7	国民帽	1	「公定価格認定證」、全日本帽子統制聯盟	個人
8	足袋	1	ラベル「大阪府生活用品価格査定委員会」	個人
9	白足袋	1	ラベル「大阪府生活用品価格査定委員会」	個人
10	【参考資料】スカート(子ども用)	1	ひだスカート、年代不明	個人
11	【参考資料】運動靴	1		個人
12	作業シャツ	1	大阪繊維品価格	個人
13	配給券(指定合成清酒、指定清酒、正月用清酒、特)	5		個人
14	家庭用米穀配給通帳	1		個人
15	衣料切符	1		個人
16	物資配給購入券保存袋	1	裏面は衣料切符制図解点数表	個人
第1章 資源獲得、統制経済と供出の強化				
17	統制肥料配給割当簿	1	栃木県那須郡内の地区のもの。昭和14年から15年	個人
18	昭和17年2月 肥料配給台帳	1	隣組に割り当てられた肥料の配給台帳	日野町大字野出第五組
19	日野町大字野出第五組 隣保組 木箱	1	終戦記念してつくられた木箱。隣組の肥料配給台帳などを保管していた。	日野町大字野出第五組
20	支那戦線双六	1	昭和12年12月1日、東京日日新聞発行	県所有
21	ポスター「貴重な資源をお役にたてませう」(複製)	1	鉄、銅、アルミ、紙、綿、毛、麻、ゴム、ガラスの使いみちと大切さが記載されている	個人
22	【参考資料】ざる	1	戦時中使われていた農機具のひとつ。農機具などの必需品は金属供出を免れた。	個人
23	「軍需用品供出精算二関スル件」	1	昭和13年2月25日、朽木村長から各区長宛。梅干しと乾草の供出量。	朽木市場区
24	「軍用梅干供出方ノ件」	1	昭和12月11月28日。朽木村長から各区長宛。梅干乾燥とシソ乾燥を供出したようだ。	朽木市場区
25	「供出して戴きたい鐵、銅製品」	1	滋賀県・財団法人戦時物資活用協会	朽木市場区
第2章 戦争によって変わりゆく街と農村				
26	配給伝票(線材)NO. 4	1	配給伝票の写し	個人
27	統制水産物の公表	1	統制水産物の単価表、滋賀県版	個人
28	許可を得たる禁制在庫品届	1	連水村 許可品品名別在庫数量一覧表	個人
29	「大麦増産二関スル件」	1	昭和12年～昭和16年頃。軍用の大麦の増産を求めている。	朽木市場区
30	農作業完遂のお願い	1	昭和19年8月14日、朽木農業会から各区長、農事実行組合長宛。	朽木市場区
31	「昭和二十年度 水稻耕種改善基準案／水稻施肥基準案」	1	朽木村農業指導部。耕種改善基準の設定・実施の方針を記したもの。10頁。	朽木市場区
32	「戦時節米報國運動實施要項」	1	方針・実施方法並びに一般勵行要目を記載	個人
33	「保有米節米供出国運動實施要領」	1	大政翼賛会滋賀支部、協賛滋賀県農会。農家に対して、節約し保有米を供出するよう求めた。	朽木市場区
34	「昭和16年米穀増産割当表」	1	昭和16年	朽木市場区
35	柱時計	1	信光寺にて使用していたもの	個人
36	時計	1	円形、金物製、重量物、時計部分は直径5cm、前面・側面に革製カバーあり	個人
37	印刷物「開墾運動参加者心得」	1	開墾場所 蒲生野 日時 昭和16年1月11日～15日 食事・衛生・作業等の注意	個人
38	もっこ	1	戦争中に使っていた農具	個人
39	苗籠	1	戦争中に使っていた農具	個人
40	天秤棒	1	戦争中に使っていた農具。女性用	個人
41	耒探し	1	戦争中に使っていた農具	個人
42	「朽木村農会協働作業統制規程」	1	年月日、発行者不明 10頁	朽木市場区

43	「昭和16年度木炭生産各区目標」	1 昭和16年	朽木市場区
44	「朽木村薪炭非常増産協力隊編成」	1 年月日・発行者不明	朽木市場区
45	「木炭検査規則ノ改正要点」	1 昭和14年4月6日。朽木村駐在木炭検査員から朽木各大字区長宛。	朽木市場区
46	「開墾運動参加者心得」	1	個人
コラム 彦根市安清乙町と戦争—文書綴りにみる戦中から戦後にかけての断片—			
47	彦根市安清自治会綴り	1 昭和20年3月末～昭和21年	彦根市安清自治会
48	「一般家庭用アルミニウム回収実施ニ関スル件」	1	彦根市安清自治会
49	「アルミニウム回収完遂特攻実施」	1 実施月日は、昭和20年5月2日～9日	彦根市安清自治会
50	「棕摺皮供出運動ニ関スル件」	1 昭和20年5月26日、彦根市役所から安清乙町内会長宛て	彦根市安清自治会
51	「棕摺皮供出ノ件報告 第七組長」	1 第七組長から安清乙町内会長宛。昭和20年6月1日。	彦根市安清自治会
52	「空地ノ徹底利活用ニ関スル件」	1 彦根市役所から各町内会長、学校、会社、工場、官公庁宛。昭和20年6月8日	彦根市安清自治会
53	「主要食糧ノ消費節減ニ関スル件」	1 彦根市役所から各町内会長宛。昭和20年7月25日	彦根市安清自治会
54	「市政事務ノ一部ニ付シ分室設置ノ件」	1 彦根市長から各町内会長宛。昭和20年6月28日	彦根市安清自治会
55	「防空態勢ノ急速装備ニ干スル件」	1 彦根警察署・彦根市長から彦根市内町内会長宛。昭和20年6月10日	彦根市安清自治会
56	「戦災用生活必需物資供出買上ゲニ関スル件」	1 彦根市長から安清乙町内会長宛。昭和20年7月1日	彦根市安清自治会
57	「第七組 戦災用生活必需物資供出調」	1 第七組長から安清乙町内会長宛。	彦根市安清自治会
58	「護身服装着用勸行方ノ件」ほか	1 彦根警察署から彦根市長・各町内会長宛。昭和20年8月21日	彦根市安清自治会
第3章 戦後の食事			
59	木製おかず入れ	1 アルマイトの弁当箱の代用品として使用していた。	國友義一さん
60	アルバム「集団疎開」 大阪市菅南国民学校	1 昭和19年9月2日。撮影：由上龍男さん	由上龍男さん
61	【食料サンプル】すいとん	1 当館ボランティア戦時食再現グループが再現したもの。	当館
62	「炊事日誌」	1 大阪市堀川国民学校の児童らが食べた献立が記されている。	個人
63	【食料サンプル】昭和19年11月9日の疎開児童の食事	1 当館ボランティア戦時食再現グループが再現した戦時中の献立。「炊事日誌」の11月9日のお昼の献立を参照した。	当館
第4章 食糧難—戦中から戦後にかけて—			
64	「戦時食生活」—混食、代用食、雑炊の栄養献立—	1 滋賀県、昭和19年1月	個人
65	『食べられる野草』	1 陸軍獣医学学校研究部著、昭和19年6月20日再版	個人
66	「戦時家庭経済読本」	1 日本女子大学校家政学部、昭和13年12月5日発行	個人
67	「物資配給ニ関スル行為等取締規則」	1 昭和18年、4月21日、大阪府知事	個人
68	主要食糧価格表	1	個人
69	配給割当表(小麦粉之部・麺類之部、糸之部、木炭之部)	1	上野 欽一さん
70	「主要食糧価格表」	1 食糧管理局、昭和18年2月	個人
71	芝原南農事実行組合発行「右ノ者、保有米ヲ食了シタルコトヲ証明ス」	1 雑記帳より。昭和22年5月26日	武村 友幸さん
72	「米穀消費者台帳」	1 昭和17年6月20日現在	西村 宏一郎さん
73	パン食券(配給券)	1 食料配給公団栃木県支局発行	個人
74	【参考資料】簡易パン焼き器	1 戦後のもの。小麦粉を水で溶き、フクラシ粉を入れてコンロに掛けるとおいしいドーナツ型のパンが出来上がったという。	個人
75	松尾青進会親睦冠句集	1 戦後、地域の人々が集まって読んだ冠句集。	個人
76	「昭和16年度乳幼児健康診査ニ関スル件」	1 昭和16年7月5日。朽木村長から各区長宛。検査対象の乳幼児は、昭和15年4月1日～昭和16年5月31日に生まれた14名。	朽木市場区

第34回企画展示「暮らしの中の戦争—日々の生業と食事—」写真・図表パネル一覧表

章	項	写真・図表タイトル	提供者名	備考
メインタイトル	バナー	荷売りに集まる人々 戦時中	晝田和子さん	現在の近江八幡市北里地区
はじめに		信楽焼の作業風景	近藤糾男さん	
		陶製の郵便ポスト	近藤糾男さん	
		縄ぬい風景 朝宮国民学校 昭和16年(1941年)頃	植田安正さん	
		衣料切符制 図解点数表(資料「物資配給購入券保存袋」の裏)	個人	
第1章 資源獲得、統制経済と供出の強化	バナー	すごろく「支那戦線双六」(東京日日新聞発行)	県所蔵	
		「鉄と銅をお国のために」	朽木資料館	
		「供出していただきたい鉄、銅製品」	朽木資料館	
第2章 戦争によって変わりゆく街と農村		琵琶湖の漁師 3点	洲崎寛治さん	
		表 漁業、魚種別漁獲量(琵琶湖)		県累計課 第7章水産業より。昭和18年(1943年)～昭和22年(1947年)
		表 木炭、薪の生産量		県累計課 第6章林業より。
		野村商店(彦根市銀座通り前)	野村善一さん	
		従業員の出征 昭和14年(1939年)11月17日撮影	野村善一さん	
		昭和10年(1935年)11月18日 野村紙文房具 えびす講	野村善一さん	
		昭和12年(1937年)11月17日 野村紙文房具店 えびす講	野村善一さん	
		昭和14年(1939年)11月18日 野村紙文房具店 えびす講	野村善一さん	
		彦根市銀座商店街の防空演習(8月19日～21日) 戦時期 3点	野村善一さん	
	バナー	お米の供出 女子	晝田和子さん	
		皇紀2600年開墾地北里校	晝田和子さん	
		「食糧増産のやかましく言われている時 校長先生と教員」戦時期 2点	晝田和子さん	
		出征遠家族への奉仕作業の様子	栗東歴史民俗博物館	
		お米の供出、男子、昭和10年代か	晝田和子さん	
		作付(栽培)面積および収穫量(稲、麦類、豆類、いも類)		県累計課 第5章農業より。昭和16年(1941年)～昭和22年(1947年)
コラム 彦根市安清乙町と戦争—文書綴りにみる戦中から戦後にかけての隣組—		文書綴り(昭和20年3月末～昭和21年)	彦根市安清自治会	
第3章 戦後の食事	バナー	アルバム「集団疎開」大阪市菅南国民学校、集団面会、久ぶりにお父さん・お母さんと—しょに、うれしい食事	由上龍男さん	撮影:由上龍男さん
		近江今津駅到着 疎開児童たち、アルバム「集団疎開」	由上龍男さん	撮影:由上龍男さん
		開墾、アルバム「集団疎開」より	由上龍男さん	撮影:由上龍男さん
		琵琶湖で魚釣り、アルバム「集団疎開」より	由上龍男さん	撮影:由上龍男さん
		「節米栄養食献立例」、滋賀県『戦時食生活』	個人	
		『炊事日誌』の表紙	個人	集団学童疎開した堀川国民学校の児童たちの食事の献立の記録。昭和19年(1944年)9月2日～11月18日まで。
		昭和19年(1944年)9月5日の献立、『炊事日誌』	個人	

		昭和19年(1944年)10月3日の献立、『炊事日誌』	個人	
		昭和19年(1944年)10月11日の献立、『炊事日誌』	個人	
		昭和19年(1944年)11月17日の献立、『炊事日誌』	個人	
		農会主婦会協同水あめ製造講習会	栗東歴史民俗博物館	
		祈念館のまわりでみつけた野草	当館作成	
第4章 食糧難－戦中から戦後にかけて－		米穀消費者台帳	個人	農家の世帯人数および属性を把握する台帳。農家は世帯人数分のお米を保有することができた。
		家庭用米穀配給通帳	個人	昭和20年(1945年)1月1日～9月1日分。配給時の品物と量を記録したもの。お米のほかに豆類や芋類、中には粉状のものが配給されました。
		表 11歳児 平均身長と体重の推移	当館作成	明治33年～令和元年まで。「生徒児童身体検査統計」、「学校衛生統計」、「学校保健統計調査」より
		「学童の体力低下、栄養失調」、昭和20年(1945年)9月23日の滋賀新聞の滋賀面より抜粋	個人	
		「死亡の大半は乳児 見よ、憂ふべき伊香のこの現状 救へ、農村婦人の窮状」、昭和20年(1945年)12月9日の滋賀新聞滋賀面より抜粋	個人	
		「救へ 欠食児童の栄養失調」、「体位は低下 長浜の学童も」昭和20年(1945年)12月1日の滋賀新聞滋賀面より抜粋	個人	
		20歳の平均身長の推移(昭和23年～平成29年)	当館作成	「国民栄養の状況」、「国民健康・栄養調査」より
		松尾青進親睦冠句集(昭和22年弥生中旬)	個人	長浜市高月町の地域の方々が詠んだもの。冠句は、お題の言葉があり、下の句を創作しよむようだ。「マッカーサー」、「青春」、「自由主義」、「衣料難」、「苦心」など世相をうつした言葉が並ぶ。
	パナー	戦後の闇市の様子(京都市)	浅岡勝義さん	撮影者:浅岡利三郎さん

滋賀県平和祈念館 令和5年度地域交流室展示

破られた約束―太平洋戦争下の日系カナダ人―

(会期：令和5年11月1日～令和6年2月25日)



ごあいさつ

太平洋戦争（第二次世界大戦）当時、カナダには日本から移住した約2万3千人の人々が暮らしていました。1942年（昭和17年）、カナダ政府は2万人以上の日系カナダ人をブリティッシュ・コロンビア州沿岸部から強制的に立ち退かせました。立ち退かされた人々は、内陸部の強制収容所やカナダ中部の砂糖大根農場、東部の捕虜収容所などに移動させられ、西海岸に残した財産はカナダ政府が保護すると約束しました。ところがカナダ政府はその後、預かった財産をすべて本人の同意なく安価で売却し、日系人は財産を根こそぎ奪われたのでした。

カナダには和歌山県、広島県などからも多くの日本人が移住しましたが、最も多かったのは滋賀県出身者でした。主に現在の彦根市域などから移住し、製材業や伐採業、貿易やさまざまなビジネスを営みながら、日系コミュニティを形成しました。

今回の展示では、日本とカナダの研究者による共同研究で明らかとなった、戦時中の移民たちの体験を紹介します。

令和5年（2023年）11月1日

滋賀県平和祈念館

※ 当報告書では「カナダ日系博物館（Nikkei National Museum）」から提供を受けた展示パネルについては掲載を割愛し、滋賀県平和祈念館で制作したパネルの内容を中心に掲載しています。

「Broken Promises 破られた約束—太平洋戦争下の日系カナダ人—」

本展示「破られた約束」(原題「Broken Promises」)は、第二次世界大戦期の日系カナダ人の強制立ち退き、強制収容、強制分散、国外追放の一連の政策のなかで執行された、カナダ政府による日系人財産の没収を扱っています。

1941年(昭和16年)12月8日(現地時間では7日)、日本軍がハワイの真珠湾攻撃を行なったことで、日本はアメリカ合衆国、カナダと戦争状態に入りました。アメリカ、カナダ両国で、日本国籍を持っていた日本人移民、および日本人の血を引く日系人は、ともに「敵性外国人」とされ、登録を義務付けられました。排日感情が高まるなか、戦前からアジア系移民を敵視していた太平洋岸の諸州では、日系人の集団強制立ち退きを要求する声が強くなり、ついに1942年2月に太平洋岸100マイル地域から、日系人は一人残らず追放されることになったのです。

アメリカでは内陸部に鉄条網と監視塔に囲まれたキャンプが作られ、約12万人の日系人が収容されました。一方、カナダのブリティッシュ・コロンビア州沿岸域に住んでいた約2万2000人の日系人は、州内の山間部のキャンプに収容される人、中部平原州の砂糖大根農場に移動させられる人、カナディアンロッキーで道路建設に強制動員される人など、いくつかの違う場所に移動させられました。

そのなかで共通していたのが、西海岸に残された家、商店、農場、漁船、自動車、そして一切の家財道具が、政府によって接収され、戦争中に所有者の同意なしに二束三文で売却されてしまったことでした。これによって、戦前に非常な努力で築き上げた財産を日系人はすべて失ってしまいました。このような政策は、アメリカでもとられることはなく、カナダの歴史的なマイノリティの人権侵害のなかでも、最も過酷な政策の一つと言われています。

展示「Broken Promises」は、日系カナダ人の没収財産の全記録「敵性財産資産管理局」関連の公文書をデジタル化してインターネット公開した、カナダのビクトリア大学の研究プロジェクト「不正義の風景(Landscapes of Injustice)」の研究成果をもとに、バンクーバーにある「カナダ日系博物館(Nikkei

National Museum)」が制作した博物館展示です。

日系コミュニティから七つの家族を選び、彼らの戦前のブリティッシュ・コロンビアの生活、戦争開始から強制移動・収容の体験を伝え、それぞれの家族が西海岸に残した財産がいかんにしてカナダ政府により接収され、それがどのように処分されたか、また、合意しない財産の売却にそれぞれの家族がどのように抗議したかを、当時の政府資料と当事者家族の証言の両面から描き出しています。

日系カナダ人は、戦争が終わっても、4年近くの間、西海岸の家に戻ることは許されず、カナダ各地に分散して住むことを強制されました。展示はそのなかで、七つの家族がどのような選択をし、戦後の生活を再建したのかまでのストーリーを追います。

そして、そこから、多文化主義を国是とする「寛容な」カナダに至るまでの、マイノリティへの人権侵害の歴史と、そのなかで生活を築き、権利確保に苦闘するマイノリティの姿に光が当たるよう構成されています。また、展示は人種差別の被害者だけでなく、「政府」を構成し、政策を実行した加害者の個人名を挙げ、人権侵害政策がいかん人間によって作られていくかを具体的に説明しています。

日本巡回展示について

今回の日本巡回展示では、カナダで制作された内容に加え、日本からカナダへ移民した人々がどのような地域からどのような事情で移民したのかなど、日本側の資料を新たに提供することで、カナダへの日本人移民・日系人の姿を太平洋の両側から、より俯瞰的に見えるよう構成しています。

第二次世界大戦は世界中の人たちを巻き込み、人類史上最大の被害をもたらした不幸な出来事でしたが、この大きな歴史を国家単位で見るのではなく、一国内でのマジョリティ／マイノリティの関係のなかから見ることで、人間単位の見方で戦争や人種差別について考えるきっかけとなればと思います。

日系人の戦時体験は「戦争だから国に無制限の非常時権限を与えるのも仕方がない」という言説に対して、大きな警鐘を鳴らす歴史的事実でもあるでしょう。

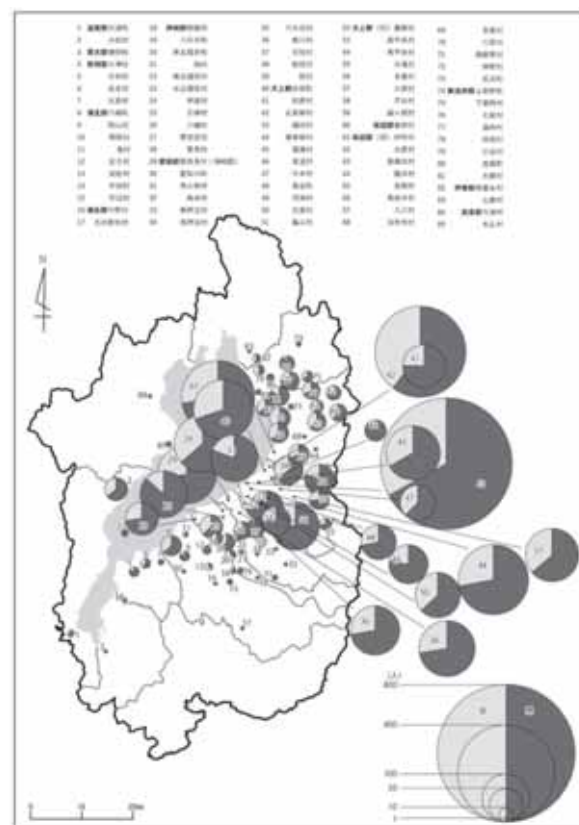
「Broken Promises 破られた約束」日本巡回展示実

「近州ソーミル、熊本ヤマ、死ぬよりましかなヘレン獲り」。この俗言は、第二次世界大戦前のカナダにおける日本人の就業構造を的確に表わしています。つまり、滋賀県(近江国)出身者は製材所(sawmill)に勤めることが多く、そこへ運搬される木材を提供するために山奥で伐木業、または炭鉱を中心とする鉱業に従事するのは熊本県出身者が多くを占めました。慣れない機械操作、倒木や落盤によって命を落とすかもしれないなら、ニシン漁(herring fishing)やサケ漁などの漁業に就くほうがよい、と揶揄したのは和歌山県出身者たちでした。とはいえ、春告魚と呼ばれるニシンの漁獲とその加工の繁忙期は初春であり、この生業も厳しかったことは間違いありません。

1920年代におけるカナダの滋賀県出身者のうち8人に1人は磯田村から渡加したのです。また、隣接する愛知郡424人(11.3%)、坂田郡からは413人(11.0%)がカナダに在留していました。つまり湖東3郡の出身者が滋賀県カナダ在留者の9割弱を占めていたのです。



第1図 カナダの都道府県別出身者数 (1923 年)
(大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』、57-58、1924 年)



第2図 カナダへの滋賀県からの移民の出身地

第1表 カナダ日本人移民史の概略

年	事 項
1877(明治10)	長崎県南高来郡口津(現・南島原市)の永野萬蔵が最初の日本人移民としてカナダへ渡る。
1888(明治21)	和歌山県日高郡三尾(現・美浜町)出身の工野儀兵衛がフレージャー川河口のスティーズトンへ渡る。
1891(明治24)	神戸移民会社による広島県からバンクーバーへ渡航契約移民が追加。カナダ領海での造船に「漁業ライセンス」が必要となり、日本人漁業者は便宜上カナダ国籍を取得。
1896(明治29)	湖東水害により、滋賀県東部からのカナダ移民が増加。
1906(明治39)	晩香坂共立日本国民学校が開校。以後、各地の日本人集住地に日本人学校が開校。
1907(明治40)	バンクーバー・星報が発行(9月7日)。
1908(明治41)	日本語新聞『大衆日報』が創刊。レミュー協定が成立。以後、移民の制限により「写真婚」をはじめとする呼び寄せが増加。
1910(明治43)	ロジャース峠の雪崩事故により日本人鉄道工夫32名が死亡。
1914(大正3)	第一次世界大戦が勃発により義勇兵の募集が開始。1916年にヨーロッパ戦線に出征。日系二世の野球チーム・バンクーバー・朝日軍が誕生。
1921(大正10)	バンクーバー・朝日軍が日本遠征。
1923(大正12)	日本人漁業者の漁業ライセンスが4割削減。
1929(昭和4)	世界恐慌が始まる。
1933(昭和8)	日本が国連連盟を脱退。
1937(昭和12)	日中戦争が開始。
1939(昭和14)	第二次世界大戦が勃発。
1941(昭和16)	日本の真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まる(12月7日、日本時間8日)。カナダ国籍を有する日本人も敵性外国人とみなされる。
1942(昭和17)	日本人に強制移住令が発令。海岸線より100マイル内陸部へ強制移住。
1945(昭和20)	日本人の「忠誠心」調査行われる。
1946(昭和21)	日本無条件降伏、ボツダム宣言受諾が発表。BC州の内陸収容所が開所。
1948(昭和23)	日本人は東部へ移動。約4,000人は日本に返還。
1949(昭和24)	日本人のBC州への移動が許可。
1951(昭和26)	日本とカナダとの正式国交が再開。
1952(昭和27)	カナダ国籍のない者の「呼び寄せ」が許可。
1962(昭和37)	農業実習生・研究生などの入国が承認。
1967(昭和42)	カナダ移民法の人種差別が削除され、日本人の移住(戦後移民)が承認。
1988(昭和63)	リドレス運動により戦時中の日本人への処遇への謝罪と補償。ワーキングホリデーの受入開始。
2003(平成15)	バンクーバー・朝日軍がカナダ野球殿堂に入る。
2009(平成21)	バンクーバーで第21回冬季オリンピックが開催。
2018(平成30)	日加友好90周年を迎える。

第1表 カナダ日本人移民史の概略

河原典史氏執筆の「カナダ日本人移民史の概要」から引用



展示風景



この写真は、現在の彦根市開出今町からカナダに移住された松宮外次郎さんの孫である松宮 哲さんから提供いただいたものです。右から2台目の自動車のナンバーは「15481」で、ケースの中に展示している購入時の書類と一致しているので、これが1921年(大正10年)に購入された自動車のようです。松宮外次郎さんは、1895年(明治28年)にカナダへ渡り、バンクーバーのパウエル街で松宮商店を経営しておられた方です。

最後のコーナーで再度紹介していますので、ご覧ください。



左：1921年(大正10年)に松宮外次郎さんが自動車を購入したときの書類

右：松宮外次郎さんの乙種自動車運転手免許証(1924年(大正13年)交付)【下：拡大写真】 いずれも松宮哲さん所蔵



【体験談—戦争がカナダの日系移民にもたらしたもの—】 小林さん（彦根市・女性）

1927 年（昭和 2 年）、小林さんは結婚されてカナダのバンクーバー（ブリティッシュコロンビア州）に渡りました。3 人の子宝にも恵まれ、幸せに暮らしていた小林さん家族をアジア・太平洋戦争が引き裂きました。

開戦の日（1941 年 12 月 8 日）に午前中の work（仕事）を終えて、駅でバスを待っていた時、「declare war（宣戦布告だ！戦争が始まった!）」と、人々が口々に叫び回っていたことをはっきり覚えています。その頃は反日感情の高まりもあって「ジャップ、撃ってやろうか」と言われたりしました。勤め先からも「私の子どもは戦争に兵隊として参加している。あなたには何の罪もないけれど、辞めて貰うより他にないのです。戦争が終わり、平和になったら、また、働きに来てください」と、丁寧に言われて解雇されました。

1942 年（昭和 17 年）3 月には、夫がロッキー山脈のブラックスパー収容所に強制連行されました。カナダ政府は「抵抗する姿勢を示さなければ、半年後、家族一緒に暮らせるだろう」と言っていたのですが、敵国でも同じ白人のドイツ人やイタリア人は収容されませんでした。肌の色が違う日本人だけが摩擦を生じさせないため、収容所に入れられたのだと思います。夫はそこで木材伐採の仕事をして、毎月 20 ドルを家族へ送金してくれました。

9 月になると約束通り、夫は戻ってきましたが、今度は家族 3 人（息子 2 人は進学のため、日本へ帰国中）で廃坑の町サンドンへ移ることを強いられました。十分な準備期間も与えられず、バンクーバーでの生活基盤や家財の一切を失い、身の回りだけの移動となりました。

ロッキー山脈の谷間にあるサンドンの町は、鉱山が廃坑になった『ゴーストタウン』のような所で豪雪地帯でした。雪が消えるのは夏の 2~3 ヶ月だけで、クマやオオカミなども町の中でしばしば見かけました。住居は古アパートを改造したものや、先遣隊の建てたログハウスなどで、一棟に 3 家族ぐらいが共同生活をしました。台所やトイレも共同でした。日系人たちの行動に対して、制約や監視の目は一切

なく、周囲に鉄条網が張られるということもありませんでした。町が山奥で、隔絶されていたからでしょう。

小林さん家族は、次に移動したローズベリー収容所で終戦を向えました。戦後、カナダ政府は「East or Japan」政策として、抑留中の日系人たちに「カナダ東部への移住か、日本への帰国か」の選択を強制しました。

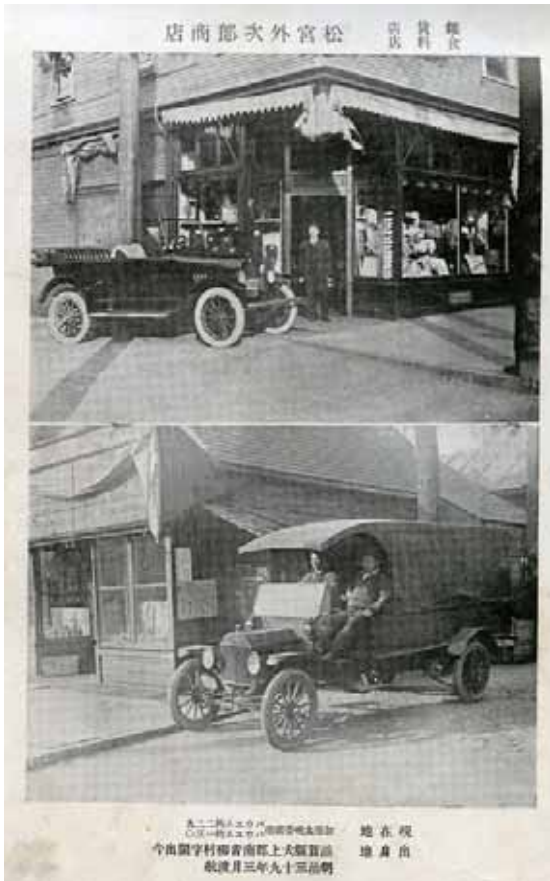
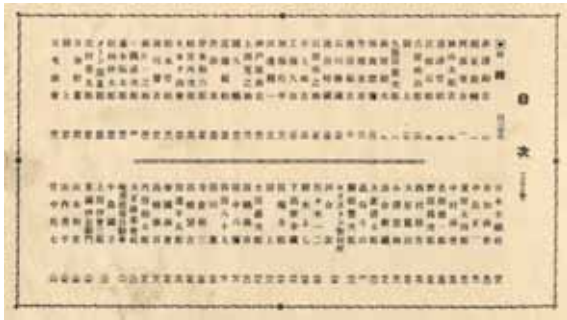
夫はカナダに残留することを希望していましたが、（日本にいる）子どもたちと、また一緒に暮らすために 2 人で帰国を決めました。戦争を挟んで約 20 年間もカナダで暮らしましたが、私が接したカナダの人たちは、みんな親切で博愛心に富んだ人ばかりでしたわ。



収容所があったサンドンの街並み（近藤さん提供）



サンドン収容所の日系カナダ移民たち（小林さん提供）



『在加同胞写真帖』第壹篇（1918年（大正7年）発行）の目次と掲載写真（目次の「三六ページ」に松宮外次郎さんの名前があります。）



松宮商店（当時の写真に着色したもの）

バンクーバー市パウエル街にあった「松宮商店」

バンクーバー市のパウエル街には、日本から移住した人たちが経営する商店が建ち並んでいました。現在の彦根市開出今町からカナダへ移住した松宮外次郎さん（1872年（明治5年）生まれ）が経営していた「松宮商店」も、そのひとつです。

今回展示している『在加同胞事業家写真帖』には「明治三十九年三月渡航」と書かれていますが、孫の松宮 哲さんのお話では、外次郎さんが移住したのは1895年（明治28年）だそうです。松宮外次郎さんは、1918～1919年（大正7～8年）には、小説や映画で有名になった「バンクーバー朝日軍」という野球チームの団長（President）も務められました。

太平洋戦争中の松宮さん一家

太平洋戦争が終わって間もない1946年（昭和21年）3月に発行された『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』には、松宮外次郎さんの息子である増雄さんとその息子である宗雄さんが一緒に写った写真が掲載されています（展示しているアルバムをご覧ください）。

この写真帖によれば、戦争が始まると松宮さんたちは住み慣れたバンクーバーを離れて、同じブリティッシュコロンビア州にあるグランドフォークスという街へ移住させられ、戦争が終わるまでの期間、ほかの日系人たちと共同生活を送ったようです。なお、「編輯のことば」によれば、松宮増雄さんはアルバム係で、この写真帖を編集されたひとりのようです。

その後、松宮さん一家は故郷である滋賀県に戻る道を選び、帰国されました。



上空から見たグランドフォークスの街（松宮 哲さん 提供）
『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』掲載写真



タマネギの種の収穫作業 (松宮 哲さん 提供)
『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』掲載写真

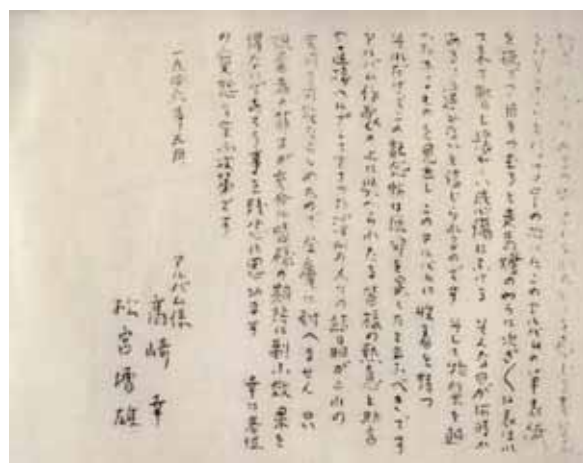


『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』(1946年(昭和21年)発行)
松宮 哲さん所蔵



上:『米加出生日本児童写真ブック』(1918年(大正7年)発行)

下:『在加同胞事業家写真帖』第一篇(1918年(大正7年)発行)
いずれも松宮哲さん所蔵



『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』の「編輯のことば」

企画以来半年、漸く出来上がりました。そして皆様の御手元にこの記念アルバムを届け得る事に無限の喜びを覚えるものです。

急転直下の終戦と急激な政府の方針発表とで今にも分散させられるのではないかとおののいた昨秋を憶えば、当然の帰結とは云いつつも民衆の声にその団結力がこの国では如何に尊いかに如実に示していると思えるのです。



『米加出生日本児童写真ブック』(1918年(大正7年)発行)に掲載されている松宮増雄さん(1909年(明治42年)生まれ)の写真

そして同じ意味に於いて戦時を通じ不遇な環境下で取って来た我々グランドフォークス在住民相互の騎結がどれ程同胞者の混乱を防ぎ押し寄せる不安の怒濤をせき止めていたかを有力に物語っていると思えるのです。

この小冊子をめくって行く毎に、その香りが各所にプンプン発散している筈なのです。吐息がむんむんする畑を這い、痛む腰をさすりつつむしった草刈りの事、流汗淋漓フォークの先をうんツと突き申し満身を込めてピッチしたへー積みのえらい事、さては晩秋になってすっかり収穫を済ますと畑は荒涼たるもの人参の殻が乱雑に残っている。それを集めて燃やしていくと、煙がゆうゆうと秋の夕空に昇って行って、何かしら人生の淋しさにも似たものを感じる事等が、トッテンポールとバファローの付いたこのアルバムの革表紙を撫でつつ眼をつむると走馬燈のようにつぎつぎに表れて来て、暫し懐かしい感傷にふける。そんな日が何時かあるに違いないと信じられるのです。そして物質を越えたあるものを見出しこのアルバムに収着を待つ、それだけでこの記念帖は使命を果たしたと云うべきです。

アルバム作製の上与えられた皆様の熱意と助言や直接ヘルプして下さった沢山の人々の結晶がこれの完成を可能ならしめたので同慶に耐えません。

只、担当者の菲才が十分に皆様の期待に副う効果を得ないであろう事を残念に思います。幸に各位の寛恕を乞う次第です。

一九四六年三月

アルバム係 高崎 幸

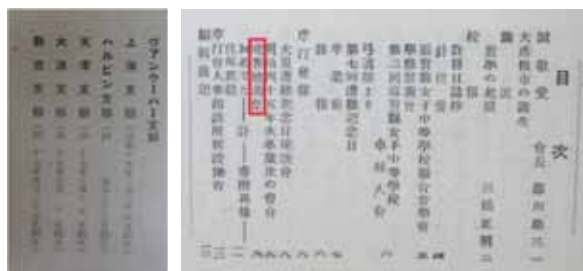
松宮増雄

(松宮 哲さんに翻刻していただきました)



左：滋賀県立彦根高等女学校の同窓会誌『芹汀』第二十号(1942年(昭和17年)発行)

右：滋賀県立彦根高等女学校の同窓会誌『芹汀』(月刊)(1935～1937年(昭和10～12年)発行)



左：1942年(昭和17年)の同窓会誌『芹汀』第二十号に掲載されている海外支部

右：『芹汀』月刊第十七号(1937年3月15日発行)の目次
彦根付近から多くの方々がカナダのバンクーバーへ移住していたため、彦根高等女学校の同窓会には、バンクーバー支部が設けられていました。1935年(昭和10年)と1937年(昭和12年)の同窓会誌には「晩香坡(バンクーバー)支部便り」「晩香坡通信」という投稿が掲載されていますが、太平洋戦争期間中の投稿は見当たりません。

令和5年度地域交流室展示「破られた約束」展示パネル・資料一覧表

展示資料 番号	資料名	点数	出典・提供者など
1	文字パネル:ごあいさつ	1	当館作成
2	文字・写真パネル「Broken Promises 破られた約束ー太平洋戦争下の日系カナダ人ー」	2	「Broken Promises 破られた約束ー太平洋戦争下の日系カナダ人ー」のホームページ(以下HPと略す)から作成
3	文字パネル:カナダ日系人移民史の概要	1	HPから作成
4	第1図 カナダの都道府県別出身者数(1923年)	1	大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』、57-58、1924年
5	第2図 カナダへの滋賀県からの移民の出身地	1	HPから転載
6	「破られた約束 BROKEN PROMISES」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
7	「日系人の財産没収は、一人ひとりの物語です」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
8	「破られた約束の地」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
9	「たくさんの物語、たくさんの声」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
10	第1表 カナダ日本人移民の概略	1	HPから転載
11	写真	1	松宮 哲さん提供写真を拡大
12	実物資料:1921年(大正10年)に松宮外次郎さんが自動車を購入したときの書類	1	松宮 哲さん所蔵
13	実物資料:松宮外次郎さんの乙種自動車運転手免許証(1924年(大正13年)交付)	1	松宮 哲さん所蔵
14	「我が家」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
15	「カオル・アタギ(阿田木薫)、エイキチ・カゲツ(花月栄吉)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
16	「ツマ・トノムラ(外村つま)、ケイコ・メアリー・ムラカミ(村上)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
17	「テイジ・モリシタ(森下灯司)、マスエ・タガシラ(田頭ますえ)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
18	「ヒロシ・オクダ(奥田博)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
19	「保護の約束」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
20	「損失をもたらす部署」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
21	「国家権力のもとでの暮らし」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
22	「政府による財産没収の10年」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
23	「抗議運動」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
24	「1941～1951年 日系人の強制立ち退き」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
25	「財産没収が残したもの」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
26	「ツマ・トノムラ(外村つま)、カオル・アタギ(阿田木薫)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
27	「マスエ・タガシラ(田頭ますえ)、ケイコ・メアリー・ムラカミ(村上)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
28	「エイキチ・カゲツ(花月栄吉)、テイジ・モリシタ(森下灯司)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
29	「ヒロシ・オクダ(奥田博)」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
30	「歴史はつづく」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
31	「私たちは、誰もが公平に暮らせる場所を提供できているでしょうか。それはどのような場所でしょうか。」	1	カナダ日系博物館からの提供データから印刷
32	体験談パネル:戦争がカナダの日系移民にもたらしたもの	1	小林さん(彦根市・女性)
33	写真パネル:収容所があったサンドンの街並み	1	近藤さん提供写真を拡大
34	写真パネル:サンドン収容所の日系カナダ移民たち	1	小林さん提供写真を拡大
35	文字・写真パネル:バンクーバー市パウエル街にあった「松宮商店」	1	松宮 哲さん提供資料から作成
36	文字・写真パネル:太平洋戦争中の松宮さん一家	1	松宮 哲さん提供資料から作成
37	図:グランドフォークスの位置	1	松宮 哲さん作成図
38	実物資料:『米加出生日本児童写真ブック』(1918年(大正7年)発行)	1	松宮 哲さん所蔵
39	実物資料:『在加同胞事業家写真帖』第一篇(1918年(大正7年)発行)	1	松宮 哲さん所蔵
40	実物資料:『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』(1946年(昭和21年)発行)	1	松宮 哲さん所蔵
41	『グランドフォークス在留日本人 記念写真帖』の「編輯のことば」	3	41のページ拡大写真と翻刻文
42	実物資料:滋賀県立彦根高等学校の同窓会誌『芹江』第20号(1942年(昭和17年)発行)	1	田中和之さん提供(当館蔵)
43	実物資料:滋賀県立彦根高等学校の同窓会誌『芹江』(月刊)(1935～1937年(昭和10～12年)発行)	1	田中和之さん提供(当館蔵)

令和5年度 滋賀県平和祈念館企画展示等実施報告書

編集・発行：滋賀県平和祈念館

〒527-0157 東近江市下中野町 431 番地

TEL:0749-46-0300／FAX:0749-46-0350

E-mail : heiwa@pref.shiga.lg.jp

印刷：株式会社モリワキ印刷

令和7年（2025年）3月31日